

是に因りて見れば、此の城は穆宗始めて築きしものなるが、當時此の附近の山間に野獸多く、獵場として最も適當の場所なれば、獵を好める穆宗は常に此の地に出獵し、遂に城を築くに至れるものならんか。然るに穆宗は應歷十九年三月、懷州に出獵して熊を得、歡飲大に酔ひ、馳せて行宮に還りしに、其の夜近侍、監人、庖人等六人の爲めに弑せらる。時に歲二十九、懷陵に葬る。此の事ありし爲めと、寒氣強きとの故を以て、慶州の地は漸次衰微し、聖宗の統和八年に至り、遂に州を廢するに至れり。

慶州の位置は、現今チャガンムレン上流にある處なるは明かにして、北は鳴珠穆沁、東は阿嚙科爾沁、西は克什克騰、南は大巴林に接し、興安嶺の谷間にありと稱するも可なり。されば遼史地理志にも巖谷峻險の文字を以て形容し、尙「……以地苦寒統和八年州廢……」の文字を見る。遼歴代の天子常に此處に來りて狩せしは、畢竟するに山深くして野獸多き故ならん。遼史にも記する如く、此の處は山地なるを以つて黒山、赤山、太保山、老翁嶺、饒頭山等の名あり。余の考ふる處を以つてすれば、此の地は明かにチャガンムレン流域の上流なり。遼歴代の天子は常に黒山、赤山、太保山等に狩せしか、又、宋大中祥符九年薛映記にも「臨潢西北二百餘里、號涼淀在饒頭山南避暑之處、多豐草掘地丈餘即有堅氷」と記せり。

慶陵の研究

而して此のチャガンムレン流域地方、即ち慶州は大に他の地方と趣を異にするものあり。恰かも熱河の行宮の如く、夏季は天子暑を避けんが爲めに行幸せられしなり。

慶州城廢せられし後に於ても、聖宗は屢々此の附近に狩せるもの、如く、其黒嶺に獵せる事は、遼史の處々に散見せらる。

聖宗屢々黒嶺に出獵せられしは、遼史の證する處なるが、或る時又た聖宗此の地に出獵し、其の地景頗る好きを愛し、遂に我れを此處に葬るべしと言はれたるなり。

遼史の地理志、慶州の條に左の文あり、曰く

慶雲山本黒嶺也聖宗駐蹕愛漢曰我萬歲後當葬此與宗遵遺命建永慶陵有望仙殿御容殿置蕃漢守陵三千戸並隸大内都總管司在州西二十里有黒山赤山太保山老翁嶺饒頭山與國湖轄失
灤黒河景福元年復置更隸興聖宮統縣三

玄徳縣本黒山黒河之地景福元年括落帳人戸從便居之戸六千

斯く聖宗は此處に葬るべきを、遺言し給ひたるものなるが、余の前に述べたる碑の文章と全く同一なり。故を以て聖宗崩御せられし後ち、其の子興宗は遺志を奉じて永慶陵(或は慶陵)を慶雲山(黒山)に建て以て聖宗を葬り、望仙、御容の二殿を起し、蕃漢の陵戸三千戸を置き

て之れを守らしめ、大内に隸せしめたるなり。又金史卷二十四、地理志「北京路」の條にも

慶州下軍軍刺史境内有祖州天會八年改爲奉州皇統三年廢境内有遼懷州遼太祖祖陵在焉
置奉陵軍天會八年更爲奉德軍皇統三年廢遼太宗穆宗懷陵北山有遼聖宗興宗道宗慶陵城中
有遼行宮比他州爲富庶遼時刺此郡者非耶律蒲氏不與遼國寶多聚藏于此北至界二十里南至
盧川二百二十西至桓州九百里東至臨潢一百六十戶二千七縣一

之れによりて見るに、金の時代にも慶陵の記載あり。且つ聖、興、道宗を葬りし事を記する
に見れば、其の慶陵の事たるや明かなり。尙ほ又、城中に遼の行宮の跡を存し、他州に比し
て富める事をも記せり。之れによりて考ふるに、慶陵及び行宮は共に慶州城内にありたるも
の、如し。

尙更に注意すべきは、穆宗の弑せられたる時の事なり。契丹國志卷五、穆宗本紀には

應曆十八年……至末年殘忍猜忌左右小有過愆至于親手刃之數年之間重足屏息人人虞禍
會醉索食不得欲斬庖人掌膳者恐禍及因捧食以進挾刃殺帝於黑山下帝在位凡十九年諡曰天
順皇帝廟號穆宗

と記せり、此の黑山は即ち黑嶺にして一名慶雲山なり。

又遼史、卷七、穆宗本紀には

應曆十九年、三月、己巳、如懷州獵獲熊獸飲方醉馳還行宮是夜近時小哥盪人花哥庖人辛
古等六遼反帝遇弑後附非懷陵……

されば、遼史記事本末は、其卷十八に於て契丹國志の文章を引用し、且つ之れに附言して
曰く

十九年、春、三月、己巳、如懷州獲熊獸飲方醉馳還行宮是夜宵格盪人花哥庖人錫衰等六
人反帝遇殺年三十九葬陵

攷契丹國志云帝醉索食不得欲斬庖人掌膳者恐禍及因奉食以進挾刃殺帝於黑山下地理志云慶州本太保山黑河之地巖
谷險峻穆宗建號黑河州每歲來幸射虎鷹獵遇殺於此州廢聖宗改號慶州其地有黑山是所載拘非懷州今從紀按懷州太宗
陵在焉穆宗特葬懷州耳懷州亦號奉陵軍在臨潢西南百里本唐歸誠州而慶州亦在臨潢西南六十里通鑑輯覽云懷州在今
巴林郡西北慶州城中遼行宮

蒙古遊牧記、卷の三、巴林の部に

旗西北百三十里有遼慶州故城遼史地理志慶州元寧軍本太保山黑河之地巖谷險峻穆宗建城
號黑河州每歲來幸後以地苦寒統和八年廢……城中有遼行宮北至界二十里南至盧川二百二
十里西至桓州九百里東至臨潢一百六十里縣一朔平、一統志按此城在喀喇木倫河旁蒙古名

察罕城周五里餘喀喇木倫即黑河黑山在其北三十里許又遼聖宗陵史地理志慶州雲山本黑山也聖宗駐蹕愛漢日吾萬歲後當葬此與宗遼貴命建永慶陵在州西二十里

ハラムレン
とチャガン
ムレン

此のハラムレン(喀喇木倫)は蒙古語の所謂Harumrenにして即ち黒河の意味なり。然るに巴林に此の河名なきに見れば、蓋しチャガンムレンの誤に非る無きか。

慶陵の位地

以上の諸書記載する處を綜合すれば、慶陵は慶州城中に存在し、臨潢より一百六十清里の地にあるを知る可し。慶陵は又永慶陵と稱す。

次に遼史、契丹國志、遼史拾遺等によりて、聖宗の崩御當時の事を見るに、

興宗景福元年七月

慶州を慶陵の南に建て、民を徙して之に實し奉陵の邑に充つ。

同 九月

躬、慶陵を視る。

同 十一月

慶陵に謁し、遺物を以て群臣に賜ふ。其山を名けて慶雲と曰ひ、殿を望仙と云ふ。

同 十二月

躬ら慶陵に行き、皇太后政を聴き、帝親しく庶務をなさず。

重熙元年五月

皇太后政を上に置し、躬ら慶陵を守る。

重熙元年七月

慶陵に謁し望仙殿に致尊し、皇太后を迎へて顯州に至り、園陵に謁し京に置る。

以上の事實に據りて考ふるに、當時既に契丹の古風漸次衰へ、既に佛事を行ひ、佛法を信じたるを知るべく、興宗殊に佛を信ずる事深かりき。續資治通鑑は帝を評して曰えらく、

至和二年八月己丑契丹主宗眞卒二十五年年四十一謚文成皇帝廟號興宗眞性佻說嘗與教坊使王稅輕等數十人約爲兄弟出入其家至拜其父母數變服入酒肆佛寺道觀王綱姚景熙獨立輩遇之於微行後皆任顯官尤重浮圖法僧有正拜三公三師兼政事者凡二十人

余は此の慶州古城に就て史學、考古學上の調査を爲したれども、餘りに専門に涉るを以て之等は他日發表する、論文の上に記載する事とし、茲には暫く之を省くも、此古城及び其他の遺物は、唐末宋初に涉れる文化の程度を知るに、最も興味ある材料なり。殊に契丹の黄金時代たる、聖宗當時の状態を知らんと欲せば、此のチンチンホトンの古城は苟くも闕却すべからず

學術上より
見たる慶州
城

るものなり。現今、住民盡く天幕生活を爲し居る興安嶺の山中に、斯る唐末文化の遺跡を存するは、頗る奇なる現象と云ふ可し。

四、小巴林王府に到る

余は以上、古城に關する大體は説き盡せるを以て、以下少しく古城附近の事に就て述べんとす。

抑も、チャガンサバラガ村は、城中の白塔及び喇嘛廟あるの故を以て、蒙古人の參詣者多し。彼等は春寒漸く去り、暖氣催さんとする頃より來り始む。只に附近村落の蒙古人のみならず、遠き地方より來るもあり。參詣者は塔を拜したる後ち、寺に於て休息するを常とす。寺には常に四五十人の僧侶あり。參詣者には茶を出して接待す。

又此の村は人家多く、支那人の商賣を營業するも多し。家屋は凡て、蒙古風即ちモンゴルなれども、役人等の住居は多くバイシングル、即ち支那風のものなり。然れども、元、住居に當てん爲めに建築せるバイシングルは、今や其の大部分は物置として使用し、古風の蒙古家屋に居住するの狀態なり。

白塔の參詣者

蒙古順禮の奇習

余等の宿泊せしは、此の村の役人の家にしてバイシングルなり。此の家に夫婦の婢僕ありて、彼等は滿洲に近き蒙古、ダラハンのものなるが、前年順禮して此處に來りたる儘此の家に留り、此の家の用を爲しつゝ、今日に及びしものなりと云ふ。元來蒙古人には、斯の如くして二年三年四年、他の地方に過ぐすの風習多しと聞きしが、此も亦その一例なり。

本日朝の溫度は十五度。

四月十八日。余等は此の村に滞在し、其の古跡風俗等に關する調査に徒ふ事三日許り。午

前八時愈々此の村を出發せり。

此の時に於ける余等の豫定は、此處より小巴林王府に赴き、小巴林王府より遼の上京に至り、更に興安嶺の方に出でんとする考なりし。即ち例の如く牛車三輛、車夫一人を率ゐて出發す。此の日氣暖くして、今迄用ひ來りし毛衣を着るの必要を見ず、朝に於て既に華氏十八度を示せり。

村を出て、より南方マンハの丘陵の間を進みしが、道は次第に大道路に出でたり。斯くして進む事十清里計りの處より、右にナラソテ、オーラ左にサイハン、オーラを望みつゝ進み行く、兩山の間は約四清里計りもあらんか、此の日の旅行中、チャガンサバラガ村より二清里

ナラソテ、
オーラ、
サイハン、
オーラ

程の處にて左方一軒の人家ありしのみ、其の後は一の人家を見ず。又一入の人にも遇はざりき。此の附近は牧草多く、馬の群を爲して戯れ居るを見たり。然れども水は全く無し。

進む事二十清里計りの處より、道少しく上りとなれり。此處に至る迄は、慶州古城中の白塔を望み得たりしが、此より以後は全く見えず。更に行く事十清里計りにして、巖石露出せる一小峠に達す。此處に石を積みたるオボあり。蒙古人はこの峠をフビンタバーと稱す。之より道下りとなる。此に至る迄右にしつゝ進み來りし、ナラソテオーラ山は終りを告げ、左方のサイハンオーラ山亦東方に向つて走り去りしが、更に新たなる山左右に見え始めたり。古城の後なる烏珠穆沁の高山は、チャガンサバラガ村より三十清里計りの間は明かに望まれたり。

興安嶺を望む

此の高山は其の山頂鋸齒狀を呈し、西の方克什克騰に向つて走り居るものゝ如く、之れ即ち興安嶺なるや明かなり。

爪要なる河

峠を降りて進み行けば、暫らくにして一河の畔に出づ、此の河はサイハンオーラ山に源を發して南流し、小巴林王府の前を経てホゴチンソムに至り、更に東に向つて流れ去るものなるが、小巴林に對しては最も緊要の關係あるものゝ如し。余等は河に沿ひて歩みしが、水流屈折甚しく、或は西岸を歩し或は東岸に渡り、二度河を横ぎれり。河上に張りつめし氷七八分

數十里の無人境

は既に解け、未だ全く解けざるものは、時々氷塊水中に落ちて大なる音を發せり。河流に沿ふて進む事二十清里始めて一村落到達す。イフォツソ村と云ふ。此の時少許の降雨ありき。峠を下りてよりは専ら河に沿ひて來りしが、河畔草多く牧場としては最も適當なるか如く牛、馬、羊等數百の群を爲すさへありしが、人家は河畔に於て一戸も見ざりき。又此の附近に於ては景色全く一變し、途上左右に當り巖石露出せるあり、又た途中烏珠穆沁に向つて旅行する支那人の天幕を見たり。

イフォツソ村

イフォツソ村の有様を見るに、盡く蒙古風にして支那風は影も止めず。思ふに此の附近は小巴林中にても、最も古風の存する處なるべし。イフォツソの名は河名イフォツソ(大水の義)に出でしものにして、元來此附近は古き時代には、大水溜なりし如く、現今にても一般に濕氣多し。此の夜は即ち此村に宿す。

本日の温度は朝十八度、正午二十度なり。

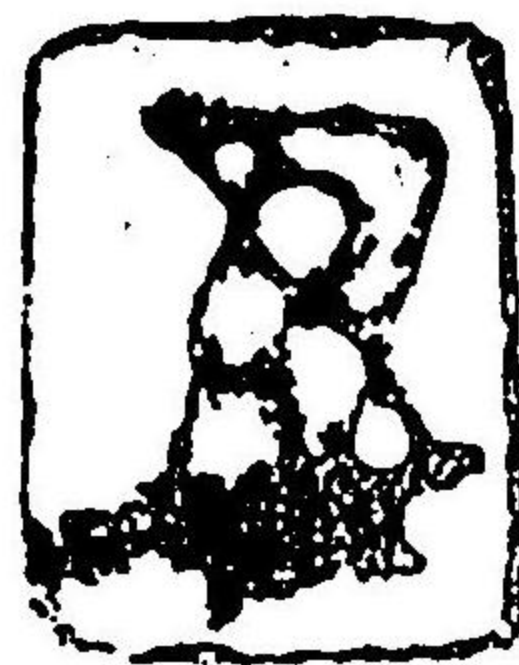
四月十九日。午前十時、牛車三輛、車夫一人を隨へて此の村を出發す。役人乗馬にて隨行せり。

初め道を東南に取りて進みしが、四五清里にして南方に轉ず。之より小巴林王府に至る道に

ホトンの村の古城

して、巖石兀立せる兩山の間を行けり。而も土地濕氣多きを以て小柳叢生せり。八清里計りにしてホトンヌアイラに達す。乃ち城のある村なり。余は即ち下車して古城に入り、其の平面圖を取り又種々の調査を爲す。此の古城とチャガンサバラガとは六七十清里の距離を爲す。城壁は總て土にて築き、今や多く頽廢せりと雖、其の高さは尙ほ一間計りもあらん。城は正方形にして周圍四清里計り、又城の中央には、之亦正方形なる土を以て盛り上げたる臺あり、其の上に相對せる二つの土徳頭を存せしが、之等は元相連續せるもの、如し。又現今其處に殘存する瓦は、悉く焼けたるものみにして、其の他金屬器の、爛れて金糞になれるもの等あるに見れば、曾て兵火に罹れるものならんか。

珍奇なる銅印
杓窠の印



杓窠の印

即ち遼時代の遺跡たるや明かなり。古錢亦多く遺り居りしかば、余は能ふ限り之を採集せしが、茲に最も珍らしきは、左圖の如き銅印一箇を得たる事なり。

印の中に書きたるは文字なるや又圖なるや明かならざれども、支

那文字に非る事丈けは確かなり。余の考を以てすれば、此は彼の遼の時代に有名なる『杓窠の印』ならんか。此の印は軍士戰場に臨む際、天子より贈はるものにして、遼史卷十一、聖宗本紀中、統和四年三月及び同四月の條に左の記事あり
統和四年、三月、丙申、歩軍指揮使穆超以靈丘叛附于宋詔遣使賜樞密使斜軫密旨及彰國軍節度使杓窠印以越征討。

同四年、壬寅、遣抹只謀魯姑勤德等領偏師以助休哥仍賜旗杓窠印撫諭將校。
尙「遼史」卷二百十六「語解」の中に此印に就て註して云へらく

杓窠印——杓窠爲鳥總稱以爲印紐取疾速義凡調發軍馬則用之與金魚符銀牌略同
次に乾隆帝の時編纂せられたる『遼史語解』卷十によれば、これを註して

雙寬

々々々 顧昂鄂安「滿洲語、海青也卷十一作杓窠

滿洲語にては即ち Shokhou なるが、蒙古語にてもこの鳥をまた Shokhou と云ふ。漢語にては海青 (Hai ching) なり。

この鳥は遼人の尤も好めるものにして、印にこれを用ゐしも又其の爲ならん。余はこのこ

ホーランコ
ロ河
オツソイフ
コロコロテ
ン河
古城の價値

小巴林王府

コロコロテ
ン河畔の遺
跡
王府に入り
て風俗復た
一變す

とに就て、聊か説なきにあらざれども、こは余の不日世に出さんとする、論文中に於て精しく記すべし。

古城の後方は屏風の如く兀立せる山にして、東西山を控え南の一方のみ打ち開く。而して又東北方に聳ゆる山脈の間より、ホーランコロの河流れ來り、西方の山の麓にはオツソイフ河流る。此の二流相合してコロコロテン河となりて南流す。又た北方の山は南に面し、西に延長するを以て道幅最も狭く、東西亦山なれば、南方より侵入し來る敵を防ぐには、要害最も堅固なる位置にありと云ふべく、ホーランコロ、オツソイフの二流あるが爲めに、亦最生活にも適せる地なり。

余は古城に關する調査を終へたる後ち、コロコロテン河の左岸に沿ひて進む。左右の山と山との間は、三清里餘にして道は主として南に向ふ。途中二三村落を過ぎ、午後四時小巴林王府に達す。本日の行程四十餘清里なり。

余は王府に達せざる前、二清里計りの處にて、石器時代の土器の破片と鐵鎧の破片とを得たりしが、之に據りて考ふるに、コロコロテン河畔にも當時住民ありしや明かなり。

チャガンサバラガより小巴林王府に入るに及び、其の風俗一變せるを感ぜり。乃ち其著し

きは女子の衣服にして、チャガンサバラガ附近にて、筒袖のもの多かりしが、王府附近にては大巴林に於て見たるが如く、主として袖の長きを用ふ。家屋も亦バイシゲル多し、余等は此の夜を王府内に送り。

本日の温度は朝十九度、正午二十度。

四月二十日。亦王府内に滞在す。小巴林王は未だ二十歳計の年齢なるが、其の父王は數年前没せしと云ふ。王妃は前々年喀喇沁より入興せしなり。王妃の未だ喀喇沁にありし時、余の妻は親しく教導の任に當りし關係より、余等は大に優遇せられ、盛んなる饗應に預れり。其の獻立の中に馬肉ありしが、此は日本と正反對にして、多く貴族の間に賞美せらるゝものなるが、近時は蒙古人も餘り食せざるが如し。

王府はコロコロテン河に臨む、其の建築は支那風のものにして、王府の南方に位する大喇嘛廟の構造は西藏風の建築なり。

五、小巴林よりウルテムレン

四月二十一日。余等は王府に滞在する事二日、諸種の調査を爲し、午前七時、出發せり、

王及び王妃
馬肉の饗應
大に優遇す

牛車三輪、騎馬の役人一人隨行す。

二六

王府の前にてコロコロテン河を渡り、河に沿ひて五清里計り南方に進みたる後ち、更に東方に道を轉ず、此の附近にも喇嘛廟を見たるが、亦西藏風の建築なり。コロコロテン河は王府の南方十清里計りなる、ホゴチンソム附近より更に西流し、コロコロテンソムにてチャガンムレンに注ぐと云ふ。余等の道を東に轉じてよりは、左は山脈にして右はマンハの丘陵なり。余はホゴチンソム(ホゴチンとは古、ソムとは寺)を調査する目的なれば、道を其の方に取つて進みしに、マンハの間なれば牛車の進行困難なり。

途上、マンハの類れたる處には、古土器多く散亂しありたるが、其中に鐵器の破片、陶器等もあり、又當時彼等住民の食用に供せし、獸類の骨片の土中に埋もれ居るをも見たり。而して其の骨片の埋もれたる土中の深さは、現今の地表より二尺二寸なり。之に據りて見れば此遺跡は、前に東翁牛特附近にて見たるものと同一なるが如く、又散亂せる土器の模様も、シラムレン河畔なる東翁牛特にて、得たるものと少しも異ならず。茲に於て余は、此等兩者の同民族の遺跡たるを知れり。

コロコロテン河流域の遺跡
ホゴチンソム調査

余はホゴチンソム附近に於ける、調査を終りて再び前の道に引返し、マンハの丘陵の間を東

に向つて進む。此の途上にも石器、土器多く存在し、又彼等の鍛冶を爲せる遺跡等もあり。余は又、開元通寶一枚を得たり。

分水嶺を越ゆ

王府を出て、より、三十清里にして一の峠に達す。蒙古語にては此の峠をシランクラタバと稱す。附近にオボあり。余等は此處に至る迄氣付かざりしが、既に峠を爲す事なれば、道は上りとなり居るもの、如し、途中石灰岩の露表せるもの及び石灰を焼ける跡を見たり。峠を越えてより道漸く下りとなる、附近古土器多し。峠を下るに及び初めて一小河の東流するを見たり。附近の住民はタバテコロと稱す。即ち此の峠は一の分水嶺を爲すものにして、地勢も漸く變化し來れるが如し。

タバテコロ

余等は峠を下り、タバテコロを渡りてより、主として河岸に沿へる丘陵を進めり。此の附近は、所謂高原的の景色を呈し來り。左右に見えし山脈は漸く眼界より遠ざかれり。

シランクラタバより十清里にして復た一の峠に達す。蒙古人はフチックと稱す。之を上り行けば丘陵にして、丘陵を進む事更に十清里、オリランウurgaイラ村に着せり。時に午後七時、行程五十清里餘なり。

オリランウurga村

此の村は、タバテコロ河畔にあり。又牧草豊富なれば最も牧畜に適すが如し、而して此の

油断のならぬ親切

村の入口には、昔時住家のありし跡とも見るべき礎石多く散在せり。

余の此の村に宿泊せる時、年齢五十計なる男ありて、懇切に余等の爲めに斡旋せしが、此の男は余等の宿泊せる家に毫も關係なき者にして、余等より物を貰ふを目的として、斯く懇切にするなり。蒙古地方を旅行するに當り、毫も其の家に關係無き者出て來り、大に親切らしく立働くとも決して注意を怠るべからず。其は即ち其の宿舍の食料等にて客を待遇し、而して客より貰ひ受けたるものは、自分の懐を肥すと云ふが如きものにして、此の日余等の遣へるも其れなり。此の事は蒙古の旅行に於て、屢々遭遇する事なれば注意を要す。

此の日余等の通過せしは道は、左右山を以て狭まれたるマンハにして、其の類れたる處には至る處遺物を存す。余は其の所に於て古瓦の破片一二を見しがそは遼時代のものなるが如し。分水嶺をなせるシランクラターよりは、水流一變して東流す、而して余の前に述べたる小河は、遼の上京に向つて流るゝなり。

本日の溫度正午は十六度。

四月二十二日。午前七時オーランウルクアイラ村の宿を出發し、四町計りにしてタバテコロ河を渡り、其の右岸に沿ひてマンハの道を東北方に進む。河の前岸には山骨露はれ鋸齒狀

インゴロ山

岩の形せる丘陵

を呈したる高山長く連亘す。之れ即ちインゴロ山なり。河水は前岸に沿ひて流れ、河畔點々蒙古人の住家を見る。此の途次、亦多くの遺物を見しが中に、白色の陶器及び布目瓦等の破片を見たり。之に因りて當時瓦葺の家屋ありしを推知し得たるが、之等は遼時代のものならん。村を出て、より十清里計りの處にて、前岸の山脈突如として丘陵の形を爲し、南に向つて走れるが爲めに道著しく狭められ、河水亦之に沿ひて南方を流る。丘陵の上に喇嘛廟あり。ソホピンソムと稱し、其の構造は西藏風なり。此附近は地頗る廣く、南方丘陵を爲し、山脈との間は十清里計りもあるべし。此の丘陵は自然に岩の形をなし、當時は要害の地なりしならん。又た此附近は地味豊かなれば河畔人家多く、彼の喇嘛廟の如きも、此の地勢を利用して建てられたるものなるべし。濶然たる平野に西藏風の喇嘛廟建ち、河畔人家の點綴するまで景色最も佳し。

更に二三清里進みて一村落到達し。此處にて牛車の牛を取り代へ、更に旅程を續けしが、暫らくして東方一大丘陵となり土地次第に開けり。河は前岸山麓を流れ、河畔に人家點々として存在す。丘陵に上りてよりは地勢更に一變し、多く大陸的光景となれるを感じぬ。此の高原は南北十清里、北にはインゴロ山遠く聳え南にはアラシヤン山兀立す。途上又古土器の

ウルテムレ

アヤマに似
たる花を見

破片散在するを見る。又蒙古人等のモンゴルアムの畑を耕せる跡ありき。斯くして午前三時頃ウルテムレンアイラに到着し、一富家に宿泊する事とせり。此の日の行程四十清里。村は其の名の示すが如く、ウルテムレン河の沿岸に位する一村落にして土地廣し。

余等のウルテムレン村に到着せんとする途中、ハラシヨロンターと稱する一峠ありしが、其の上に直立五十間計りなる一高丘あり、土人之を稱してハラシヨロンと云ふ、此の丘上に登れば附近の山川指呼の間にあり。一見直ちに其の要害凡ならざるを知るべし。此の村落は、彼の有名なる遼の上京の跡にして、當時も最も股賑を極めたる首府なりしなり。この地形は殆んど周圍山を以つて圍まれたる大平原にして、遼の上京を設けしも亦理あるを思はしむ。

此の日余等はハラシヨロンの麓に於て、一草花咲けるを見たり。其の様、我が邦のアヤマの如くにして紫色を呈す。蒙古語にて此の花をチャカラメと稱す。即ちチデアヤマなり。余にとりては此の草花こそ、今年接せし花の最初の福音なりけれ。

本日の温度は朝二十四度、正午二十度、夜十六度。

六、遼の上京調査

遼の上京の
調査に従ふ

四月二十三日。余等は昨日ウルテムレン村落に到着してより、専ら遼の上京古城の調査に従事することとなりしかば、同廿四日までここに滞在せり。

本日も亦古城に至り、種々調査なし宿に歸りしが、夕方より天俄かにかき曇り暴風忽ち吹き來りて、土砂を飛ばし氈帳を動かし、凄まじき事限りなし。この暴風は翌日(二十四日)にも及びたりしが、余等は困難の中に種々調査する所ありたり。蒙古人の二三來訪者ありて、互に談話を交えぬ。或喇嘛の小僧は又た遼時代の碑文の一小破片(陀羅尼)を贈れり。

ウルテムレ
ンの住民

この村落は前にも云へる如くウルテムレンの河畔、沖積層の廣き平原中に存在するものにして、この附近に尙一二の村落あり。住民は悉く氈帳に住する蒙古人にして、一も漢人を見ず。質樸にして太古の風を存す。其の生活は全く牧畜を以てせり。村落の北方の丘陵上に一喇嘛廟あり。余等は此の村落に滞在し、遼の上京に就て調査なしたるが、其一斑を左に語らん。

遼の上京の
地位

遼の上京の位置に就て、稍や其場所を指定したるは、程石州の『蒙古遊牧記』なり。同書第

三卷、巴林蒙古の項に、これを保羅城なりとし、今巴林東北一百四十里當烏圖緯農河會和戈圖緯農河之處有波羅城趾周二十里內有三塔久毀疑即古之臨潢但史云深流河繞京三面又疑古城當在和戈圖緯農之東岸巴林與阿爾科爾沁接界處耳」と記せり。されど確かに其位置を指定せざるなり。

『讀史方輿紀要』卷十八、直隸の終に『附錄』として記せる所に兀良哈あり。こは大掩衛の北にありて、其地東は海に接し西は開平に連なり、北は北海に抵る……とあり。大掩衛は即ち現今の承德府下、平泉州の遼中京故城の附近なり。明の時には、政令此の地に行はれざりしも、其のシラムレン附近を指せること明かなりとす。而して兀良哈の所に『臨潢城』の名ありて、これに遼史の文を引用し、左の如く記せり。

在柔顏衛北、遼志云、本漢遼東郡之西、安平縣、後廢、阿保機創業于此、負山抱海、天險處固、地肥沃宜畊植、饒水草便畜牧、初置宮曰龍眉宮、神冊三年築城、名曰皇都、天顯元年展郭建宮室、十一年更名曰上京府、曰臨潢、城高二丈、幅員二十七里、東門曰迎春、曰鴈兒、南曰順陽、西曰金鳳、曰西鴈兒、北曰景福、又北爲皇城、高三丈、東門曰安東、南曰大順、西曰乾德、北曰拱辰、中爲大內之門、南曰天、東曰東華、西曰西華、其南然臨

上京位地の不明

潢縣、又西南爲長泰縣、金初因之、尋改爲北京完顏亮、天德二年改爲臨潢府路、其臨潢、長泰縣仍舊、元府縣俱廢、宋大中祥符九年薛映記曰、中京正北八里至松山、七十里至崇信館、九十里至廣寧館、五十里至姚砦館、五十里至威寧館、三十里度潢水石橋、傍有饒州、又五十里保和館度黑水○七十里宣化館、五十里長泰館、館西二十里有佛舍民居、即祖州、又四十里至臨潢府、自過崇信館乃契丹舊境、其南即奚地也、入子天門內所有殿舍甍廡皆東向、胡三省、遼大定府北至臨潢凡七百里。

以上により遼の上京は、まさしく現今の巴林蒙古に存在するや明かなり。されど未だ一人の専門學者の此地に來りて、精密に實地調査せし人なきを以て、余等は其の位置を確定するに尤も困難苦心せり。即ち手がかりと云ふ可きは、『蒙古遊牧記』の波羅城にして、この地名は支那の地圖にも出て居る名にして、露、獨の蒙古地圖には、何づれも位置をシラムレン河の北方、クブサトノールの東、緯農河の上流に存在せしめ Boro enou Boro elong の名を以て記せり。

波羅城とはウルテムレンの村に存在する古城是れなり。蒙古人はこの古城が何人に因り、何年以前に建築せられたるかは一も知る所なけれども、彼等はこれに向て Boro loton と稱せり。ボロとは蒙古語『青』の義にして、ホトンとは『城』の義なれば、即ち漢名『青城』の意味

波羅城

青城

なり。彼等が古城に向てかゝる名稱を附するは、尙ほすてに記せる烏丹城の古城を青城チンチンと稱するが如きはれなりとす。このウルテムレンの河畔に存在する青城は、『蒙古遊牧記』の所謂『波羅城』にして、又支那、露、獨の地圖の記するものに相當す。

余等はこの青城を實踐調査せんが爲めに、四月二十二日より二十五日まで都合四日間費せしたが、確かに遼の上京の古跡たるを確かめたり。其證據とする所は文献史上の事實、現今存在する城壁、内部の建物の跡、塔、古佛、石人、瓦、陶器、古錢等、其他尙ほ余等の前回に記したる慶州古城との關係等なり。以下これに就て、聊か述ぶる所あらん。

上京古城は潢河より北方二日程、二百清里位の所にあり、而して其位置たる、即ち興安嶺の中にありと稱すべく、四面山を以て圍まれ居れども、古城の在る所は西、南、北の三方は山を以て圍み、東の方うち開きたり。而して其地は自然に平坦なる凹地を形成し、城壁より山迄東は三清里、南は約五清里、北は約二清里の廣さを有し、西のみは僅かに一里弱なり。城を中心として、二河、左右より流れ來り城壁の東に於て互に相合し、再び一河に入れり。其の一は西より來り、城の南壁に尤も接近して流れ *Bai kol* と稱し。一は西北方より來りて、城の北壁附近に流るゝものにして、*Chingian osso* と云ふ。是等二河の相合する河は *Urdianu*

青城即ち上京なるを確

ウルテムレン河

臨潢は潢河が沿岸に在らず

遼上京に關する文献

no にして、支那地圖の所謂、綽諾河是れなり。ウルテムレン河は更に東に流れ、遂にかのチガステノール湖(この名稱に就て説あり)に入る。城の附近は沖積層にして、かく諸水流通し居る爲め、土壤尤も肥えたり。上京の地は當時、臨潢の名あれども決してシラムレンの沿岸に存在せるにあらざるなり。こは殊に注意するを要す。此の地の標高は余等の携帶せるバロメートルにては、海拔六百メートルなり。

文献は遼の上京に就て、いかに記せるやと云ふに、『遼史』上京道の所に左の如く云へり、曰く

上京臨潢府、本漢遼東郡西安平之地、新莽曰北安平、太祖取天梯別魯三山之勢、于葦甸射金甌箭、以識之、謂之龍眉宮、神册三年城之、名曰皇都、天顯十三年更名上京府、曰臨潢、深流河自西北南流、遼京三面、東入于曲江、其北東流爲按出河、又有御河、沙河、黑河、潢河、鴨子河、他魯河、狼河、蒼耳河、輞子河、臙胸河、陰涼河、濼河、鴛鴦湖、興國惠民湖、廣濟湖、鹽濼、百狗濼、大神淀、馬孟山、兔兒山、野鶴山、鹽山、鑿山、松山、平地松林、大斧山、列山、屈劣山、勒得山、唐所封大賀氏、勒得王有墓存焉、戶三萬六千五百、轄軍府州二十五、統縣十。

遊史と地勢
一致す

太祖金甌の箭を射る云々は、是れ一の傳説のみ。さて遊史に記する以上の地勢は、稍や現今ポロホトンの地勢と相符合す。即ち天梯別魯の三山は、其の西、南、北の山に相當するが如く、又西北より流る、深流河はかのチャガン、オツンにして、北東より流る、按出河はバキンホルらしく思はる。而して、『遼東三河、東入曲江』とは、蓋し二河の相合してウルヂムレンとなり、東方に流る、事實と相類似すと云ふべし。

古城の築造
状態

この古城は、城壁すべて土を以て築けり、而して其築き方は、土を磚の如く長方形のものとし、これを積み重ねたるものにして、一も磚、石を以てせし所を見ず。その形状は四角形を呈し、其一角の長さ三里清、周囲は即ち十二清里なり。今は、城壁の高さ五間位、厚さは三間許なり。又た城の外部には百五十歩を距て、各々幅三十歩位の張出しを作り、門は東西南北の四面に設けられ、城の前には外濠を備ふ。城門は要害堅固にせる爲め、門外に向て更に圓形の土壁を築き、こゝにも外門を設けしもの、如くなるが、今は僅かに西門と東門とに於て之を見るべし。

城内の遺物
遺跡

城内今は荒れ果て『夏草やつはものどもの夢の跡』の感ありと云へども、尙ほ僅かに其の昔日の俗を留むるものあり。乃ち城内其の中心に於て二個の高臺あり。而してこの附近には石獅子、及び柱の臺石多く存在し、又た黄、緑の瓦は散亂せり。以て當時高貴の方の御座を此處に設けられしを推知すべし。蓋しこは遼の天子の玉座ならんか。

西門に至る中央の所に、小高さ丘陵ありて、磚多く散亂す。此處には當時大なる建物ありしもの、如く、其傍に甲冑を具るたる石人の、破損せるもの三四個を見る。又た西門に入りて右の方に至れば、直ちに壁に沿ふて、高臺あり。臺上一ヶ所磚を積みたる跡ありて、其傍に龜を彫刻せる臺石、二個（一個は東に向ひ、一個は西に向ふ）存在す。こはもと碑文を建てられたるものならんが、今はなし。前に述べたる甲冑を具える石人のある北方には、石臼、臺石多く散亂す。こは臺盤場に用ゐしものなるべし。

北壁に沿ひたる所には丘陵ありて、石多く散亂せり。又た其上に宮殿の跡らしき所あり。其南方に石獅子多く存在す。其南には大なる石佛建てり。この石佛は觀世音菩薩なるべく、其高さ一丈五尺位もあらん。

東門内の南門によりたる所には、家の跡らしきもの見え、此處には小さき壁を作り、其中に八角の臺石を存せり。城内には古瓦、磚、陶器の破片多く地上に散亂し、尙ほ注意すれば古錢を得ることあり。

右古城を中心とし、北と東に各々磚塔を在存す。北にあるものは、北門を去る凡そ二清里許なる丘陵の上にあり。この塔今は崩れに崩れ、塔心既に現はれ昔の像をとくむ可くもあらず。徒らに鳥の巢と化せるのみ。僅かに其塔の八角形なるを認むるを得べし。又た東にあるものは、東門を相去る五清里許り隔りたる丘陵の上において、同じく八角形を呈し、今は其の七重を認むべし。こは稍や完全せるものにして、佛、菩薩、天人等のあるを認むべし。文中に出せる佛像の寫眞は何づれもこの塔より採集せしものにして、其中に大日如來の像あるは注意すべし。この事實を以て見れば當時遼京に行はれたる佛教は眞言宗の如きものなるべし。これと共に行宮にて見たる尊勝陀羅尼、又注目するに足る。想ふにこの眞言宗の遼に行はれしは、是れ後の元朝に入り來りし、喇嘛教の光をなせるものと云ふべく、蒙古人の西藏より喇嘛教を、受け取りたる其由來茲にあらん。

蒙古人の語る所によれば、尙ほ城中にも曾て一塔存在せしが、今は崩れて其全形を存せずと云ふ。これに因て考ふれば、遼の當時にありては、この古城に對し中央、左右と各々三塔の存在せしことを推知せらる。想ふにかの『蒙古遊牧記』に記する『…内有三塔久毀…』とあるは、まさにこの状態を云ひしものならん。

以上の古城、塔、城内の建物、石人、石佛、石獅子、柱の臺石、其他の遺物は、是れ遼代を研究するに、尤も貴重なる材料なりと云はざる可からず。余等はこゝに滞在すること數日、聊かこれが調査に従事したりき。

支那内地の漢民族の築きたる城を見るに、必ず廣き平原中に設け、城壁は一種堅固なる圍と考へ、其内に官府、民家は悉く存在す。然るに契丹民族の城壁を見るにこれと稍や趣を異にし、平坦なる廣原中にこれを設けずして、其位置は事はら、後に山若しくば丘を脊追ひたる所を選べり。即ち上京城はこの法則に従ふものにして、尙ほかの小巴林の慶州城、ホゴチンホトン及び阿魯科爾沁白城の如き皆これなり。この事實は漢民族と契丹民族と其風習を異にせる一材料とて見るべし。

契丹の古俗、東に向ふを尊ぶ、『五代史』卷の七十二、四夷附録にも『…契丹好鬼而貴日每月朔旦東向而拜日其大會聚視國事皆以東向爲尊四樓門屋東向…』とあり。『遼史』四十七、諸官志の條にも『遼俗東嚮而尙左、御帳東嚮遙禁、九帳南嚮、皇族三父帳北嚮東西爲經、南北爲緯、故謂御營、爲橫帳云』とあり、尙宋大中祥符九年に上京を見たる『薛映記』によれば『入西門、門曰金德、內有臨潢館子、城東門曰順陽、北行至景福門、又至承德門、內有昭德宣政』

二殿、與毘廬皆東向。」とあり、以て其東を尊べるの俗を見るべし。

契丹はかく城壁を築きたるも、もとは其術を知らざりき。其は『遼史』卷四十五、諸官志の條中に『遼之先世未有城郭溝池宮室之固、毘車爲營、硬寨爲宮、御帳之宮不得不謹出城爲侍衛、著帳爲近侍、北南部族爲護衛、武臣爲宿衛、親軍爲禁衛、百官番宿直、奉宸以司供、御三班以肅會朝、硬寨以嚴晨夜、法制可謂嚴密矣、』とあるを以て知るべきなり。

契丹の古俗や斯くの如しと云へども、太祖皇帝、阿保機に至て、遂に毘車、硬寨の法を一變し、漢族の城郭、溝池、宮室の制度を採用するに至れり。遼の上京の城の如き即ち是れなりとす。此處に彼が漢的城郭を築きしは、神冊三年、支那にては後梁の末帝。貞明四年、我が國にては、醍醐天皇の延善十八年なり。尤も其以前此處に龍眉宮なるものを設けしことありしが、是れやがて神冊三年に於ける、築城の基礎をなせしものならん。彼は一度此處に城郭宮殿を營むや、始めて皇都と稱しき。更に太宗の天顯十一年(遼史十三年とせり)に至てこれを上京となし、臨潢と稱するに至れり。

上京の地は、阿保機に因て契丹民族第一の首府となりたれども、其以前すてにこの附近に據りたる者あり。こは彼の契丹八部中尤も部族の大なりし大賀氏にして、彼等は此處を本據

とし、暫らく雄飛せり。この事實は『遼史』卷三十七、上京道の條に『唐所封大賀氏勳得王有慕容焉』とあるを以て知るべし。果して然らばこの地は、古來契丹民族の注目せし地たるやな明かりとす。阿保機も又此處に據りしも畢竟之が爲めのみ。

阿保機は此處に城郭宮室を築きたりしも、其以前にも彼はすてに、この舉に出でしとあり。『五代史』四夷附録に従へば、曰く

阿保機亦不知其何部人也、爲人多勇、而善騎射、是等劉守光暴虐、幽涿之人多亡入契丹、阿保機人間入塞攻陷城邑、俘其人民、依唐州縣置城以居之、漢人教阿保機曰、中國之王無代立者、由是阿保機益以威制諸部而不肯代、其立九年、諸部以其久不代共責謂之、阿保機不得已傳其旗鼓而謂諸部曰、吾立九年、所得漢人多矣、吾欲自爲一部以治漢城可乎、諸部許之、漢城在炭山東南、滹河上有鹽鐵之利、乃後魏滑鹽縣也、其地可植五穀、阿保機率漢人耕種、爲治城郭邑屋廩市如幽州制度、漢人安之不復思歸、

以上に因て考ふれば、上京築城以前すてに漢式城郭を採用せしことを知るべし。阿保機は契丹の七部を撃滅して一部となし、更に北の方室韋、女真を伐ち、西の方、突厥の故地を取り、尙ほ南の方奚を滅し、東北の諸夷皆な畏服す。而して後始めて梁と事あるに至れり。

契丹と後梁と事ありしは、其以前よりあり、『五代會要』によれば、後梁開平二年（阿保機三十七歳）夏五月、細馬十匹、金花鞍、轡、貂鼠皮等を貢じ、又其妻述律氏、朝霞錦を貢ず。開平三年、阿保機、金鍍鐵甲、金鍍銀甲、及び、水晶の玉裝鞍轡等、其母は各々雲霞錦一疋を貢す。

兎に角、七部の大人を殺せしは、神冊元年、春正月（遼史拾遺）なるが其年は彼尙ほ漢城に居りて、上京の地には在らず。『宋白續通典』によれば『契丹居遼澤之中、潢水南岸、其地、東南接海、東際遼河、西包冷陁、北界松陁山、東西三千里、地多松柳、澤多蒲葦、阿保機居漢城、在檀州西北五百五十里、城北有龍門山、山北有炭山、炭山西是契丹室韋二界相連之地、其地灤河上源、西有鹽泊之利、則後魏滑鹽縣也』と記せり。然らば彼が漢城を捨て、上京の地に移りしは、神冊二年の初なるべし。而して神冊元年は阿保機始めて自から皇帝と稱し、國人之れを天皇帝と尊び、妻述律氏を皇后となし、百官を置き、之をたて神冊と曰ひ、國を契丹と號せり。

阿保機が上京の地に、皇城を築くに至りしは、固より彼の設計になるや明かなれども、これを行ふに就て、彼に最もよき漢人の參謀ありしことを忘る可からず。こは『五代史』にも記せ

ども、『契丹國志』卷一神冊元年の條に左の文あり。曰く

初唐末、濼鎮驕橫、互相併吞都濼、燕人軍士多亡歸契丹、契丹日益強大、又得人韓延徽、有智畧頗知屬文與語悅之、遂以爲謀主舉動訪焉、延徽始教契丹、建牙開府、築城郭、立市里以處漢人使各有配偶無藝荒田、由是漢人各安生業、逃亡者益少、契丹咸服諸國、於延徽有力焉、頃之、延徽逃奔於晉、晉王欲殺之、幕府兩掌書記、王緘疾之、延徽不自不求歸省、母遂復入契丹、太祖待之益厚、至是以爲相、累官遷中書令平章事。

皇城建築は直隸北部漢民の、工人の手に因て行はれたるものならん。其方向、位置が契丹的なりとも、其大體に於て、漢式の模倣なるは明かなりとす。こは恰かも現今の蒙古諸王が漢人の工人を招きて、漢式宮殿を築かしむると相等しきものなり。

皇城は美事出来上りたるも、其地に居住せしむべき契丹人甚だ少なりしかば、他の民族を連れ來りて、此處に住まはしむるに至りぬ。其は『遼史』三十七、上京道の條を見れば明かなりとす。即ち其臨潢縣の所に

臨潢縣、太祖、天贊初、南攻燕薊、以所俘人戶散居潢水北、縣臨潢水、故以名、地宜種植、戶三千五百。

次に等しく長泰縣の所にも

長泰縣、本渤海國長平縣民、太祖伐大麗譚、先得是邑、遷其人於京西北、與漢民雜居、戶四千。

其他附近の、定新縣、保和縣、濬縣、遷遼縣、易俗縣、渤海縣、興仁縣等、悉く漢、渤海、其他の俘人を以てこれに居住せしめたり。

されど茲に一の注意すべき事あり、其は城内と城外の關係之なり。抑も支那の城なるものは、其内に皇族官民ともに住すれども、契丹の城は大にこれと趣を相異にし、其城内には専ら契丹の皇族、官吏これに住し、一般の人民及び他の民族は、城外に住居せしめたるもの、如し。こは内部の建物、及び城外住居跡の形跡によりて考へらる。余等の見たる遼の古城は、何づれもこの設計よりなれるが、殊に上京城に於ては尤も其感あり。

この城は、はじめ神冊三年に築かれしも、これより後十年也渤海を平げ歸り、再び郭郭を展べ宮室を建て、規模頗る大なるものとなれり。『遼史』はこれに就てかく記せり。曰く

天顯元年、平渤海歸、乃展郭郭、建宮室、名以天贊、起三大殿、曰開皇、安德、五鑾、中有歷代帝王御容、每月朔望節辰忌日、在京文武百官、並赴致祭、又於內城東南隅建天雄

寺、奉安烈考宣簡皇帝遺像、是歲太祖崩、應天后於義節寺、斷腕寘太祖陵、即寺建斷腕樓、樹碑焉、太宗撥立、普遣宰相馮道、劉煦等、持節具鹵簿法服至此、冊上太宗及應天皇后、尊號太宗、詔諸蕃部、並依漢制、御開皇殿開承天門受禮、因改皇都爲上京城、高二丈、不設敵樓、幅員二十七里、門東曰迎春、曰鳳兒、曰南福、其北謂之皇城、高三丈、右樓櫓門、東曰安東、南曰大順、西曰乾德、北曰拱辰、中有大內、內南門曰承天、有樓閣、東門曰東華、西曰西華、此道內出入之所、正南街東留守司衙、次鹽鐵司、次南門龍寺街、南曰臨潢府、其側臨潢縣、縣西南崇孝寺、承天皇后建寺、西長泰縣、又西長觀、西南國子監、北孔子廟、廟東節義寺、又西北安國寺、太宗所建、寺東齊天皇后故宅、東有之妃宅、即法天皇后所建也、其南具聖尼寺、綾錦院內省司、麴院瞻國省司二倉皆在大內、西南八作司與天雄寺相對、南城謂之漢城、南當橫街各有樓對峙、下列開肆、東門之北、濬縣、又東南興仁縣、南門之東、回鶻營、回鶻商販、留居上京、澄營居之、西南同文驛、諸國信使居之、西南臨潢驛、以待夏國、驛西福先寺、寺西宣化縣、西南定新縣、縣西保和縣、西門之北、易俗縣、縣城遷遼縣。

周廣順「中胡嶠記」は、當時上京の状態を記して、曰へらく

上京西樓石邑屋市肆、交易無錢而用布、有綾錦諸工作、官者翰林伎術教坊角觥儒僧尼道士中國人、并汾幽蘇爲多。

尙ほ上京に就て、云はんとするもの頗る多けれど、こは考古學上の事實と相對比し、他に精しく述ぶることなし、今はこれにて上京のことを終るべし。兎にも角にもこの古城は、遼研究の骨子となるべきものなれば、かの廢慶州城とともに注目すべき事に屬す。

四月廿四日。風甚しく砂を飛ばし歩行困難なれば、今日はテントの内にて色々の仕事をなす。チンステナン（役人と云ふ意）來りて、明日旅立の事につき相談す。

本日溫度は朝五度、夜七度。

四月廿五日。今日は風も治まり、古城の調査も一先終りたれば、此處を出發せんとて旅裝の用意を爲せり。余等は出發前に、見殘したる古塔を見んとて、騎馬の役人を從へ余も亦騎馬にて古塔に向つて進む。

塔の位置は、古城より南方の丘陵の上に在り。余の宿舍より南方約三里の平地を行けば丘陵となり、二里許り登りて塔のある所に達せり。北方は古城に向ひて打ち開き、後方(南)は山にて蔽はれたり。

右塔を調査す

塔は餘りに大ならず、今は破損して傳影しく地上に散亂せり。古塔は磚にて築き上げられ、今日甚しく破損し居れるが、尙ほ七重層を認むべし。屋根には木の檜尙残り居れり。蒙古人は此の檜は古きものなりとて、ホゴチンモトと稱せり。ホゴチンは古きモトとは木即ち古木と云ふ意味なり。

塔は八角形にして佛、天人、四天王等あり。是等佛天の諸像は石を以つて彫刻し、磚塔の表面に、漆喰の如きものを以つて附着せるものなり。是等の諸像は厚き石に彫刻せるものを以つて、其重量に堪へず地上に落ち居るもの多し。余は其中稍々完全なるもの三個を拾へり。尙四天王の像は一個完全なるもの落ち居たるも、餘りに重かりし爲め之れを採集せざりき。余等の採集せし三個の石像は、即ち寫眞として出したるもの之れなり。余は此處にて聊か此の古塔に就て調査し、尙一二枚寫眞を撮影したり。

要するに此の古塔は、遼時代の遺物として、最も注意すべきものなり。余は採集せし石像を、馬に脊負はして此處を出發し、余の宿泊せし村落に歸り、愈々此處を出發する事となりしが、余の妻は先發隊と共に進み、余は蒙古の役人二人と共に、騎馬にて之より三里許なるウルジムレン河畔の石碑を見たり。

石碑は河に最も接近したる低き土地に在り。八角形の大理石にて作られ、高さは破損し居りて、正確には知り難けれど、現今の所にては二尺一寸五分あり。形は八角なるも其の中四角は廣く他の四角は狭く、其大なる所にては六寸五分、小なる所にて三寸あり。而して大なるもの、次には小なるもの、小なるもの、次には大なるものの順序なり。又たそこには臺石及び屋根の如きものも、存在せしならんも今は無し。碑文は文字磨滅し居れば、充分には讀み得ざりし。僅に讀み得たる所に依れば左の如し。

□□壬辰□時俗□□前□

□□尉□□教爲亡兄延□

念□□□□年六十有二月二十九日因疾

以爲記爾 叔□賁 弟 □□

□□□□延□都 □ □□家弟□

文中「壬辰」の文字あり、此の壬辰は遼の何時頃のものなるか、之れを遼史に見るに壬辰の歳は三あり。一は聖宗の時にして、日本にては一條帝の正暦三年に當れり。次は興宗即ち後冷泉帝永承七年に當り。次は天祚帝即ち烏羽帝の天永三年に當れり。而も其の位置及び碑文其

のものの上より考ふるに、其の第一の聖宗の時のものならんと思へらる。

余は之れを調査し更に馬を飛ばして、幾多の水溜及び草地を経て、前に進める一行の車と會したれば、余は馬を捨て、車に投ぜり。之れより余等の一行は古塔のある丘陵と、オボの存在する丘陵(チュルステー)との間を進みしが、此の邊道最も狭くして、ウルジムレン河は此の間を流れ居れり。余等は之れより主として此の河の右岸に沿ふて進む。土地は砂土にして殊に昨日暴風のありし爲め、砂を飛ばして道路大に變化し通行甚だ困難なり。車は砂上を行く事なれば、之れを挽く牛は一步進みては休み、休みては復進むの有様にして、其の困難なること察するに餘りあり。此のマンハの中に諸所土器の破片の落ち居るを見たり。斯して進むこと廿五清里許りの所、河の右岸に公主陵あり。又左岸に喇嘛廟あり。此の寺院には五百人許りの僧侶を有すと言ふ。

此の邊土地廣く、河の左右の山より山の間は約十清里許りもあらん。之れより五清里許りも進めば、小巴林の最終の村落なり。此處に小さき丘ありて、多くの古磚、瓦、陶器等の散亂せるを見たり。蓋し遼時代建築物の遺物なるべし。此處に來りし時寒氣一層甚しく、且つ夕暮に近付かんとせしかば、余等は此の村の村長の家に入りて宿らんとせしに、主人は馬に

前發隊と合す

マンハの道
牛車の進行
困難なり

大喇嘛廟

小巴林最終
の村

主人逃れ去
り宿る能は
ず

乘りて逃げ去りたれば宿る能はず。止むなく十丁許り進みて、大巴林の土地キルヤンツムネ
アイラに來り、此處にて宿泊する事となれり。時に午後五時。本日の里程は三十清里なり。
尙此の附近にて古磚、古瓦、古陶器の破片を發見せり。之れ亦遼時代の遺物たる事は明な
り。又余等の宿泊せし家の人々は、非常に親切に余輩を待遇し、夜は主人夫婦子供に至るま
て出て來り、共に四方八方の話せり。

七、阿魯科爾沁に入る

四月廿六日。余等昨日は、専らウルジムレン河に沿ふて下り來りしが、今日は此のウルジ
ムレンを渡りて、阿魯科爾沁方面に進まんとするなり。午前七時宿を出て、昨日の如くウル
ジムレンの右岸に沿ひて進みたるに、約一清里許りにして、流水俄に方向を變じ、之れまで
主として東方に向ひて流れ居たるが、南方に向ひて流るゝ事となれり。此の變化は丘陵山脈
の走行より來れるものなり。河は尙東に流れてチガステノールに至ると云ふ。余等は此の
流の變化せる所にて、瓦の多く破片となりて散亂せるを見たり。之れ言ふまでもなく遼時代
の遺物たること明かなり。進むこと二清里許りにして河を渡る、河は今水多からざれば、

ウルジムレ
ンの方向一
變ず

渡るに困難を感ぜざりしも、尙馬腹を浸せり。若し雨期ならんには渡ること極めて困難なり。
河を渡りて尙進むと二清里許り、漸く丘陵となれり。此に登りて進み行けばハンオーラ山の
峠あり、此處を越え、出發以來三十五清里の所に休息せり。

鐵鎧の破片
を得

余等は此の附近にて鐵鎧の破片を拾へり。之れに依りて此の附近にも、曾て人の住みたる
ことありあるを知れり。蒙古人の語る所に依れば、此の附近の山上に、昔日人の住みたる跡
ありと。土人は此の事を、クキルフンヌトカと稱せり。即ち彼等の言に依れば、昔此の附近
にクキル民族の住居せしもの、如し。余等が途中にて拾ひたる鎧の、此等に關係あるものな
ることは明かなり。されど是等の鎧の形式を見るに、正しく北方民族の形式を具へ居れり。
蓋し契丹のものならんか。此の事に就ては多少説あり。後に精しく語る所あらん。

クキルヌノ
トカ

此の附近より全く山中となり來たれり。而も是等の山は何れも岩石よりなり、南方に向つて
走り居りしが、之れ正しく興安嶺の一支脈なるを知らん。余等は之より此の山路に依りて進
まんとするなり。此の附近に在る、ハンオーラと稱する山は、他の峯より最も高く聳え居り、
土人が之れに向つて、ハンオーラの名を附したるは最もなりと思はる。蓋しハンとは帝と言
ふ事にて、オーラは山の事なり。即ち汗山の意味なり。土人は此の峯が他の峯より、最も高

興安嶺に入
る

汗山

香の花開かんとす

阿嚙科爾沁に入る

トーゲ村

オームリン
阿嚙科爾沁王府

を以て汗山と稱す。此處を進み行く事暫くにして、香の林に達せり。花は未だ開かざれども、蕾は破郁として得も言はれず。此の邊凡て香樹にして、蒙古人は之れをクイルスモトと稱せり。今四五日もせば其花開きて、更に一層の美を添ふるならんと思はれたり。余等は計らずも興安嶺の山中にて、此の杏花を見たるは、最も紀念とすべき事なり。五清里許り平地を進めば、又丘陵に達す。此處は大巴林の終る所にて、之れより阿嚙科爾沁の境となるなり。之れより丘陵は一層上りとなり、遂にオトカンタパーと稱する峠に來れり。此の峠にて元來し道を望むに、幾多の丘陵山脈の走るを見る。又之より進まんとする北方を見るに、亦山脈相重れり。茲に於てか余等は初めて、我身の興安嶺山中に在るを知れり。峠を下りて十清里許り進み、夕暮太陽の没する頃トーゲヌアイラに到着し、今夜は此處に宿泊することゝなれり。此の日行程五十清里なり。今日の山路は全く無人の地にて、水一滴だも飲むこと能はざりき。四月廿七日。午前十時此の村を出發し東北方に向ひて平地の道を進む、此邊周圍に丘陵あり、中央は地低くして且平坦なり。蓋し昔日にありては、此の附近一帶に一大沼澤たりしならん。來ること五清里許りにしてオームリン河に達す。河は西より南に向つて流る。此處を渡りて再び丘陵に出て、進むこと約十清里許りにして、初めて東北方に阿嚙科爾沁の王府を

望む。之れより下りとなりて、更に十清里餘も進み、午後三時王府に着せり。本日の行程は二十餘清里、余等は王府に宿らずして、附近なる蒙古人の家に宿泊せり。

王府の地位

當時王は北京に滞在在中にて王府に在らず。而も北東の理藩院より、余等の旅行に就ての書王府に到着し居たれば、非常に便宜を待たり。夜王府の役人より贈物馳走の饗應を受く。

阿嚙科爾沁王府の位置は、後方丘陵を負ひ、前面(南)は打ち開けたる平原にして、傍に大なる喇嘛廟あり。王府の前に一小河あり。チャガンツルゴル稱す。今は水涸れてなかりしが、余等は此の河畔にて例の古土器の破片を拾へり。之れに依りて曾て此處にも人の住居せしを確め得たり。

昨夜宿泊せし村落より、王府に至る西方に當つて、遠く鋸形を爲したる山脈を望む。こは昨日經過せしオトカン山並にハンオーラ山に續ける山脈にて、蒙古人は此の山脈全體を稱してハンオーラと言へり。即ち興安嶺なり。興安嶺は西烏珠穆沁の方面より、此處に走り居れるものにて、こは即ち興安嶺の支脈なり。余等は之れより同山中を横斷し、西烏珠穆沁方面に進まんとするなり。

昭烏達盟

抑も阿嚙科爾沁は、所謂昭烏達(Chao-uda)盟に屬するものにして、殊に同王はこれが盟長

阿魯科爾沁
は其の盟長
たり

たり。さればこの同盟に屬する各蒙古人は、阿魯科爾沁の王を尊んで大王と云へり。昭烏達盟に屬する蒙古は、左の各旗よりなれり。即ち

阿魯科爾沁(Arkhoshin)

奈 曼(Naiman)

巴 林(Barin)

札 魯 特(Charot)

翁 牛 特(Ungiut)

克 什 克 騰(Geshikten)

喀爾喀左翼(Khalha)

以上は、各々堅く同盟なし居るものにして、若し事あれば互に相會して之を議す。この際は盟長に聞く所尤も多し。又北京の理藩院より、同盟に關する通報其他の事あれば、先づ盟主たる阿魯科爾沁衙門に報じ來り、其れより各王府に傳達することとなり居れり。阿魯科爾沁の衙門に對し、理藩院より余等に關する保護便宜の書而到着なし居りしも、全くこれが爲めなり、されば余等はこれより以後、旅行に就て一府の便利を得ることとなれり。

本日の温度は朝十度、正午十一度。

第七 阿魯科爾沁より西烏珠穆沁

一、白城調査に向ふ

四月廿八日。今日は之より西烏珠穆沁に向つて出發せんとて、午前八時旅宿を出發す。此の行に就て阿魯科爾沁の衙門よりは、特にメーリン一名を隨行せしむることとなれり。メーリンとは各蒙古王府に於けるトソラクチ、チヨソラクチ等の官吏に次げるものにして、最も權力あり。王府が特に之れを隨行せしめたるは余等の最も感謝する所なり。尤も該官吏はオムリン河畔の人にして、余等發足の間に合はざりしを以て、今日は已むなく他の官吏をして騎馬にて隨行せしめたり。一行は道を西北方にとりて、王府と喇嘛廟との中間を進む。此の喇嘛廟には多くの喇嘛僧あり、其の建築亦大且壯嚴にして、西藏風より成れり。此處を経て丘陵の上を東北方に進めば、王府より五清里弱にして一小山に出づ。此の山上にオボあり。之れより道は或は上り或は下る。此附近低き所はマンハの丘陵を爲し、西方は興安嶺の山地と爲れり。王府より廿五清里にして、マンハの丘陵の村落、サンシユンモト、ヌ、アオイラに達

阿魯科爾沁
王府の好意

榆村

し、一同馬車を降りて暫く休憩せり。此村落は一名ハイラソモト、ヌ、アイラと稱し、即ち榆村の義なるが、蓋し此の附近一帯に榆の木多ければなり。

余等は此の丘陵にて、例の古土器の散亂せるを發見せしかば、之れを採集したるに、其の表面に菱形を連続せる模様を附したるものあり。又中には之れまで、途中にて多く採集したるものと同じく、際直線を連続したるものもありたり。尙此處の遺跡には石鏃の屑、鐵器の破片等も混じ居たりしが、之等の遺物中、菱形連続紋様の古土器は、最も珍らしきものにして、余は此處にて初めて發見したるなり。斯くの如きはシラムレンの河畔にてはこれまで見る能はざりき。

フア村

此の村はマンハの上に設けられたる村落なれば、地盤は總て砂より成り、一見生活には困難なるに似たれど、風景人情共に美しき村なり。且斯かる砂地の地盤なれども、飲料水充分にして付て其の不足を感ぜし事なしと。余等は此處にて暫時休憩し、更に五清里許り進みて、午後三時フアイラに到着し、今宵は此處に宿泊する事となれり。此の日の行程三十清里。

此の村落も又マンハの丘陵の上に存在す。此處にても亦古土器の破片を採集したり、今宵余等の宿泊せし家は、役人の家にて非常に優遇せられ、特に羊一頭を屠りて、出來得る限り

の馳走を爲せり。主人夫婦は非常に親切なる人にて、夜に入りては老人子供も出て來り、四方八方の話に思はず夜を更かしぬ。

本日の温度は朝十五度、正午二十四度、夜十八度。

白城に向ふ
支那人と
蒙古人

四月廿九日。今日はチャガンホトン(白城)を見んとて、昨日隨行せる役人及び此の家の主人シユイチンに従へ、午前八時頃旅宿を發足せり。約十清里の間はマンハの丘陵にして、尙十里許り進み、初めて一の峠に達せり。この間に一軒の支那人テントを張り物品を商ふ者を見る。附近の蒙古人は、駱駝に乗り茲に集り來り、其商品を求むるも一奇觀なり。余等隨行の二人の官吏は、余等より先に馬を飛ばして、此のテントの中に入り、支那人より茶、菓子、酒などを出さしめ、御馳走にあづかれり。蒙古の官吏は、其の管下地方に來れる支那人に對しては、常にかゝる事をなすものにして、支那人はこれが爲め豫かじめ旅行前より、其代價を見つもありと云ふ。尙ほ此の附近にも、例の古土器の破片の散在せるもの多し。此の峠は蒙古語にてウヌテンタバと稱す。此處を降れば、道は山と山との中間を北に向つて進む事となれり。此の附近今は平地と爲り居れど、昔は大河の流れ居たるが如く、今も尙其の跡あり。今日にても一朝大雨あらば、此の附近一帯に河と變ずるならんと思はる。此の邊稀に

白城村

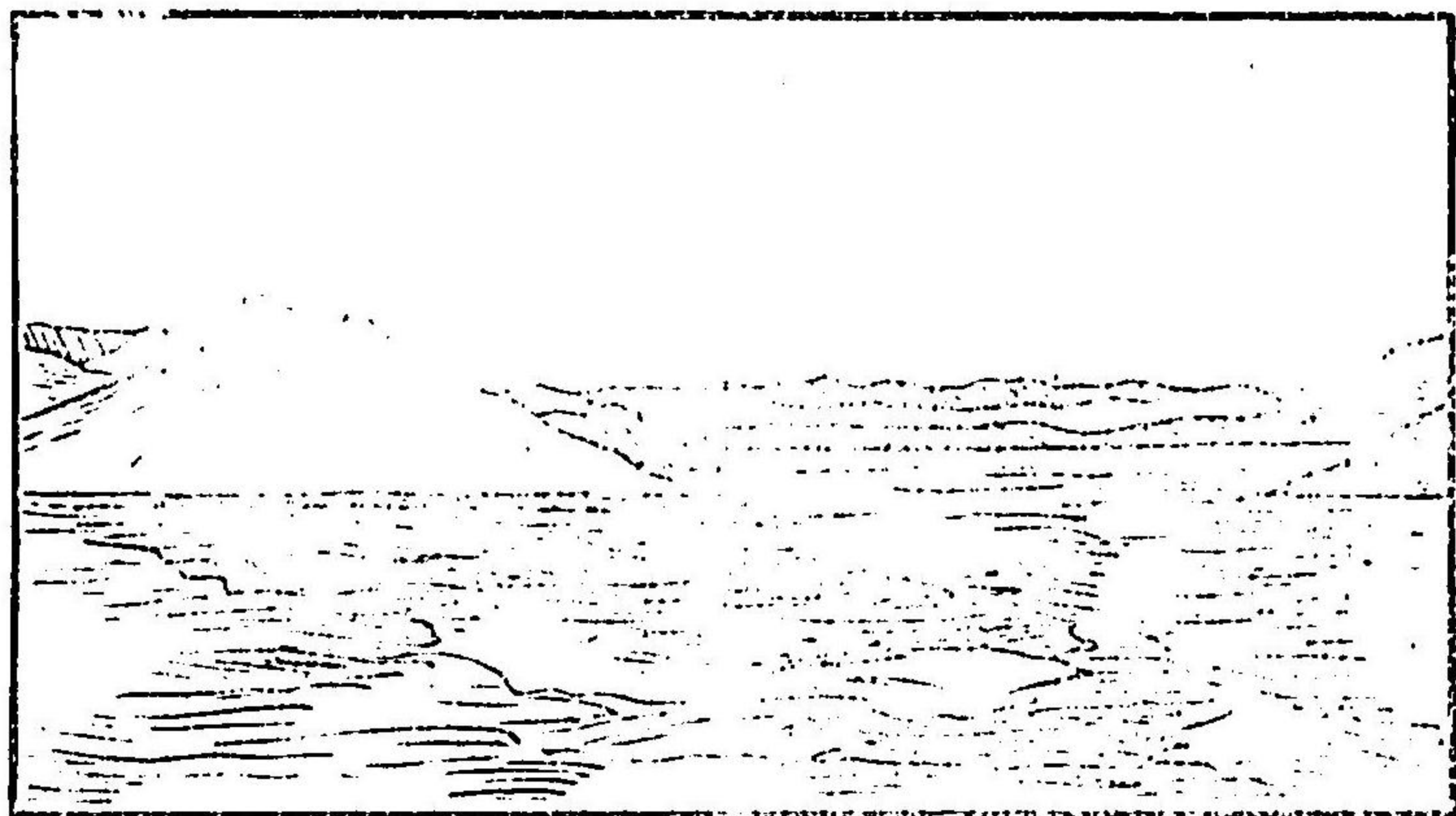
人家の散在せるを見る。此の村をチャガンホトン、ス、アイラと稱せり。峠を下りて進むと約十清里許りにして楡の木のみ多き所に達す。此の邊昔は楡の木繁茂し居たるものゝ如く、今にても所々に楡の林あり。此の處に初めて西の方古城を望む。此の附近の地勢は、峠を降りてより西方は一帶の山地にして、其の間は平地なるが、此の平地は更に東方に向ひて延長せり。峠の下より五清里許りの所にて東方を望めばハムソム見ゆ、ハムソムとは喇嘛廟にして、阿喇科爾沁中最も名ある寺なり。余等は更に馬車を進めて古城に達せり。

二、白城の研究

古城はこれをChaglan Jaken と稱す。チャガンとは蒙古語「白」にして、ホトンとは「城」なれば、即ち「白城」の義なり。蒙古人はこの古城の、抑も何人の何年以前に建設せしものたるを知らず。たゞチャガンホトンと稱し、尤も古き時代のものなるを知るに過ぎず。

古城の位置は三方面山を以て圍み、たゞ東に面せる一方、即ち余等の歩み來りし途の方のみうち開き、其の存在する地は東西十清里、南北五清里もあらん。城壁は他の古城と相等しく土城にして、其周圍は四清里許なり。城の高さは三間、東南に門あり。殊に其の南門は二重

遼時代古城
の標本



白城の圖(後に見ゆは興安嶺山脈)

となり居れり、城壁の厚さは平均五歩にして、城壁の上は歩行するを得べし。而して之に昇るには南門の所にある階段による。又東門の南門によりたる所に、物見臺の如きものありたるが、或は烽臺ならんかとも思はる。この古城は他のものよりも比較的完全に保存せられ居れば、當時の築城法を見るに尤も可なり。蓋遼時代古城の標本として頗る價值あるものと云ふべし。

右の城壁の外に、又低き城壁二重あり。乃ち城は三重となり居れり。第一の城壁(外壁)より第三の城壁(即ち本城)までは距離六百歩許あり。第一の城壁の高さは今日僅かに二尺、第二の城壁は四尺許に過ぎざれども、昔日は尙ほ高かりしものならん。而して各々城壁のある傍には濠を掘れり。尙

城内の遺物

ほ南方に天然の一小丘陵突立し、其上を平にしあるが、こは蓋し防備に使用せしものならん。第一第二城壁内、及び其外には正四角及び長四形の石を積みたる跡見ゆ。こは當時人家に使用せられしものならん。第三の城壁内(本城)は完全に傳の建物、臺石等保存せられ、當時の状態を見るに尤もよろし。香料類の材木の柱とせる物の残れるものあり。且つ此處には有紋の古瓦、古磚等多く散亂す。瓦は黄色、緑色のものもありて、これに龍紋及び、かの上京、廢慶州古城にて得たると同一なる、カソツの葉等を附せるあり。又緑色の傳中、唐草の連續紋様あり。こは明かに西域式にして、尤も注意すべきものとす。余等は此處にて平面圖をひき、又は調査にてしばし時間を費しぬ。尙ほ茲に井戸の跡あり。當時はこれより水を得たるものなるべし。

余等は城外にて『治平元寶』一枚を得たり。この古錢は宋の英宗、治平元年に鑄たるものにして、即ち契丹にありては、遼の道宗の清寧十年にして、我が國にありては、後冷泉天皇康平七年、頼義京師に入れる時に相當す。これに因て見れば、この古城も亦遼のものたるを推知せらる。況んや、城内に存在する遺物、かの上京、廢慶州城のものと相等しきに於てをや。古城の東を前にして一道あり。其の北方は一峠を越ゆればへヒル河に達すべく。尙ほ此處

白城は遼時代のものなり

より遼の上京に至る道(南の方百清里)あるに因て見れば、この城は遼時代のものにして、上京の防備として、設けられたるものなるを推知すべし。この事實亦注目するに價あり。

余等はこの古城及び其遺物に就て云ふべき事多し。されどこは不日公にすべき論文の方に譲り、茲には何事をも記せず。たゞ興安嶺の山中にも、斯くの如き古城の存在することを、紹介し置くのみ。

へヒル河

古城を後に爲し、更に道を東北にとりて、一の峠を越ゆればへヒル河畔に達す。此のへヒル河は、源を興安嶺の山中に發し。東に流れて一昨日渡りしオームリン河と相合し、更に東流してウルジムレン河と合し、遂にチガステノールに注ぐものなり。

此の河は學問上最も注意すべきものにして、今日見たる古城は、全く此の河畔に設けられたりと云ふべきなり。余等は之れより此の河畔に沿ふて、興安嶺を上らんとするものなるが、遂にその河畔なる、モント村に宿泊することとなれり。時に午後四時、本日の行程三十清里なり。

抑もモント村は、へヒル河畔に存在し、土地廣く人家點々散在す。此の村は以前は富める村なりしも今は不幸にし零落せり。これに就ては語るべき一條の慘話あり。并は即ち馬賊の侵入し來りしこと是なり。

モント村

從來馬賊は此の方面に、侵入し來りしことなかりしに、本年四月突然三四百名の馬賊、各々乗馬し武器を携へて、興安嶺の山中を犯し來たり。此の地方にては未曾有の珍事なれば、彼等蒙古人は、非常に狼狽せるも理なり。由來蒙古人は質朴にして、武器を所持せざれば、馬賊の侵入に對して、少しも抵抗する能はざるを以て、一同難を山中に避けたるに、馬賊は益々横暴を極め、馬を奪ひ羊牛を屠りて喰ひ、婦人の銀製の頭飾り耳飾り等を強奪し、且各家貯ふる所の蒙古菓を喰ひ散らし、斯くて一村を荒し盡せば、更に次の村へ進み有らゆる横暴を極めしかば、附近の村落は悉く控弊せり。余等は計らずも、斯かる遭難に逢へる地に到着したるなれば、其の不便言ふばかりなし。蒙古人の語る所に依れば、此等の馬賊は多くは支那人なるが、中には蒙古人も混り居れりと、而して蒙古人は、専ら馬賊の通譯及び道案内を爲せるなり。此の事は興安嶺方面に於ける、最も注意すべき事にして、且特筆大書すべきものなり。

本日の溫度朝十六度、正午二十六度、

三、興安嶺山中に入る

四月三十日。此時新にメーリン騎馬にて從者を隨え來れりしかば、一昨日來隨行し來れる

馬賊の害

家に入無し

ガブチンソム

水邊の遊
ぶを見る

烏珠穆沁の役人は此處にて交代せり。此のメーリンは年齡五十有餘にして、身體大且つ最も強壯なりしかば、隨行者としては最適當なり。又た此の村よりは昨月のシェーチン其の他三名許りの、役人隨行することなれり。午前九時頃此處を發し、へヒル河畔に沿ひて進む。此の附近右左は山脈にして、へヒル河中間を流る。行くこと十里許りにて暫時休憩し。再び河の左岸に沿ひマンハの中を進む。歩行の困難なること實に言ふ許りなし。

然れど景色は、漸次興安嶺山中の風を呈し來たり、身山中に在るを感ぜしむ。此の附近人家は有れど、馬賊侵入せる爲め、住民は難を山中に避け人の片影だもなし。山中寒氣甚しく正午十二時華氏廿一度なりき。

仰けば空は搔雲りて暗濛たり。眺むれば四邊人影無く、寂莫の狀眞に名狀すべからず。余は彼の北方民族が、敵に襲はれて難を他所に避け、家に人なしと言ふを、史上にて讀みたるが、今初めて其の慘狀を目撃せり。隨行の役人は、馬を諸方に馳せて人家を捜したるも、遂に一人だも認め得ざりき。斯くて尙も進み行き、午後三時頃初めてガブチンソムに到着せり。ガブチンソムは即ち喇嘛廟にて、興安嶺山中に在る寺なり。寺は余等の歩める道より、西方約二清里許りの所にして、東にへヒル河流れて風景絶佳なり。此の邊へヒル河の流清く、水邊には四

羽の鶴群れ遊べるを見たり。

余等は今宵の宿を此の寺に借らんとし、先づメーリン一人寺に行きて事情を語り、一夜の宿を請ひたるに、寺僧は快く之れを許せしかば、余等は愈々之に一泊することに決せり。此の日行程約三十五清里。此の寺も馬賊の犯す所となり、什器食料等を持ち去られたる後なりしかば、余等は衷心密に氣の毒に思ひたるが、僧侶は非常に優遇し、一行快く眠むるを得たり。此の喇嘛廟は名をガブチンナムと稱し、西藏風の建築にして百年前の建築に成り、頗る壯嚴を極めたり。僧侶は目下四十餘名有り。此の夜寒甚しく華氏十四度なりき。

本日の温度は朝十五度、正午二十一度、夜十四度。

五月一日。午前八時喇嘛廟を出づ。之れより東方二清里許りを進めば、途中喇嘛廟に接したる所にて、石鏝の材料及び白色の陶器の破片等を拾へり。特に注意すべきは、此の邊は興安嶺の山中なるに、低き丘陵及び平地等に砂を被り居る事なり。此等の事實は砂漠の砂が古き時代より、吹き來りて積りたるものか、面白き現象と云はざる可からず。抑も興安嶺の位置は西は西戈壁の砂漠に接し、東は東戈壁の砂漠に連なる、其の上に砂を被り居るは、此等の關係より來たれるならんか、最も注意すべき事に屬す。

丘陵上の砂

雪降り出づ

余等の一行は之日より本道に出て、尙もヘル河に沿つて進む。今日は天曇り寒氣甚しく雪さへ降り出だせり。道は山と山との間なる平地を河に沿ひて進みしが、途中人家は有れど人影なし。而して人家と言ふも、天幕は既に蒙古人之を持ち去りたれば、僅に柳の垣のみを存せり。之れ亦馬賊の爲めに犯されて、住民何れも山中に避難せるが爲めなり。

今日の道は總じて水多く、土地濕氣を帯び居る爲め樹水繁茂せり。而して之等樹木は主として柳なり。折柄雪は次第に降り積りて、満目唯白皚々たるに至る。余等は車上毛布を被りて、雪中興安嶺を進み行きしに、途中天幕内に休める一隊あるを見せり。近寄り見れば支那人の隊商にして、彼等は昨夜此處に天幕を張りて止まり、更に西鳴珠穆沁に向ひて興安嶺を越えんとするなり。

支那人の隊商

抑も支那人が、蒙古内地に入りて商業を營むには、何れも斯くの如く隊商を組み、牛數頭に商品及び天幕等を曳かしめ、牛は日々之を取り代へて進み、日暮るれば天幕を水邊に張りて一夜を明かし、斯くして漸次其の目的地に達するなり。彼等隊商には夫々得意地あり。彼等は春來りて秋歸るを常とす、商品は蒙古人の日常雜貨類にして、彼等は之れを革類、バター等と交換し、天津附近に持ち歸りて賣り拂ふなり。尙彼等は幼少の時より、蒙古に往復するを

英國旗を樹
てたる支那
商人

フングルテ
村

阿喇科爾沁
に古風を存
す

以て蒙古語も巧みに、身體強壯にして、能く内地の事情に通じ居れり。中には天津の英國商人の旗を建て居るものあり。之れ英國商館の依託を受けて、革毛類を集め居るものなるが、一は又外國旗を建て居れば、蒙古役人の威壓を防ぐを得ればなり。然れども注意すべきは、英國商館が彼等に自國の旗を樹てしめ居る事にて、此等は我が日本商人、亦最も注意すべき事なり、進むこと三十清里にして、初めてフングルテアイラに達し、此處にて一泊することに決せり。時に午後三時頃なりき。

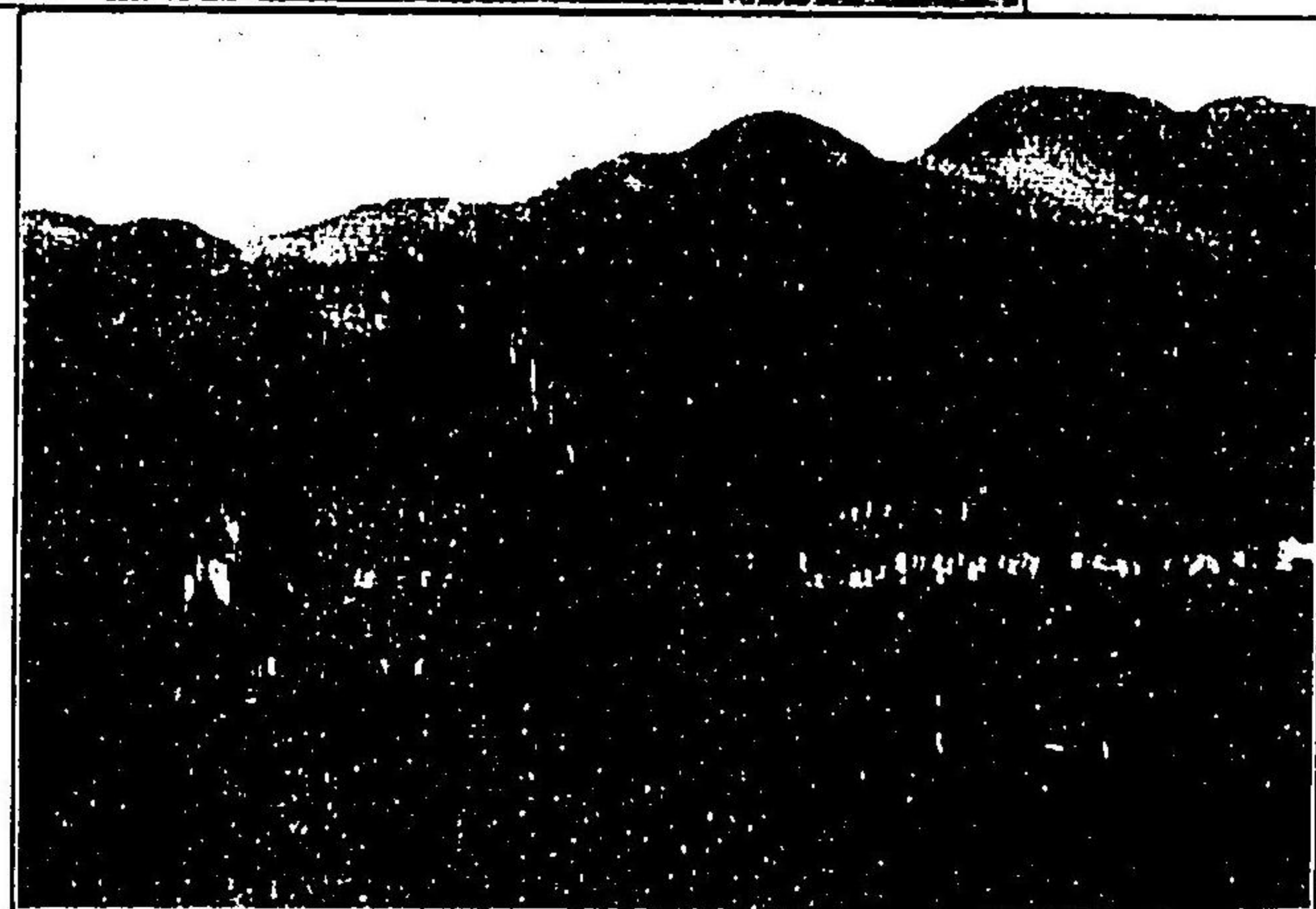
抑も此の村は山間の一小村にして、興安嶺の山中に在り。此の邊山と山との間、約二清里許りにして、水邊には二三の家を認めらる。然して從來余等が實見し來りし、阿喇科爾沁の風俗は、家はツブスングル即ち天幕に芹の種類を用居たるも、此處にては何れも毛氈を用居れり。之れ即ち古き時代の風俗にして、今も尙此處に其古風の残れるなり。又駱駝の毛の糸を巻ける糸巻の如きは、固有の彫刻を爲し、風俗又極めて古風なり。此の日寒氣甚しかりしかば、主人は牛糞を焚きて一同に暖をとらしめたり。此の家も馬賊の爲に荒されて食料なければ、役人は馬を飛ばして、近村より食物を取り來たれり。

余等の宿泊せる家は河に臨める所なれど、他は多く山中に遁込み、河の邊よりは人家を見る

(日二月五)行旅の中山嶺安興



興安嶺山中の喇嘛廟(四月三十日)



(日一月五)落村の中山嶺安興

能はず。余等喇嘛廟を出發して以來、山上より二三の蒙古人、余等を眺め居るを見たりしが、之れ即ち山中に避難せる人々なり。薄暮四邊を眺むれば、野も山も既に一面の銀世界と化せり。余等は即ち紀念の撮影を爲せり。

本日の温度は十五度。

四、興安嶺の脊梁を踰ゆ

五月二日。今日は興安嶺を越えんとす。道最も困難なれば朝早く起き、午前七時頃宿を出づ。余等は四臺の牛車に分乗し、外に食物を積みたる牛車一臺を率ゆ。村民は各牛車一臺に一人宛従ひ、役人其の他の隨行する者も多し。宿を出でてより道は山と山との中間なる、ヘヒル河に沿ひて進む。河畔には人の丈より高き柳樹立ち並び、恰も柳のトンネルを行くが如き感あり。進むこと二十清里にして小高き所に達し、道は之れより漸く上りとなりしかば、一同此處にて暫時休憩せり。

柳樹のトンネル

抑もヘヒル河は、其の水源を此の附近より發するを以て、之れより上は道なく岩石露出して、車を進むこと甚だ困難なり。之れより道を西北方に取りて進み、途中過ぎ越し方を顧み

巖石露出せ
る興安嶺

れば、身は既に深山の中に在り。左右の山は峨々たる岩石露出せり。余等は最初巴林、阿嚙利附沁の下に、遠く興安嶺山嶺を望みし時に、恰かも鋸齒状を爲し居るを認めたりしが、今初めて此處に來りて、左右に見ゆる露出せる岩石の下よりは、斯く見ゆるものなるを知りたり。一行は困難を犯して徐々に上り、二十清里許りにして一の峠に達せり。

放牧の牛を
捕ふ

蒙古人は此の峠をアスルンタバと稱す。峠は非常に峻峻にして、到底今までの牛のみにては上れざるを以て、一同馬を放つて、附近に遊び居たる牛を數頭捕へ來れり。此の邊の牛は何れも放飼ひに爲しあれば、高き岩山の上に五六頭宛遊び居れるが、之れを捕へんとて蒙古人等の、騎馬にて追ひ廻はせる様は實に壯快なりき。斯くて捕へたる牛を車に付け、人は車の前後に繩り、道とても無き峠の急坂を力に任せて挽き上ぐ。此の時一行の總殿メリンは、馬上にて管頭を取りて一行を勵せば、馬上の一同之れに和し、其の聲響しくも亦壯快なりき。車上の我が兒は之れを嬉しがり、共に其の聲に和したり。斯く非常なる困難を犯して、漸く峠を上り終り、一同此處にて暫く休憩せり。時に午後三時頃なりき。

興安嶺の峻
坂を攀つ

抑も興安嶺は黑龍江のアルグン附近より起り、西南方に向ひて進み、遂にシラムレン流域の上源地たる、克什克騰附近に至て終る。實に此の山脈は東戈壁、西戈壁を分界するものにして、

諸種の學術上最も興味あるものなり。

興安嶺山中
の樹林

此の山は朝出發せし時は、餘り傾斜も急ならざりしが、漸く進むに伴れて峻阻と爲り、且岩石露出し居れり。又余等は之れまで途中樹木を多く見ざりしが、今日は多くの樹木を見たり。尙山嶺附近は、既に蒙古人に依りて伐り盡されたれど、今も尙ほ森林の儼を存せり。主として樺、柏カシ等なるが、樺は蒙古人等の車又は、曲物に作るに用ふるものなり。柏は餘りに大ならず、何れも四尺位の高さを爲せり。余等の此處に到着したる時は未だ木も、草も芽を出さざる時なりしかば、花の開く時期の状は知らざれども、雪間に只一種、オキナ草の如き花紫色に咲けるを、採集したり。尙附近に枯草の充滿せるを見れば、夏秋の候に於ては、草の多く茂ることを知り得べきなり。此の草の中にも百合の花の如きは枯れたるまゝにて残り居れり。此處にて山嶺の方を望めば、諸所に樹木の繁茂せるを見る。之れ昔日此の山嶺が、一面の樹林なりし事を證するなり。而して樹木亦主として樺、柏等に屬す。

百合の花

山中の古土
器の面に
同じ

興安嶺を横斷するには數個の道あり。今余等の横斷せんとするは、最も不便なるものなれば、旅客の通行する者極めて稀なり。斯かる山中にも昔人の住めるもの、如く、附近にて土器の散在せるを採集せり。此土器は潢河方面にて、發見せしものと少しも異ならず。何れも素

興安嶺の脊
梁を跨ゆ
村
フンルック

興安嶺を越
えて地勢一
變す

繞にして、表面に木の切れにて縦線を幾個もならべ、模様を附せしものなり。(三月二十九日の條中の圖を見よ) 又た之れと共に石鏃を作る形跡もありて、其の材料も多く残り居れり。之れに依て考ふるに、當時既に此の附近に、人の生活せしものなるべし。而して是等の民族は、潢河流域の者と同一なりし者の如く、この事實は最も注意すべき事なり。

又石鏃の破片を發見したる土地は、水氣ありて草の多く生ぜる所なりしが、今日尙斯くの如きに見れば、當時に在りては尙一層水草の多かりし事を、推知するに難からず。乃ち昔は人の住せし事明なれど、現今は一軒の家も無し。余等は此處にて種々の觀察を爲したる後、更に車にて進む、道は之より下りと爲り、五清里許り北進しフンルックアイラに到着せり。時に午後四時、行程四十清里なり。

此のフンルック村に入るに及び、土地の形勢は前と一變し來たれり。乃ち最初此峠に達する迄は、主として山道を歩みしが、此處よりは丘陵の高原と爲れり。而して其低き所には水草多くして、土地牧畜に適するもの、如し。僅に峠一を越したるのみにて、地勢斯くの如く變化し來れるは到底島國民の知り得ざる所なり。此の附近の住民は尙古風を存し、人情亦質朴なり。此附近は均しく阿嚕科爾沁の管下に屬する者なれど、風俗は其隣地なる烏珠穆沁に酷似せり。

山中住民の
風俗

阿嚕科爾沁
と烏珠穆沁
との中間狀
態

例へば家の如きも阿嚕科爾沁にては、穹廬の屋根及び周圍を蘆もて葺きたるも、此の邊の穹廬は、屋根及び周圍を悉く毛氈にて蔽へり。又風俗も烏珠穆沁と中間の状態を爲し、天幕の中央に置かれたる鐵の圍爐裡の如きも、彼等の好めるオゴルチの紋様を附せり。余等の斯かる圍爐裡を使用するを見たるは初めてなり。其の他種々の如きは木を繰抜きて作り、又た樺の皮にて作れる曲物もあり。動物の皮にても種々なる袋を作り居るを見たり。

余等は此處に一泊することとなりしが、最初より隨行せるシューチン及び之に従ひたる二人の役人は、交代して歸る事となりしかば、余等は相當の禮を爲して深く其の厚意を謝せり。此の夜一同氈帳内に寝ねしが、位置山上なれば寒氣甚しく、僅に牛糞を焚いて暖を取れり。

本日の溫度朝六度、正午十一度。

五月三日。今日は天氣悪く寒氣殊に甚し。阿嚕科爾沁の王府より隨行せしめられしメリー
ンも一日の休憩を乞ひしかば、止むなく一日滞在して種々の調査を爲し、又日記の整理等を爲せり。

本日の溫度朝十三度、正午十八度。

五月四日。朝起き見れば前夜寒氣の強かりしも理なり、附近は一面の銀世界と化して積雪

天候險惡一
日滞在す

横雪三寸

寒暖計零度
を下る

興安嶺の西
方にも、潢河
方面と同一
土器を存す
咫尺を辨せ
ざる吹雪

三寸餘に達せり。午前八時に於て室内は華氏六度、室外は零度以下なりき。役人は一昨日の疲労と今日の寒氣にて、出發する事を欲せざりしが、午前九時之を促して出發す。太陽は僅に光を放ちたるが、忽ち雲に隠れ、寒氣愈々甚しく、零度を下る實に二度なりき。余等は羊毛の上着を着し車にて進む。此の村の附近より西北方に一河ありしが、今日の道は此の小川に沿って山間を北進するなり。斯くて暫く進む中天氣次第に悪しく、降雪甚しく寒氣亦強し。此處より新なるシューナン隨行せり。

一同北に向ひて進むこと三清里許り、夫より河に沿ひて西すれば、河の曲り角より少し進みたる所にて、古土器の破片を發見せり。之れに依りて見れば興安嶺の西の部分にも尙潢河方面に於けると同一の民族の住せしを推知し得べし。更に之より河に沿ひて五清里許り西すれば、南西方より一溪の流れ来るに會す。此の時降雪愈々甚しく、眞に咫尺を辨ずる能はざりき。其の困難なること、到底都人士の想像し能はざる所なり。

余等一行は毛革を被り、毛布を着して進めり。斯かる寒にも拘らず、我が幼兒は獨り平氣にて最も元氣なりき。又阿喀科爾沁の衛門より隨行せるメリーンの如きは、初めて此の邊を旅行する事なれば、最初出發の際、下の方と同じ氣候の如くに思ひて、防寒の用意も充分に爲さざりし處に宿泊する事と爲せり。

ウレングツ
キ村

りしかば、非常に困難せり。五月四日にして未だ降雪あるは、將來旅行者の最も注意すべき事なり。斯くて一小峠に達するや、道は今迄沿ひ來りし本流を離れ、更に溪流に沿ひて南西す。此の邊樺、柏(Quercus Mongolica?)等の林を爲し居れり。一行は林中を進むこと七清里許りにして、ウレングツキ、ヌ、アイラに到着せり。時に正午十二時なりき。行程僅に十五清里に過ぎず。余等は此處にて暫時休憩して進まんとしたるが、一同疲労甚しかりしかば、止むなく此處に宿泊する事と爲せり。

アイヌ村の
如き山村

此の村は狭き溪間に在る一小村落にて、氈帳僅に三個許り張りありたり、何れも家貧にして富める者なし。されど村落の周囲は悉く樺、柏、柳の林を爲し、地勢恰かも我が北海道に似たるものあり、村落亦アイヌのコタンにあるが如き威を生ぜしむ。此の村は斯く林中に在れば薪は最も多く牛糞等は更に用ゐず。何れも樺、柏の枯木を取り來りて焚けり。斯く溪間の一小村なれば、西烏珠穆沁街道の本道を通行する人は、此處に村落あるを知らざるなり。

阿喀科爾沁
最終の村落

余等の泊りたる家は狭くして、且つ村には戸數少なければ、一同寝る所なく、隨行の人々は家の傍に氈帳を張りて一泊せり。此の村は阿喀科爾沁最終の村落にて、之れより西は直に烏珠穆沁の管下に屬す。村民の生活状態を見るに、烏珠穆沁に接近せるを以て、風俗も之れに似た

蒙古人の奇習

るもの多く、又た樺の皮にて製せる曲物多し。余は此處に來りて面白き風習を見たり。并は余等の宿泊せる氈帳内に、犢三頭寝ね居りしが、何れも其の耳より血を流し居るに、能く注意すれば、耳を切られたるなり。之れに就て蒙古人は語るらく、本日は犢の耳を斬る風習ある日なりと、此の夜種々の調査を爲して寝に就きたり。

本日の温度は朝は外〇、二度(室内六度。)

五月五日。余等は早朝例の如く、蒙古茶を飲みスーテバダを食せり。スーテバダは蒙古にて最も馳走の一なり。之は黍(Mongolian)を牛乳にて煮たるものにして、蒙古語のスーテバダとは、即ち乳を有する飯と言ふ意なり。

今日は昨日の降雪にて、野も山も一面白皚々として、寒氣は強けれど、景色の美しきこと言ふ許りなし。午前十一時寒さを犯して出發す。途中一の峠あり。山道險しく車を進むること、甚だ困難なりしかば、村民多く隨行せり。樺栢の林中を進み、漸くにして峠に來れるが、之れより上り愈々困難なり。峠は地勢圓形を爲し居れば、蒙古人はマラガイインタバと稱せり。即ち帽子峠の義なり。牛車の前後には多數の人隨ひ、一步に憩ひ、二歩には休み、漸くにして峠の頂上に達せり。この邊栢の樹尤も多し。頂上に立ちて往路を顧みれば、山脈重疊して傾斜甚しく

スーテバダの馳走

帽子峠

西烏珠穆沁に入る

山上總て雪を頂けり。而して其の最も高き峠の續けるは、即ち興安嶺の本系なり。之れより余等は、傾斜甚しく歩行困難なる峠を下りて一村に達す。之れ即ち烏珠穆沁最初の村落なり。爰に於て土地全く一變しマンハと爲り、樺殊に多く其の樹間には點々氈帳を張りあるを見たり。尙進みて一村に達す。附近に一小流あり、一昨日沿ひ來たりし河は此處にて相合し居れり。余等は此の村に入り役人の家に一泊せしが、村は風俗既に全く一變し、西烏珠穆沁固有の風俗を呈せり。

五、興安嶺の名稱研究

抑も興安嶺なる名稱は清朝に入りてより、盛に稱へらるゝものにして、これを正しく發音せば Hingganling なり。この山名は、單にこれを文字の上より解釋せば、興、安、け、嶺、てふ意味なれども、これは漢語にて、始より斯くの如き命名を有せしものなりしか、大に研究すべきものなれども、今日までこれに就て、學問上の疑ひを起せし者あらざるが如し。

余を以て見れば、この山をヒンアンリンと呼ぶは、もと漢字の示せる意味を有するものにあらずして、寧ろ其發音を取りしものと思考す、余が今茲に新しく斯くの如き説を有するは、

興安嶺の名稱の研究

興安嶺とは當字なり

蒙古人の稱

多少確かなる據り所あればなり。左に聊か自から考へる所を述べんとす。

先づ本問題に就て確かむ可きは、蒙古人はこの山をいかに呼べるかと云へる事なり。余等はこれが爲めに巴林、阿魯科爾沁、東、西烏珠穆沁、札魯特、さては外蒙古の車臣汗の東邊の蒙古人に就て其山名を聞きしに、彼等は何れも互に相等しく Han ula (Khan ula) と稱す。且音は内蒙古の發音にして、これが外蒙古に至れば Han ula となる。蓋し後者の方古音なるが如し。Han とは『皇帝』にして支那人の所謂『汗』なり。支那人は即ち古くより皇帝を憚り、汗とせしなり。こは文字と云ひ、發音と云ひ、尤も適當なる言葉なり。果して然らばこの山の蒙古名は『皇帝山』の義あり。彼等は何故にこの山を稱して『皇帝山』と呼ぶかと云ふに、この方面にて興安嶺は他の諸山を抜きて最も高ければ、山の王、山の皇帝と云へる意味より、かくは『皇帝山』の名を附するに至りしものなり。

ハンオーラとは蒙古語の口語にして、文語にてはこれを Haghlan aghola (Khaqlan aghola) と云ふ。而して尙ほこれを、其附近に住する滿洲人の滿洲語に直譯せば、又 Khan alin となるなり。

皇帝山

蒙古語のハンオーラは、尤も古き時より、この山に向て興へられたる名稱ならん。すでに興

興安嶺の發音の轉訛

安嶺がこの名を有するとせば、次に續て起り來る問題は、漢字のヒンアンリンの發音是れなり。余はこのヒンアンリンの發音は即ち蒙古語のハンオーラ、若くは滿洲語のカンアリンと相等しきものと考ふ。今試にこれを左に列記し、比較せんに、

- 蒙古語 Han ula (Khan aghola).
- 滿洲語 Khan alin.
- 漢語 Hing-agan-jing.

見るべし。いかに相類似するかを。余はこの理由により、支那語の興安嶺は、もと北方民族の呼べる名稱の發音を取り、これに美しき目出度き文字を配當せしものとなすものにして、眞の意味はヒンアンリンの發音の示す所、即ちハンオーラ、カンアリンにして、『皇帝山』なり。

『興』は古音 hing, jaug, king, kang, sang にして『安』は古音 an, aung, an, ugan なり。而して『嶺』は古音亦 ling, long と云ふ。

第八 西烏珠穆沁

一 西烏珠穆沁と蒙古風俗

五月六日。抑も西烏珠穆沁(Parashon uelimchin)は、其位置、興安嶺の西に存在し、錫林郭勒盟(Siling Gol)盟の一なり。錫林郭勒盟とは、即ち左の四旗よりなれるものなり。

烏珠穆沁 (Uelimchin)
浩齋特 (Kiochinid)
蘇尼特 (Sunid)
阿巴噶 (Abagha)
阿巴哈納爾 (Abaghanar)

烏珠穆沁は其位置、興安嶺の西部の僻地にあるを以て、人情尤も質樸にして、よく蒙古の古風を存せり。其生活は主として牧畜を以てす。現今内蒙古に於て固有の蒙古風俗を見んとせば、必ずやこの地に於てせざる可からず。其附近の蒙古人は烏珠穆沁の位置、風俗等の上より見、これを外蒙古(Ar-Mongol)と稱するものあり。而して彼等は一も支那語を知らず、純然たる蒙古語をのみ使用す。

錫林郭勒盟

烏珠穆沁の位置

蒙古風俗
研究と烏珠
穆沁饅飽の御馳
走

余等は今朝疾く起き出て、荷物などの整理して車夫の來たるを待てど未だ來らず。兎角する中に此の家の主人は、晝飯にとて自ら饅飽を持ち出てたり。由來北方の蒙古人は饅飽を非常の御馳走と爲せり。之は専ら主婦の手づから作る者にして、其の原料はコルラと稱し、支那商人より買ひ入れたるメリケン粉にして、蒙古人は常に之れを蓄へ置き、來客又は儀式の時に用ゐる居れり。饅飽の打ち方は太けれども却て上手なり。併して出來上れる時は、其の儘大鍋に羊肉を入れ、煮立ちたる湯の中に投じ、饅飽の煮上ると同時に鹽味にて客に出すなり。尙コルラは菓子に作り、或はバターにて上げて製することもあり。余等は之れを食し終りたるも尙車夫等來たらざれば、此の時間を利用して寫眞を撮り、男女身體の測定などをなせり。午前十時車夫漸く來たりしかば愈々此村を出發す。一行は牛車五臺の外にチンステーションに乗馬にて隨へり。道は等しく谷間のマンハにして、ブルギン河に沿ふて進むこと十五清里にして一小峠に達せり。此の峠を越えて五清里許ブルギン河に往く一小河畔に沿ふて進み、午後二時頃スリドルンアイラに到着し、一同此處に宿泊することゝなれり。本日の行程は二十清里なり。

スリドルン
村

今日余等の經過せし道は、興安嶺の西方を下れるものなるが、其の傾斜の度は阿喀科爾沁方

蒙古人の天幕を研究す

面、即ち東方より興安嶺に上りし時の如く甚しからず、殆んど爪先き上りと云ふ可き位なり。この邊の土地は何れも高原的性質を帯び、諸所マンハになり居れり。今夜宿泊する村は、今回新に移り來たれるものらしく、家屋は點々散在し、尙現に氈帳を張りつゝあるをも目撃せり。余等は其の内の新らしき内に寐る事とせしが、此處にて蒙古人の天幕生活を研究せんと思ひ立ち、家屋及び食器などの調査をも爲せり。

本日の溫度朝八度、正午十七度。

トゴチンタ
再び杏樹を
見る

興安嶺東西
の溫度の差

五月七日。午前九時此處を出づ。出發に臨みて蒙古人の體質を調査せり。前夜來の南風益々吹き荒み、道路の砂を捲きて不潔言ふ許りなし。道を西北方に取って進むこと三清里許にして一小峠に達せり。トゴチンタバと稱す。途中杏樹の立ち列べるを見たり、こは阿嚙科爾沁にありたる杏と同じものにして、余等は實に久振りにて之れを見たり。されど何れも蕾のみにして未だ花を開かず。彼の巴林、阿嚙科爾沁の境に在りしものよりは約一個月遅れたり。即ち興安嶺の東部にては、一ヶ月前既に蕾を有し、此處（西部）は一個月遅れて蕾を生ぜり。之れに依て見るも、興安嶺の東部と西部とにて溫度に相違あるや明なり。峠を越えてより或は平地を歩み、或は丘陵を登りて進むこと五清里許にて、初めて車の通ぜ

福壽草の如
き花

し跡ある道に出づ。此は烏珠穆沁王府に通ふ本道なり。蒙古人の語る所に依れば、道は先日通過せし彼のマラギンタバより來たる本道なりと言ふ。之れに依て見れば、余等は本道を通過せずして、間道に沿ふて來りしものならん。

余等は此の邊にて初めて紫色を呈せる、形狀福壽草の如きオロガンヌチックの、多く咲き誇れるを見たり。こはオキナグサの屬にして即ち *Anemone pulsatilla* なり。滿目蕭然たる中に、優しき花を見出せる余等の悦びは譬ふるに物なく、直に之れを採りて折紙の間に入れたり。併して此の草花は興安嶺方面に於ける、花の最初の福壽草とも思はれて床しかりき。

斯くて再び平地を歩し丘陵を越えて進む。途中は唯牛馬羊の羣を見るのみにて、人影だも認むる能はず。加之、天候曇り風荒み、陰鬱の感眞に堪へ難きものあり。斯くの如く淋しき道を進むこと三十五清里にして、コルバンアイラに到着し此處に宿泊する事となれり。

余等の宿泊せる家は大官メーリンの家にて、其の氈帳は非常に大なり。折柄主人は病中なりし爲め、弟の喇嘛僧となれるが當時寺より歸り居たれば、之をして余等を接待せしめたり。此の喇嘛僧は好人物にて種々の話を爲し、余等の之れに依りて益を得たること尠からず。家は最も富み氈帳をも多く所持し、下男下女も多く使役し、牛馬羊駱駝も相當に所持し居たり。此

蒙古人の優
待

處も亦馬賊の侵入に逢ひて家畜、頭飾り、靴等を強奪されたりと。余等は此處にても風俗習慣等を調査して寝に就きたるが、氈帳の餘りに廣大なりし爲め、屋内容易に暖まらざりしには閉口せり。然れど主人の優遇は忘る可からず。

五月八日。朝起き出て見るに昨夜よりの風尙歇まず、雪さへ降り出せり。之れにて前夜の寒かりし故も判りたり。午前七時頃に至りて空漸く霽れしかば、人々に種々の風俗を爲さしめて寫眞を撮り、其の他の調査をも爲せり。

興安嶺の山頂附近にて、薪は樹木を用ゐる居たりしが、此の邊には樹木なければ一般に牛糞を用ゐる居れり。薪に牛糞を用ふるは、甚だ不潔なるが如く考ふる人もあらんが、元來蒙古は空氣乾燥せるを以て、牛糞も二三日にて乾燥し臭氣も自ら消失す。故に之れを燃料に供するも更に臭氣なく、寧ろ油氣ありて火力強く、其の無盡藏なるに至つては眞に得難き燃料なり。而して蒙古人が之れを拾ふ方法は、柳の枝にて作りたる籠を背負ひ、手に熊手を持ちて牧場に行くなり。斯くて拾ひ來たれる牛糞は、テントの周圍に石垣の如く積み置きて朝夕使用す。又之れを拾ふは婦女子及び下男下女の一の務めにして、毎春秋より冬にかけて朔風雪を降らす時は外出困難なれば、夏時之れが用意として澤山集め來り、貯へ置くなり。

牛糞の燃料

烏珠穆沁の牧畜

農業に従事せざるを榮譽とす

支那語全く行はれず

斯くて午前十時一同此處を出づ。主人メーリンは病氣なれば、チンステファン一人これに代つて乗馬隨行し、其の他牛車に附ける男三人及び外にタイチ一人隨行せり。之れまで東翁牛時、巴林、阿魯科爾沁等の旅行には、牛車に附ける人は乗馬せざりしが、烏珠穆沁にては乗馬にて隨行せり。之れ最も風俗の異なる所にて、最貧困者にあらざる限りは大概乗馬せり。殊に烏珠穆沁は内蒙古にて最も牧畜の盛なる地にて、農事は始んど措て顧みず。然れば彼等の食するモンゴルアムは、總て阿魯科爾沁の方面より輸入せり。

此の地一般に農業に従事せざるを以て榮譽とし、牧畜を以て本位と爲せり。併して土地亦高原的にて草多く生じ牧草に最も適せり。思に現今内蒙古にて彼等純粹の古風俗を見んと欲せば、此處を以て第一とせざる可からず。且土地遠き所であれば今尙ほ幸にして、南方清國人の感化乃至、北方露國人の感化を受くる事少なく、其の性亦質樸にして支那語も全く行はれず。然れば將來烏珠穆沁を旅行するには蒙古語の必要あり。

余等は旅宿を出でてより、道を西方にとりて進みしが、土地單調にして丘陵若しくは平地のみなり。今日も前日の如く途中人に會せず、唯家畜類の群を爲せるを見るのみ。進むこと五清里許にして丘陵盡きて平地となれり。蒙古人の語る所に依れば、此處は巴林方面より烏珠

穆沁に通ふ大道なりと。此處に二筋の河あり、南より北に向つて流るゝ河は、インチャコルと稱しその附近は最も富めり。而して兩岸の間なる平地は沖積層にして、土地最も肥え、水氣ありて草を生じ牧畜に適せり。河の岸には鶴、雁の群れ遊べるを見たり。當時インチャコルの水は、深さ一尺中二間位なりき。此の邊四圍の眺望に富み、首を回らせば余等の下れる興安山嶺の雪を望むべく、更に其の南方に走り居る様をも知り得べし。而して南方より少しく西方に向て走れる峠を越えて、南方に進めば即ち巴林にして、此の峠を下に降れば、曾て余等の旅行せしチャガンサバラガなり。(四月十四日、十五日、十六日、十七日の條を見よ)蒙古人の語る所に依れば、此處よりチャガンサバラガまで、は百清里にして馬を早めて行けば、一日にて達すべしと。尙此の附近より巴林に通ずる道は俄に廣くなれり。

インチャ河

インチャ河は源を巴林の境に發せり。此の河は烏珠穆沁にて最も注意すべき河なりとす。この河畔より曾て『常平五録』の古錢出たりと稱し、余等も其の一個を貰へり。此の錢は北齊の錢なるが、當時契丹と北齊とは、非常に深き關係を有せしものにして、この事に就ては他の所にて精しく記すべし。

余等は試に東方に當つて、彼の高く聳えて雪の積れる山の名を尋ねたるに、烏珠穆沁の人は

ハンオーラなりと告げたり。ハンオーラとは即ち興安嶺の事にて、阿魯科爾沁の人の稱せる名と同一なり。

彼のインチャ河畔は、興安嶺の南方に向つて走れる状態を見るに最も適當なる地にして、即ち其の山より東は阿魯科爾沁にして南は巴林なり。要するに余等は巴林より阿魯科爾沁、烏珠穆沁に來たれる道は、山に沿ひて横斷なし來たりしなり。インチャ河上は昨夜余等の宿泊せし家より十清里なるが、余等は此處にて河を渡り東に丘陵を越ゆ、丘陵は一小峠を爲し、ガチユータバと稱せり。斯くて進むこと三清里許り南行し、初めてホトカヌアイラに到着し、此處に宿泊する事となれり、時に午後二時行程二十清里なり。

ホトカ村

余等は此處に到着してより、隨行の蒙古人の測定を爲し、種々の調査を爲せり。此の時彼等の一人は語るらく、先日この邊に來りし馬賊は重に支那人、蒙古人なり。而して蒙古人は喀喇沁、科爾沁邊の者なり。又馬賊中には支那人、蒙古人、露國人にもあらぬ者五六人あり。其の何國の人なるや知り難けれど、露國人の如く髮赤からず、眼も黒く、一見蒙古人の如くなれど、容貌其他に何となく異なる所あり。言語も亦解し難し、併して彼等馬賊はウルムスと言ひ居たるが、其の何國の人なるかは知り難けれど、常に馬賊の指揮者たりと。此ウル

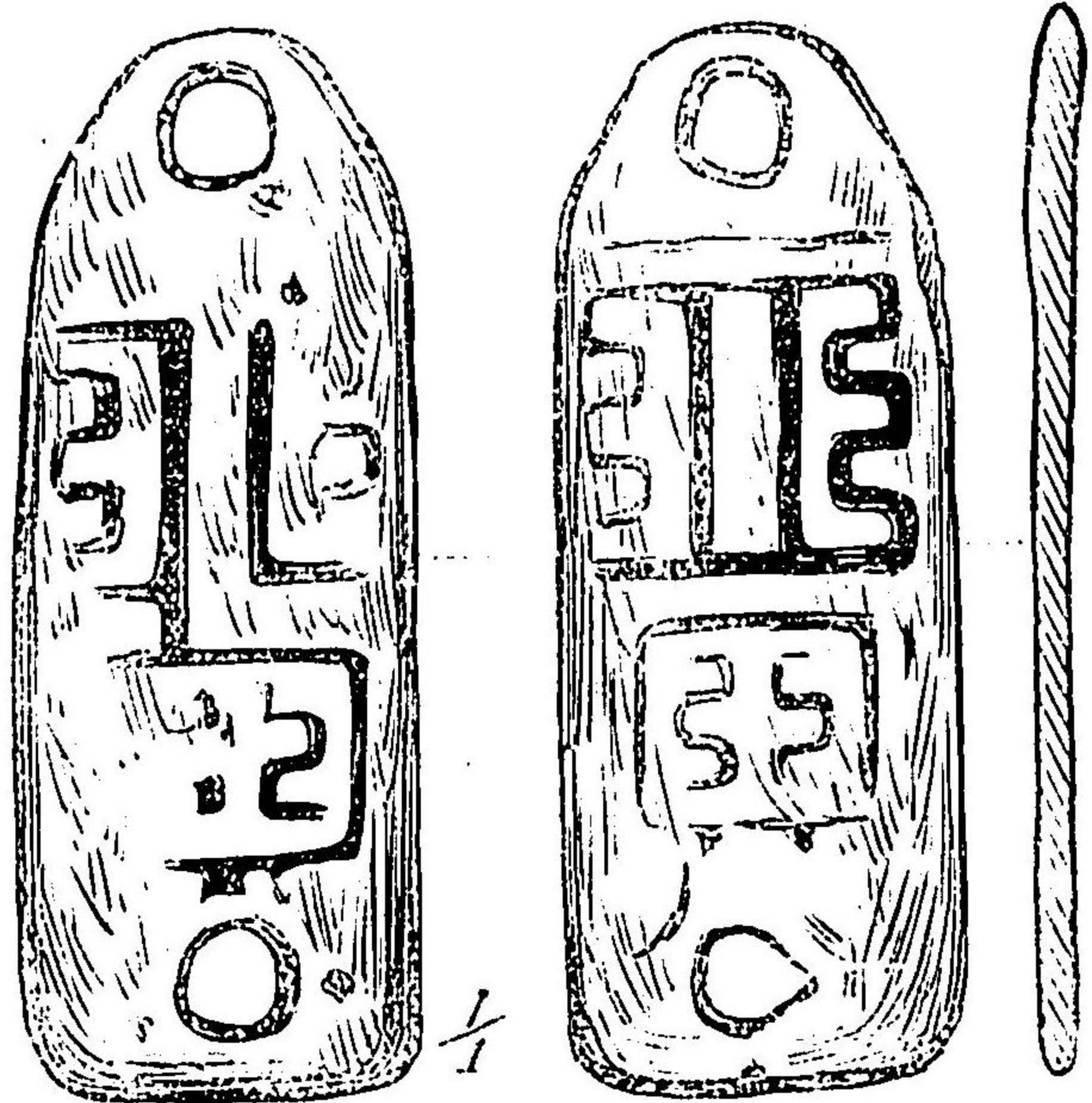
馬賊の指揮者ウルムス

ムス人が如何なる者なるかは知らざれど、兎も角注意すべき事に属す。
余等の今宵宿泊せるは村長の家なり。主人は年齢五十以上の男にて、妻は髪を剃り居たり、夫婦とも親切にして頗る余等を好遇せり。而して主人夫婦は既に老人なれば、附近に喇嘛僧の還俗して住せるを呼び來たり接待せしめたり。此の男は性質甚だ良からず、烏珠穆沁人としては實に珍らしきものにして、余等の目前にて家人の不在に、戸棚を開けてバター又は干肉を持ち去りたり。余は曾て蒙古喇嘛の還俗せる者は、性質惡し、と聞きしが、今其の真なるを知り得たり。

今日余等は此處にて種々の調査をなし、且つ種々の土俗品を購ひ求めたり。

五月九日。早朝隨員の體格測定及び寫眞の撮影など爲し、午前八時過ぎ出發せり。一行はチンスタン一人騎馬にて隨ひ、外に牛車五臺人夫四名あり。此等の四名の内一名は年齢三十七八にして、他の三名は二十歳前後なり、何れも無邪氣にて面白く、途中唄など歌ひ行けり。唄は烏珠穆沁固有のブンブリなり。蒙古には各地方に依りて夫々固有の歌あり。

此の日ホトカヌアイラを出發するに際し、素焼土器の破片を拾ひしかば、土人に就て何者の残せしものなるかを聞きしに、彼等はクイルフンの遺物なりと語れり。之れに依りて見れば



此の附近も亦興安嶺の東方と同一の者の住したることなり。

余等の牛車に隨へる四名の内一名は、腰に銅にて作れる扁平なる長方形の小板の如きものを付け居たり。之れは挿入せる圖の如きものにして、其の表と裏には文字を彫刻せり。此の文字は漢文字にあらず、蓋し契丹文字の如し。これは旅行の切手か若くは戦時の割符の如きものにして、常に腰に附けたるもの、如し。余等は土人に何處より之を得たるかを聞きしに、彼は七年

前フルルンムに參詣の際、其の附近のマンハ中にて拾へりと語れり。而して其の彫刻しある文字は、四月八日大巴林にて見たる石碑の文字に似たる所あり。想ふに同時代のものなるべし、こ

のフルルソムは此處より南方に在る喇嘛廟にして、昨日余等の渡りし河の上流に在り、小巴林のチャガンツバラガに行く途中也。されば之は遼時代のものにして、當時の旅行券割符の如きものに使用せしものなるべし。

バインアル
ツク村

余等は彼等の青年より叫を聞き、又烏珠穆沁の唄に關する談話などしつゝ、愉快に進めり。道はマンハ、丘陵の上を歩み或は平地に下り、西方に向つて進むこと十清里許にてバインアルツク、ヌ、アイラに着せり。

家屋新築の
新藪

此處には戸數十個許あり。内三戸許は入口の左右に棒二本を立て、之れに綱を引き、綱に紅白等の布切れを吊せり。之れは新に移住し來たれる家にて、其の棒及び布切れは喇嘛僧の來たりて祈禱せる跡なり。總て蒙古人は新に家を作る場合は、斯かる祈禱を爲すを常とす。

バラツク村

之れより西方に進むこと六清里許にしてバラツク、ヌ、アイラに達し、此處に一泊するととなり。時に正午十二時、今日の行程は十五清里なり。今日經過せし道はマンハ最も多く、牛車の進行甚だ困難なり。而して此の方面は、未だ興安嶺の西麓に方る所なれど、地勢は全く一變して大うねりある丘陵、及びマンハにして眞に高原的狀態を呈す。斯く砂土の存するは西戈壁の砂漠近きが故なるべし。

本日の溫度は朝十五度、正午十七度。

馬賊の横行

五月十日。主人と種々の物語りを爲せる中に、特に耳を傾くべきは彼の馬賊の事なり。曰く四月廿七日三十人許りの馬賊來たりしが、彼等の中には索倫及び喀喇沁、達賴等々の蒙古人も混り居り、此處にて食物を奪ひ悠々として立ち去りたりと、之れに依つて考ふれば、此邊に馬賊の來たれる時には、互に隊を別つて各村を荒しつゝ進めるものゝ如し。この索倫とは黑龍江の上流、清國領の黑龍江省に居る索倫(Solon)の事なり。

斯くて午前八時一同此處を出發せり。今日は新に此の村の役人交代して隨行の筈なりしも、足痛めりとして來たらざりしかば、止むなく昨日のチンステファン騎馬のまゝ隨行せり。道は同じく高原にして南方山を望み、北方は一面に打ち開けたり。余等は西に向ひて進むこと二十七清里許にて方向俄に變じ、南に向つて進むことゝなりしが、之れ地勢の一變せるが故なり。

ゴルギン河

此處に南より北に流るゝゴルギン河あり。此の河は幾多曲折し、其の兩岸の間は三清里許もあらん。現今水の流れ居る所は僅に二間許なり。併して兩岸水なき低地は、沖積層にして草を生じ、牧畜に最も適せり。尙此の河は東南の山麓より流れ來り、ハイルハンオーラ山の麓

にて、東方より流れ來たる河と合す。之れより河の左岸なる丘を歩し、進むこと三浦里許にてオンホシヨウに達せり。時に午後一時頃なりき。

舞鶴の遊観

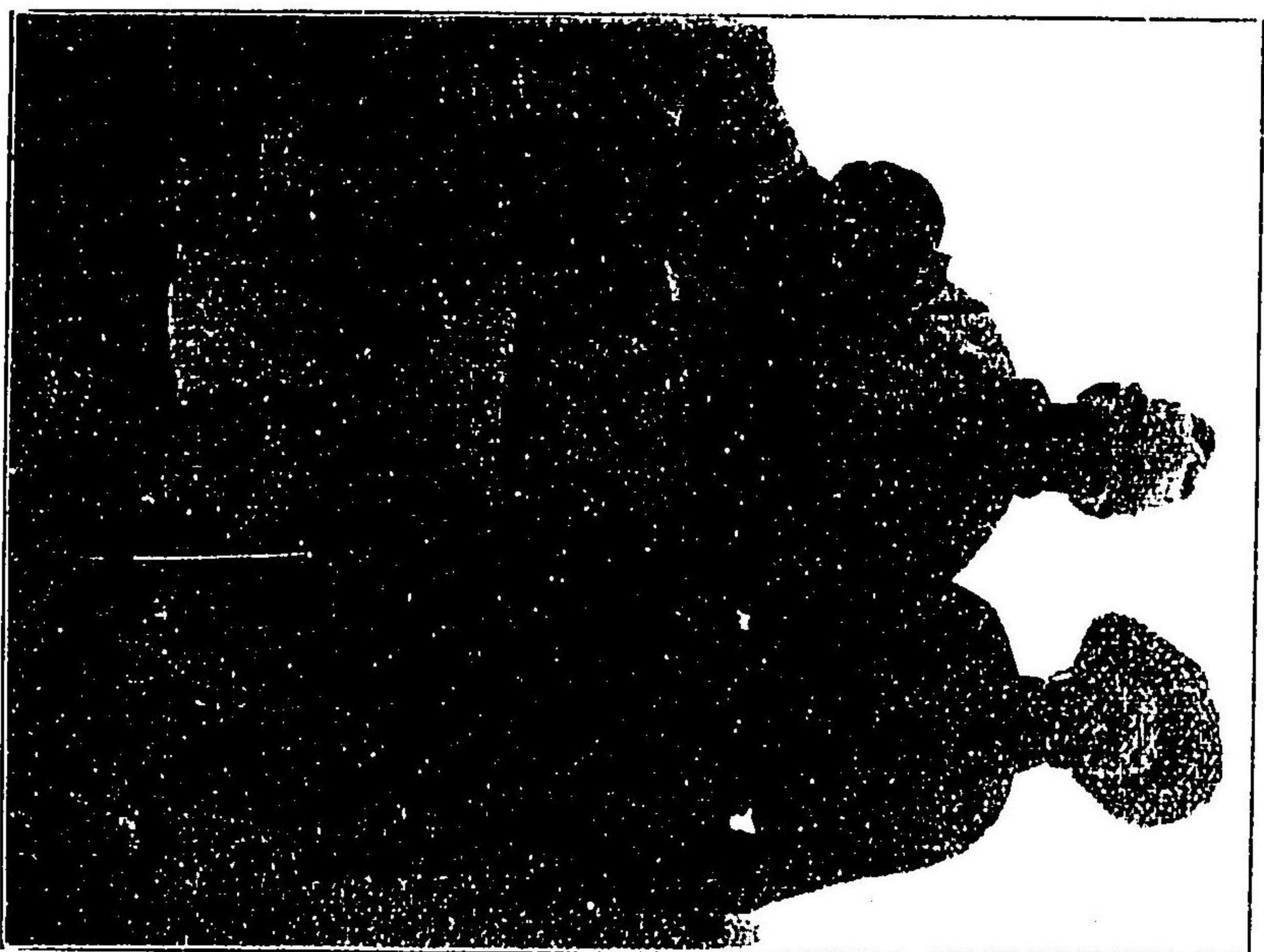
余等は初め此の河を渡らざる前、途中丘の上にて二羽の灰鶴羽を延べ片足にて踊り上りつゝ、打ち舞ふを見たり。余は幼少の頃より、鶴の舞てふ事を話にも聞き書物にても讀みたるが、未だ實際に其の状を目撃したる事なかりしが、今之れを眼前に見るに及んで、余は其の餘りに美しきに驚嘆せり。二羽の鶴は互に翅を擴げて地上を走り、或は又中空高く舞ひ上るなど、其の状一々名狀すべからず。併して鶴は余等の近寄るも、更に驚ける様子なく、悠然たる状は自ら崇高の念を感ぜしめたり。

ゴルギン河畔の遺物

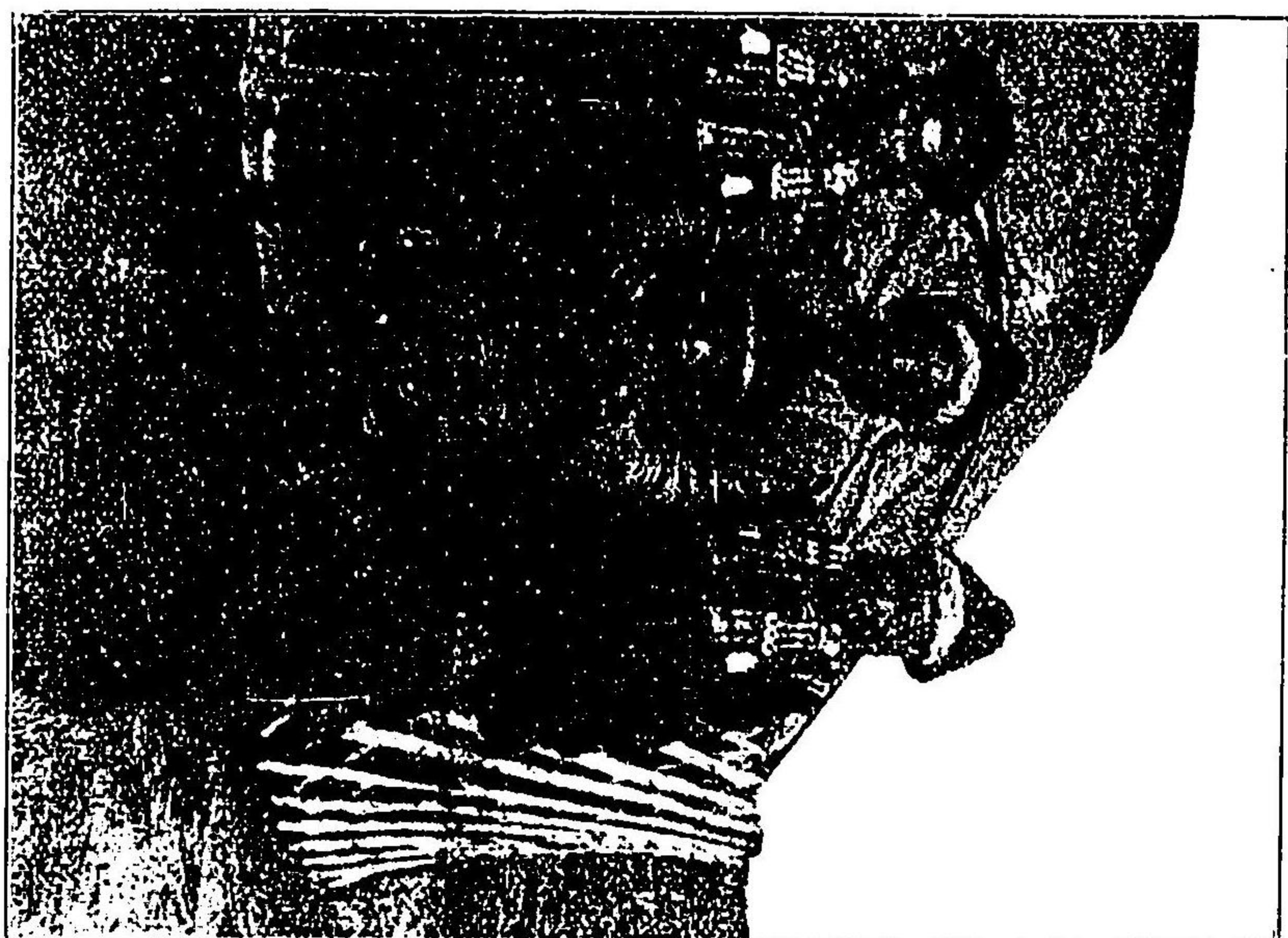
此の邊河に達するまでの丘陵は、一面の高原にして廣かりしが、河畔俄に狭くなり來たれり。余等は此の附近にて一個の石器を拾へり。之れ明に石器時代民族の遺物にして、之れに依つてゴルギン河畔にも、曾て古き時代に於て人の住まへる事を知り得たり。

オンホシヨウ村

余等は此のオンホシヨウにて中食を喫せり。此の村は人家七八戸ありて、何れも盛に羊を飼へり。今しも一人の女子が出て、羊飼ふ有様を見るに、彼の女の寒氣を凌ぐ爲め、帽子を眼深かに被りて耳まで被へる様は、朔北の風俗畫を見るの感ありき。



朔北の風俗畫



(女)朔北の風俗畫

達賴平の蒙
古人多く此
地に出現す

純蒙古風の
旗

蒙古の移住
者及び巡禮

余等の中食を爲せる家の主人は、村の役人にして年齢六十歳位なりき。而して此の家に東方より來たれる、達賴平蒙古の女中居りしが、主人は之れを自分の妹なりと言ひ居れど、實は其の妾なり。烏珠穆沁には興安嶺を越えて來たれる達賴平の男女多し。こは同じ地方の支那人移住頻繁にして、生存の競争に堪へ能はざる結果、彼等に夫妻相携へて興安嶺の西方に出稼ぎ、男は下男となり、女は妾又は女中となるなり。されど彼等は性質極めて悪しく、到底此地の蒙古人とは比較すべからず。

此の邊も他の地方と同じく、氈帳の入口には毛氈にて作れる厚き簾を吊り、之れに駱駝の毛にて模様を縫へり。こはウードヌスチックと稱し、専ら家婦の作れるものなり。此のウードヌスチックは、蒙古美術の一とも見るべく、其模様も蒙古人の意匠を遺憾なく顯はせり。余の妻は中食中此の模様を寫し取りたり。こは學術上の參考にも資すべきものなり。斯くて一同中食を喫して再び出發す。但し牛車は此處より取り代へ、尙外に村人二人騎馬にて隨行せり。村はゴルガン河の沿岸に在り。河水は真中を少許り流れ、西岸の丘陵は沖積層を爲せり。余等は河を渡り丘陵の上を進む。道は廣くして南方オボのある山近く、北は一面に打ち開けり。余等の進み行く途中左方に當りて、近く十一臺の牛車の通行するを見たるが、之れ蒙古人

の移住するなり。又途中札幌特蒙古の喇嘛僧の行脚に會せり。蒙古人は良く巡禮を爲すの風ありて、其の服装は我が國の巡禮と大差なく、脊には負笈を負へり。余は暫く此の巡禮と相語りて再び前進す。

三

斯くて一の丘陵に達するや、天俄に寒く霰を飛ばすこと甚し。折から温度は華氏六度なりき。されど此の邊には、途中人家とは無ければ、尙車を急がして進み、高原を歩むこと十六七清里にして漸く低地に達せり。此の附近小沼諸所に散在し、家畜の遊べるを見る。余等は此處に言ひ難き淋しさを感ぜぬ。此處より更に西に向ひ再び丘陵に登り、三清里許にてフンドルンアイラに達せり。時に午後五時、行程約五十清里なり。

今日通過せし村落は、何れも烏珠穆沁固有の風俗を爲し、蒙古人の妻は腰に妻たるの紀章を附し、此の紀章の傍に輪を付く。其の他何れも古風を爲し、大に余等の注目を惹けり。尙言語は何れも蒙古語にて、一人として支那語を解するものなし。一同此處に一泊すること、爲りしが、土人は余等を珍らしがり、見物に来る者も尠からざりき。

本日の温度は朝十二度、正午十一度。

五月十一日。昨日の降雪夜に入りて愈々甚しく今朝に至るも尙歇まず、寒氣一層強し。然

天寒く霰を飛ばす

フンドルン村

妻君たるの紀章

風雪を引し

て進む
ガブチロン村

れど一同雪を犯して午前八時頃出發せり。此の家の主人チンステファン騎馬にて隨行せり。丘陵の道を進むこと十五清里にして、ガブチロンアイラに達せり。時に正午十二時なりしかば一同此處にて中食を爲せり。折柄雪は歇みしも風荒みて寒氣甚し。

此處より新なる牛車を出ださざる可からざるも、牛は遠く牧場に在りて伴れ歸る事容易ならざれば、止むなく此處に一泊して種々の調査を爲せり。余等の泊れるは役人の家にして、家畜も亦多く飼へり。此の家の息子は年齢廿一二歳にて、性質溫和なるものなるが、手に珠數を持ちて一心に佛を念じ居たり。余は試に其の何故なるかを聞きたるに、彼は牧場の馬數頭行衛不明となりしかば、斯くは佛に祈念せるなりと語れり。

抑も蒙古人は家畜を以て唯一の財産と爲し居れば、随つて其の紛失又は行衛不明となりし場合は非常に嘆息せり。又蒙古人は一般に喇嘛教を信せる結果、多く手に珠數を持ちオンマニバトメンと稱ふ。かゝる風習は一面良風なれども、これが爲め蒙古人を懦弱にし、其の結果殺生を忌み佛戒を守るに至れり。

五月十二日。午前八時ガブチロン村を出發す。道を西南に取り大うねりある丘陵を進む。途中土器の破片を拾ふ。進むこと十五清里許にて一のボンボテに達せり。一同此處にて下車

家畜の行衛に就て佛を念ず

喇嘛教の勢力

右土器と民
族との關係

鮮卑族の分
布

二十五清里
の無人境

ハラガール村

バインオン
タラハン村

主人は客を
避く

蒙古女子の
側發

し、牛乳の入らる茶を飲みつゝ暫時休息し、更に車を代へて進む。道は丘陵にて變化なく進むこと五清里許にて、又二三の古土器を拾ひたるが、其の形潢河方面及び興安嶺にて拾へるものと全く同じく、總て厚手なり。之れに依つて考ふるに、古き時代に之等石器を使用す民族は、興安嶺の東南より西方にかけて、全く同一民族の居住せる事明なり。而して其は鮮卑族なり。

ボンボテを出て、より二十五清里間は、前と同じく唯丘陵を西南に進むのみ、途中人家村落等の一も存するなし。進むこと二十五清里にして漸くハラガールに達し、初めて人家を見たり。

一同此處にて下車し又も乳茶を飲み、再び車を代へて十五清里許り進み、バインオンタラハンに到着し、今宵は此の村のモーリンの家に一泊する事となれり。

此の家は富且豊なれど、主人は來客の繁に堪へずとて、他へ避け妻のみ残り居たり。余は既に三月二十六日の東翁牛特の條にても述べし如く、蒙古の風習として、主人若し來客の繁に堪へざる時は、自ら馬に乗りて他出し、後は妻に任かすを常とせり。これを要するに一般に蒙古の妻は、良人より側發にして言語も亦明瞭なり、斯かれば此の家の妻も、余等の爲にコルラを出し僮僮を打ちて響應せり。余等は其の厚意に酬ゆる爲め、種々の贈物を爲せるに、彼は非常

石版畫に驚く

に氣の毒がり、特に小羊の皮を贈らる。以て人情の質樸なるを知るべし。夕暮頃余等は東京より携へ來たりし石版畫を出し、其の中より一人の子供が、花の中に裸體のまゝ寝て戯れ居る繪を出して、之れを與へんとしたるに、彼は隙し見て打ち驚き、聲を立て、然も恐怖の念に堪へぬものゝ如く、併して手にせし繪を打ち捨て、再び見んとせざりき。こは面白き事にて、彼等は裸體殊に人體の裸形を好まず、今此の石版畫の眞に迫れる如き子供の繪を見て、實際の人が眼前に在るか如く感じたるなり。是等は心理學上最も注意すべき事なり。斯くて夕飯後一同寢に就けり。本日行程は五十五清里なり。

本日の溫度は朝八度、正午十六度。

二 烏珠穆沁王府

王府の使者
來る

五月十三日 早朝此處を出發せんと用意せる時しも、王府より二人の役人騎馬にて來れり。彼等は王府の使にて、我等が王府に到るを歓迎せんとて、挨拶勞々王府到着の口を問合はせに來たれるなり。依つて余等は一應其の厚意を謝し、且之れより直に王府に向はんとする旨を告げたるに、彼等は一禮し馬を飛ばして歸り去れり。

駱駝車の不快

タイム

馬車に代ふ

ゲゲンソム

石器土器を拾ふ

余等は今日此處より牛車にて行かんとしたるに、牛なかりしかば止むなく駱駝車にて行くことゝ爲せり。駱駝は牛よりも速かなれど其の歩行に一種の癖あり。之れが爲め車體の動搖甚しく余等は不快を感じたり。

斯くて午前八時此處を發足す。道は平坦にして歩行に便なり。尙此の附近の丘陵は昨夜の降雪にて一面雪を被り居れり。行くこと五清里許にしてタイムムに達す。此處にて車を代へ更に馬をして曳かしむる事とせり。隨行の役員も此處より交代し、一同茶を飲み暫時休憩して再び前進し、五清里許り歩みてゲゲンソムに達せり。此處は喇嘛廟にして寺の建築は支那風なるか、僧侶は五百人許りも居たり。此の寺院に來たる七八丁前のマンハの丘陵にて石器土器、石鏃の破片の散亂せるを見たり。土器は何れも素焼鼠色の薄手にて、模様なけれども磨きを掛け線を引けり。石器は石鏃を作る石屑の如きものなり。之れに依つて考ふれば、此附近にも曾て人の住ひし事明なり。

此の邊より土地は愈々マンハの真相を顯し來れり。茲に於てか余等は再び東翁牛特の、東壁の砂漠を旅行せし時の事を追思せり。併してマンハ中砂山諸所に在るを以て、流石速力早き馬も歩行甚だ困難なり。

牧馬盛にして牛少し

喇嘛僧を雇ふ

ホルギン河

余は茲に一言すべき事あり。最初余等が東翁牛特を出てより、此處に來たるまでは總て牛車を用ゐたるが、昨日よりは俄に駱駝又は馬を使用せざるべからざるに至れり。之れ此の地方に牛の勢きが爲なり。而してこは明に此の地方の、風俗習慣の相違し來たるを證するに足るものなり。乃ち此の附近は牧馬盛んにして牛は極めて稀なり。

斯くて一同マンハの道を進む中、後より馬を驅つて駆け來たれる二人の喇嘛僧あり。之れ此の附近は野中にて人、家なく人を雇ふ能はざれば、特に喇嘛廟に頼みて二人の僧を雇ひ來たれるなり。之れよりマンハの中を進み行けば、土地漸く下りとなり樹木も二三本あり。進むこと十清里許にて、マンハの牧地に達せり。此處にホルギンゴルと稱する河あり。河を渡りて一丁許り進みし所にて、土器の破片を拾へり。之れは前に拾へるものと同じく、此の河畔にも曾て人の住せし事明なり。之れより土地は平にして、西方の丘陵まで七清里許りあり。而し其の附近はマンハの草地にして、ホルギン河は此中を流れ居れり。

烏珠穆沁王府は、ハンベムソムと相並びて、向ひの丘陵上に在り。此の邊土地廣く真に大陸的の景色を呈し、砂漠の状態も一層深く印象せらるゝに至れり。併して王府の位置は前方の丘陵に在りて、其隣には喇嘛廟あり。後方又た一小山を負へり。此の邊土地暖く草亦多く生じ、

烏珠穆沁王
府の優遇

烏珠穆沁王
府の無限財

鹽と家畜

風俗習慣也

王より白馬
一頭を贈ら
る

外蒙古に向
ふ

興安嶺山中のよりも長大なり

三三

午後二時愈々王府に到着せり。折柄王府より出迎へ來たり、余等の爲に既に氈帳を張り居れりと語る。余等は導かれて天幕の有る所に至り見しに、其の場所野中にて寒氣甚しく且つ不便なれば、更に王府の衙門附近に遷さしめぬ。余等は此處にて王府の人々と會見し、非常の優遇を受け、調査に就ても種々打合せを爲せり。この日行程二十清里なりき。

烏珠穆沁の王府は、内蒙古中最も富めるものなるが、而して其の財源は、領内の鹽湖より採る食鹽にあり。此處より毎年出ず鹽は實に夥しきものにして、内蒙古の各地及び其附近の清國へも輸出し居れるが、こは天産物の一として殆んど無盡藏なり。尙家畜も多く有し居り、是等は烏珠穆沁王府の財源の一となり居れり。又た土地清國內地と隔離せる爲め今尙蒙古の古風を存し、風俗習慣總て質樸にして、無用の費少ければ富も自ら増加す。余等は王に夫々の贈物を爲したるが、出發に臨み王より白馬一頭を贈られたり、再三再四之れを辭したるも、王は蒙古の禮なりとて容易に聞き入れられざりしかば、厚く謝して之れを受けたり。余之れより尙烏珠穆沁の管下を旅行し、順路、外蒙古軍臣汗部に入らん豫定なるが、王府より特にメリンの外蒙古まで随ふ事と爲れり。

本日の温度は朝八度、正午十六度、夜十八度。

二 王府出發

ボルギン河
畔の遺物

河畔の好風

五月十四日。午前十時頃王府を出發し、マンハの中を西北に向つて進む。此の邊土地廣くして東西に遠く丘陵を見る。而して此東方の丘陵は、先日來余等の通過せし所なり。余はマンハの中にて、例の古土器の夥しく破片となりて散亂せるを見たり。此の土器は滿洲方面のものと模様同一なり。尙此處にて褐色陶器の破片、及び鐵釘一個をも拾へり。行くこと五清里許にてボルギンコル河に達し、流に沿ひて西す。河は二三條に別れて流水清く、其の附近には一面に柳樹カウザン生ぜり。而して木は大小種々あれど、高さは大抵二間内外なり。尙之れに沿ふて進めば柳樹彌々生ひ繁り、榆樹ウレグも所々に立ち混じ居れり。此邊より河の兩岸は丘陵となり、河水、丘陵、柳木等相對して景色絶佳なり。今は葉散りて幹のみ枯木の如く樹てるが、一二個月の後には嫩芽を生じ、烏珠穆沁のバラダイスを現するならんと思はれたり。又水邊には鴨、鶯、鶯に似たる鳥、鶯に似たる鳥の群れ遊べるを見る。而して此處は王の領有地なれば、樹木を伐り禽獸を捕ふるを禁ぜり。河畔を進むこと十清里許にして流水一所に合し、恰かも大池の

状を呈し來たり。

三

ブルテ村
驕慢なる村
役人

余輩は此の河水に接近せる低地及び丘陵の上にて、例の古土器の破片と石鏃の屑と、玉に似たる石片とを拾へり。水に接近せる低地は最も新しく埋りし所にして、其の附近に古土器の散在せるを以て見れば其の時代も畧ぼ推知せらるべし。かゝる事實は昨日も見たる處なり。之れより河は東北方に向て流る、余等は此處より河と別れて道を西北方に取り、行くこと十清里許にて、午後一時頃ブルテに到着せり。此の村をブルテと稱するは、之れより西方一清里許の處に、ブルテノール即ちブルテ湖あればなり。村人は何れも此のブルテ湖より、水を汲み來たるなり。余等は此處に一泊することとなりて旅装を解く、本日の行程二十清里なり。

余等の宿泊せしは年老いたる役人の家なりしが、主人は却々驕慢なる男にて、最初は極めて應揚に構え居たるも、余等の叱責に遭ひて俄に優遇せり。此の家は家族多く、婦人の多くは烏珠穆沁王府の奥女中を爲せりと。故に頭髮の結び方も異り、日本官女の下げ髪の如きに類するものなり。斯かる風俗は未だ見ざる所なりき。

余等の此處に到着したるは、恰かも午後一時頃なりしが、余等は例の乳茶を飲みたる後ち、戶外に出てたるに、今しも數名の婦人、下男が數百頭の羊を、二列にして乳を搾り居るを見たり。

羊の乳を搾
る状態

り。其の搾り方は何れも熟練せるものにして、數百頭の羊の首と首とを交互に列べて立たしめ、婦人下男は桶を持ち、最初の羊より順次に搾り行けり。余等は此處にて牧畜の状態を視察し、兼ねて種々の調査を爲せり。

本日の溫度朝十四度、正午二十二度。

五月十五日 昨日王府より余等に從ひ行く可き、メーリン未だ來らざりし爲め、一昨日送り來たりし男をして、車と共に此處まで送り來たらしめたが、今日は王府よりメーリン一人、クイチ一人來りしかば、村より人夫、馬車を徵發して出發す。之れより先は馬車にして牛車は無し。馬車は蒙古語の所謂ハラテルグーと稱し、毛氈にて蔽へる車なり。隨行の男は騎馬にして、一同馬を走らして進行せり。

蒙古馬車

興味ある遺
跡

余等は専ら東北方に向ひて進みしが、土地は大陸的なり。進むこと四清里許にして、道の傍に面白き遺跡のあるを發見せり。こは古代住民の遺跡にして、西に廣き丘陵を負ひ、土饅頭の形をなし、其の周圍は凹み居れり。丘陵の高さは五尺位にして、其上に四角形の石を並べ、其の直徑は十五歩許りあり。而して丘の凹地は今水涸れて無けれど、昔は沼澤にて水ありしならんと思はれ、又石の積みある所は、曾て家の有りしもの、如し。余等は試に下車して土を掘

潢河沿岸の
ものと同じ
なり

りしに、下より石鏃を作る原料及び鐵鍋の破片出て來たれり。之れに依りて見れば、往昔人の住み居たること明なり。余は蒙古人に向ひて、住民は蒙古人なりしか否かを聞きたるに、彼等は何れも其の蒙古人にあらざるを言ひ、この遺跡の古くより此處に在るを語れり。然れど其の狀態及び其の遺物等によつて考ふるに、こは東翁牛特、潢河の沿岸にて見たるものと同じなり。之れより三四丁進める所にて、又た一の模様ある古土器を拾へり。此等は互に關係あることを知るべし。土人はこの遺跡に就て、興安嶺の東方に於けるが如く、クイルソンの者とは言はず。

チャチレン
ホトカ村

四十清里の
丘陵をたむ
の間を進む

斯くて再び車を進む。道は大波動ある大陸の丘陵を見るのみなり。加ふるに風さへ吹き荒みて天暗く、且つ附近家もなく水もなく、陰鬱の情をこゝろに禁じ難し。尙途中道の傍に大鷲の居るを見たり。之れより十清里許りの間は、東北方或は北方或は西北方に向ひて進み、地勢は丘陵にして或は上り或は下り、唯同一の事を繰返すのみ。尙西北方に向ひて二十清里許り進みたるが、途中人影なく路傍は枯草のみにて樹木一本もなし。折柄朝來の西風彌々吹き荒みて、車馬の進行甚だ困難なりしが、午後二時漸くチャチレンホトカに達し、此處に一泊することゝなれり。本日の行程四十清里なり。

移住民唐符

村は廣き高原中に存在し、戸數僅に五戸あり。此の附近四十清里の間は人家なし。村の近くに一の井戸あり。村民は何れも之れより水を汲み來たるなり。チャチレンホトカの名も之れより來たれるなり。余等は村のアブカの家に一泊せり。主人は親切の人にて厚く余等を迎せり。聞く所に依れば、此の村人は烏珠穆沁の蒙古人にあらずして、興安嶺の東方トシエットの蒙古人にて、十二年前に轉住せるなりと。

由來蒙古にては、自分の土地面白からざれば、他の王の管下に個人として轉住する風あり。斯かる時には移住民は其の土地の人にあらざれば、場所も良き所を與へず、僻地若しくは悪しき所に住せしむるを常とせり。此處に彼等の住へるも全く之れが爲めなり。この日風激しく天幕動揺して頗る心地悪し。

本日の温度は朝十七度、正午二十一度、夜十四度。

五月十六日。午前九時出發す。西風吹き荒むこと昨日の如し。今日は泊るべきまでの里程遠ければ、馬車を全速力にて進む。道は四方を眺め得られぬ位の丘陵なり。南に向つて行くこと二十清里。此の間は總て大波動ある大陸的高原にして一の人家なし。途中野兎の如き者の群を爲して疾走するを見る。蒙古人は之れをジュールと稱し、其の皮を以て種々の袋を製

野兎の群

ウングンテ

馬賊と搾取
無き支那兵
の暴行

せり。之れより五清里許り西北方に進み、初めてウングンテアイラに達せり。一同此處にて下車し、例の乳茶を飲みて休憩す。併して余は此の間に寫眞を撮り、種々の調査をも爲せり。此處は天幕僅に四個許りの一小貧村なり。村人の話に依れば、一兩日前此處に六十二名の支那兵、ドロンノール方面より來たりて一泊し、昨日克什克騰方面に向つて去れり。彼等は先日侵入せし馬賊の後を追ひ來りしものなれど、馬賊は既に過ぎ去りし後なりしかば、遂に其の効なかりき。而已ならず彼等兵士は馬賊と同じく、無暗に牛馬を徵發し、羊を屠り、婦人の銀製の髪飾り及び腕輪、耳輪、靴等を奪ひ去りたりと。斯かれば蒙古人は支那兵も馬賊と同一視せり。

斯くて再び出發す。途中人家なく唯大波動の丘陵を進むのみ。折柄昨日支那兵の乘馬に徵發されたる馬の歸り來るに會せり。馬は總て數百餘頭にして、之れに蒙古人五六名騎馬にて隨へり。余等は此の馬群と一緒になり、互に車馬をもつて疾驅せり。馬群は步調正しく、若し一定にても遠く群を離るゝ事あれば、乘馬の蒙古人は長き鞭にて之れを追ひ、再び其の群中に入らしむ。又余等の馬途中にて疲勞せば、隨行の役人は彼等に命じ、其の馬群中より元氣ある馬を連れ來りて取り代へ、斯くして疾驅すること六十清里許り、此の間人家なく唯曠漠たる丘陵

支那兵に徵
發せられし
蒙古馬

家畜の饑饉

のみ、されど此の附近たる、曾て人の住ひし跡ありて、家畜の屍體亦夥しく横り居れり。これは昨冬寒氣甚しかりし爲め弊死せるなるが、之れ實に蒙古に於ける家畜の饑饉なり。請ふ余をして少しく之に就て語らしめよ。

蒙古の氣候

抑も蒙古の地は、我が國の五月頃より草木の芽を生ず。其の以前は全く枯死して、氣候寒く雪さへ降り積れり。斯くて五月に至りて發芽し、六月に至りて成長す。是に於てか初めて家畜の食料に、新鮮の草を得ることとなり、家畜は之れより乳を出す。蒙古人は之れを搾りてバター、乳餅等を製し、又た酒をも造るなり。尙ほ氣候も此の頃より暖くなり、樹上には鳥鳴き、野には小獸走せ廻るなど、實に蒙古に於ける年中の好季節にして、殊に六月(蒙古の五月)はバインサラ即ち喜びの月と稱せり。斯くて夏を過ぎ秋の初よりは、寒氣漸く加はり草木之れより枯死して、遂に冬に入るなり。これは順調の年にして、若し不幸にして四五五月に至るも、氣候尙暖かならざれば草の生ずること少く、随つて家畜の食料缺乏して遂に弊死するなり。併して余が今途中にて目撃したるは、昨年家畜の饑饉なりしなり。

蒙古の六月
は喜びの月

壯快なる馬
群の疾走

斯くて余等は尙も進みしが、百餘の馬は足を並べ、鬃を立て、尾を振り砂塵を上げて疾驅する様、眞に壯快を極めたり。曾てカルマークの一群が、露領ウラルガ附近より、伊犁附近

夕陽と皎月

タセゲン村

蒙古人の合

に脱走なし来りし當時も斯かりしかと、忍ぶに餘りあり。

尙進む中に日は漸く暮れかゝり、夕陽將に西の方遙けき地平線下に没せんとし、暮色正に蒼然たり。斯くて日全く没する頃には、地平線は紅燃る許りにして、美しさ例へん方なし、願れば月既に東天に昇り、皎々として高原を照せり。進むこと六十清里にして、午後七時頃タセゲン、ヌ、アイラに達せり。此の時先發の役人は既に着し、天幕の戸を開け火を焚きて、余等の到着を待ち居たり。蒙古地方にては一般に、途中斯かる場合は火を焚きて合圖を爲すを常とせり。一同此處に着するや、天幕内に入り乳茶を飲み、羊一頭を屠りて晚餐をとりたる後寢に就けり。此の日行程八十五清里、蓋し空前の旅行なり。

本日の温度は朝十二度強、正午十五度、夜四度。

四 鹽湖及び其の附近

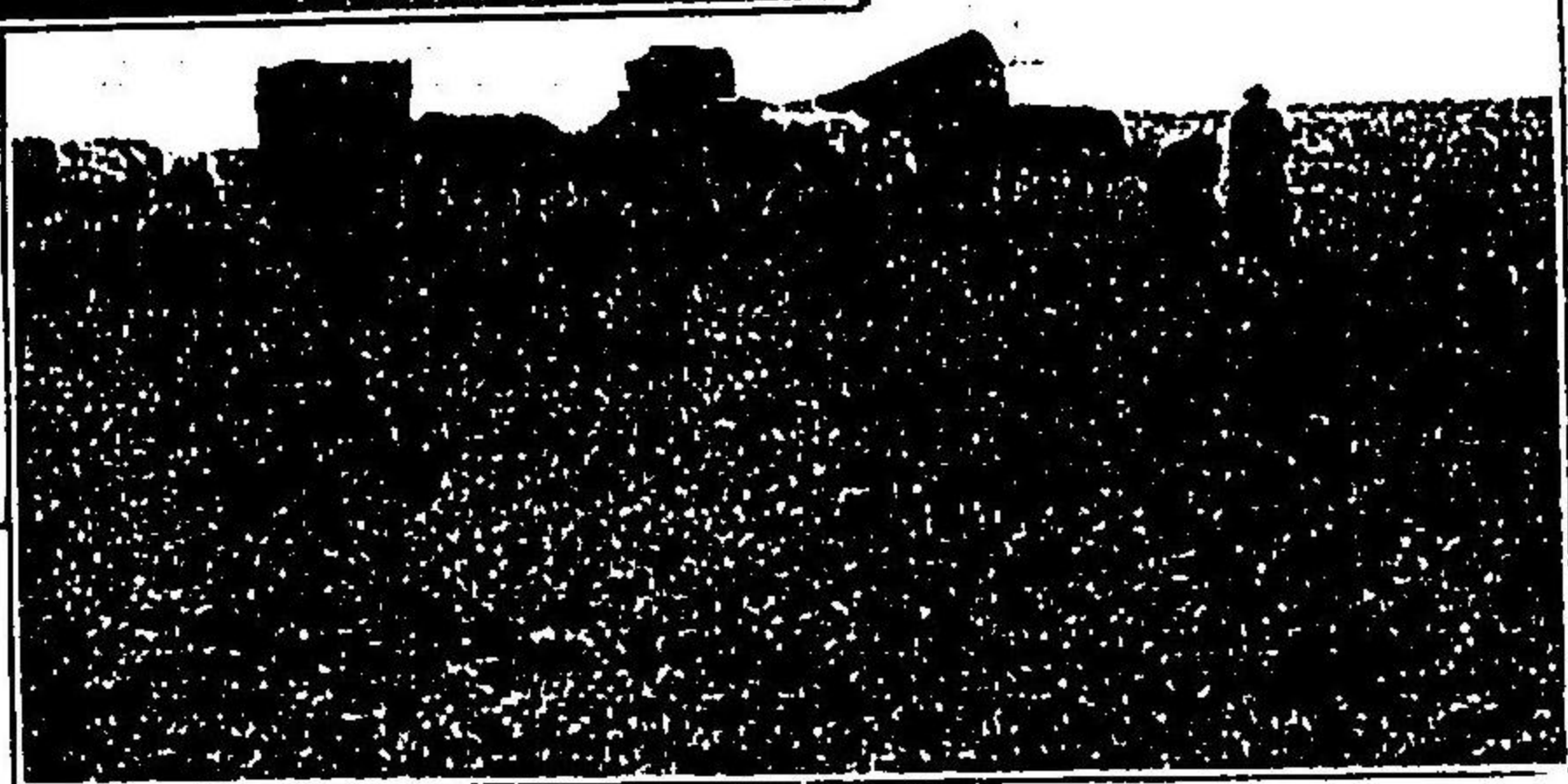
五月十七日。早朝より風暖く旅行に便なり。出發に臨みて蒙古人の體質を調査し、午前八時愈々此の村を出發す。道は將しく廣漠たる丘陵の上なるが、昨日の如く屈曲甚しからず多くは平坦なり。行くこと五清里許りにして、左方に山脈丘陵の屹立せるを見る。蒙古人は之れ



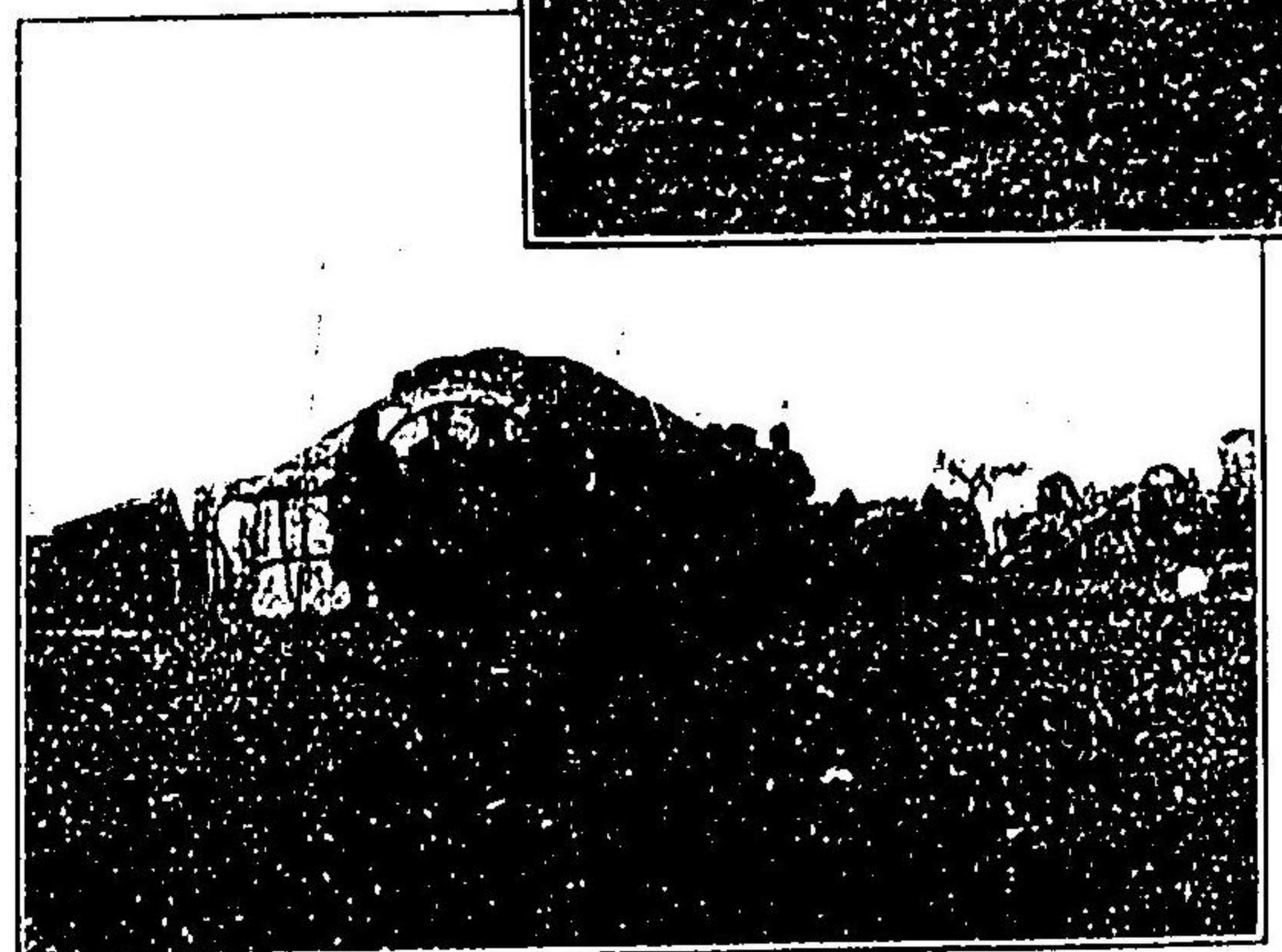
西島珠池我等一行 (五月十六日)



蒙古人の歌謡 (西島珠池)



蒙古人の住居 (西島珠池)



西島珠池我等一行 (五月二十二日)

ホゴチンソム

をウブグンオーラ山と稱せり。尙行くこと十清里許りにて丘陵全く絶え、此處より次第に下りとなり、地勢は一般に低き平野となれり。而して此の低き平野は蒙古語の所謂インノル即ち大湖にして、タブソテノールと稱する鹽湖の土地となれるなり。丘陵を下りてより西北方に進み、初めてホゴチンソムに達せり。

鹽湖の跡

此の邊一小鹽湖の跡ありて、今は水全く涸れたり。尙鹽湖の傍には一小寺院ありし由なるが、今は荒れはて、昔の面影なし。聞くが如んば三十年前まで、僧侶も住ひ居たるが、鹽湖の水涸れてより、次第に荒廢せるなりと。寺の名をホゴチンソムと稱するも之が爲にて、即ちホゴチンとは古き、ソムとは寺にて古寺の意なり。此の附近より四方を眺むるに、土地廣く何處に鹽湖の存在せるかを認め難し。余等は此寺を見物し、再び車を走らしてガデルントラに達し、此處に一泊せり。此の日行程三十清里なり。

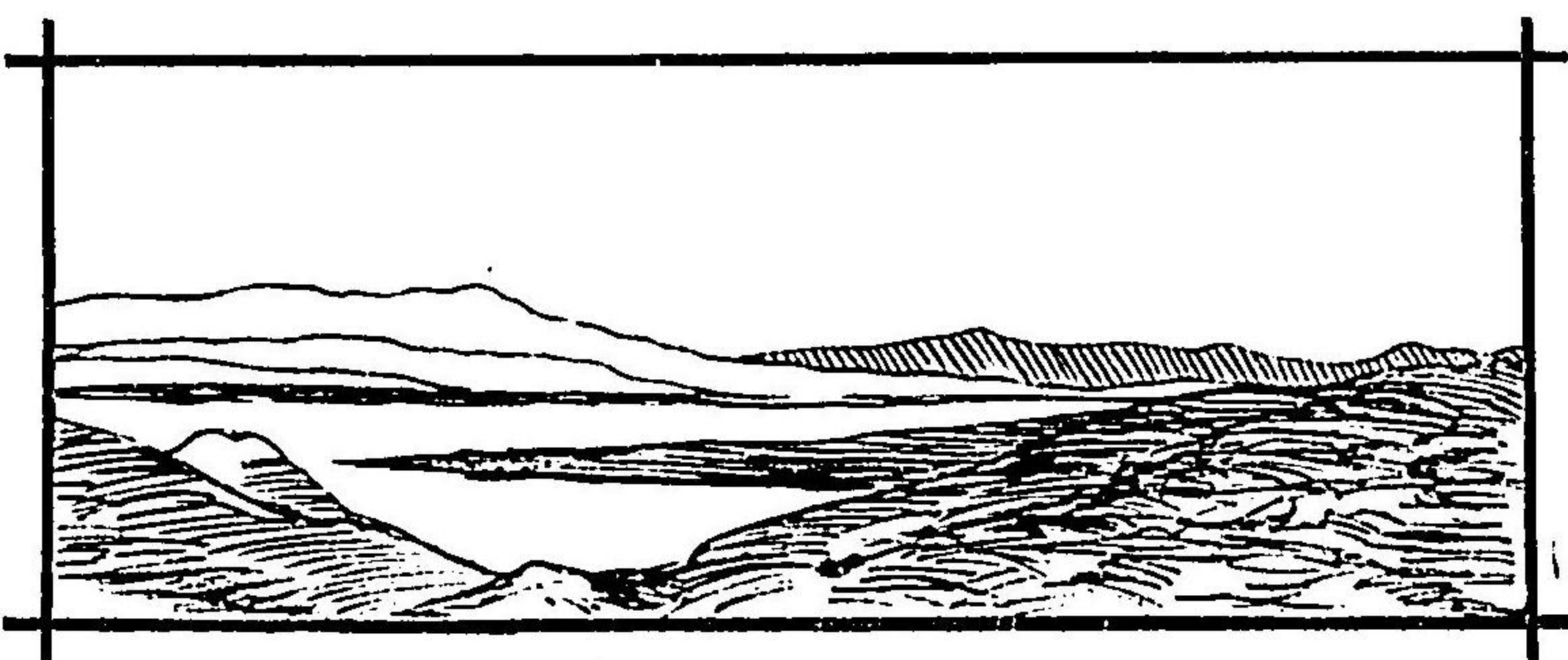
カツルントラ村

本日の温度は朝十四度、正午二十三度、夜十八度。

五月十八日。午前八時過出發す。道は主として湖畔の東方を歩む。途中メーリンの案内にて湖水の畔に出づ。湖は山又は丘陵にて取圍まれたる平地の中に在り。大さは東西二十清里南北最も廣き所五清里許りにして、其周圍は五十清里許りもあらん。尙湖水の周圍即ち水邊

鹽湖

湖畔の喇嘛廟



タソテノルーの圖

より丘陵に至る間は、南方十五清里、北方五清里、東方十清里あり。其の西方は知らざれど十清里餘もあるべし。又水は雨水の溜れるものにして、敢て他より漲ぎ來たるにあらず。されば毎年舊五月の雨期には、池水降雨の爲めに増加する山なれど今は水尠し。尙周圍は海岸の如く砂地にして歩行に困難なり。

此處より多くの鹽を産出す。試に岸に結晶せるものを取りて見るに、殆んど其の儘にて使用し得らるゝ位なり。而して湖水は東方淺くして西方深く、鹽は東方の淺き所に最も多し。蒙古人は之れをイフノール即ち大湖、又はタブンテノールと稱せり。タブンとは鹽の事なり。此の湖水の北岸に一の喇嘛廟ありて、僧侶二百餘名住せり。こは三十年前ホゴチンナムより移住し來たれるなりと。蒙古人は曰く、此の湖水より鹽を産するは、佛のお蔭にて水中に佛あり、故に毎年

鹽の産するは佛の功德

鹽を取る前には、僧侶をして祈禱せしめざるべからず。若し怠りて祈禱せざれば鹽出でずと語れり。

烏珠穆沁の王府は斯くの如き、無盡藏の財源を有するを以て自ら富めり。而して鹽を取るは毎年雨季後にして、鹽は上製と下製とに分す。上製は白くして下製は黒し。王府にては上製を使用すれど、一般人は下製を用ひ居れり。尙蒙古にては斯く鹽を産するを以て、随つて其の費消する量も多く價は安し。

蒙古人は大陸に住まへるを以て、湖水を怖るゝ事甚しく、未だタブンテノールの中に入れる者なく、随つて其の水深の如何許りあるかを知る者なし。而已ならず彼等は水底に佛在りと信せるを以て、容易に其の附近にだも近寄らず。余等は湖水に就て注意するに、昔は其の周圍尙ほ一層廣かりしも、段々狭くなり行けるものゝ如し。

斯くて尙進むこと十五清里許にして、湖水の北方なる丘陵上メンテオラに達せしは正午十二時頃なりき。此處にて一泊することとなり、種々の調査を爲せり。本日の行程十五清里。今夜婦女子の歌など聞きて寐に就けり。

本日の温度は朝十五度、晝二十一度、夜十八度

蒙古人湖水を怖る

メンテオラ村

ヌフテオ
ラ山

五月十九日。早朝蒙古人の身體測定を爲し、午前八時頃出發する事となりしが、之より先き二人のタイチは騎馬にて先發せり。一同丘陵の上を進みてヌフテオラ山に達す。此の山は一昨日湖水の北方に見えたる稍や高さ山なり。山頂に立ちて前方を眺むれば、湖水は眼下に在り。又先日通過せしサングインオラ山は東南に、チユグンドルオラ山は西南に在り。而して其の裾は互に相合して見え、尙東南ウヌフ山の西に隣りて、ナバハンゴオホ山圓錐形を爲して聳え居れり。斯くの如く湖水の周圍は丘陵、山脈を以て圍まれ居れるが、想ふに昔時は、此等諸山の麓まで水ありしも、年と共に狭くなり行けるものなるべし。

石斧を得た
リ

余等はヌフテオラ山にて石斧の破片一個を拾へり。之れに依て見れば、往古人のこの湖邊に住居せしことありしは明なり。尙進みて峠を下り二十五清里にして、モトンホトカに達せり。時に正午十二時過なりしかば一同此處に休憩し、例の乳茶など飲めり。今迄の道は丘陵にて途中所々に人家の跡、家畜の糞死せるものあるを見たるが、之れ亦昨年の饑饉にて斯かる慘狀を呈せるなり。尙此の附近に紫の草花の咲けるを見れば、余等は其の數本を採集せり。余等のモトンホトカにて中食せるは、役人の家にして最も富めるものなり。余等は天幕内にて食事を爲せるが、其の傍に三味線の如き樂器あるを見たり。こは先端に馬の頭を彫りし革

紫の草花咲
けり
モトンホト
カ

外蒙古の樂
器

を以て耳を作り、胴は四角にて表裏をジュールの皮にて張り、竿及び胴には蒙古固有の模様を畫き、馬の尾を二十條計集めたるを二絛掛けたり。之れを弾くには又弓あり。蒙古語にてこの樂器をホーレイと稱せり。而して此の樂器は烏珠穆沁より外蒙古にかけて、盛に行はれ居るものにして、興安嶺東南の内蒙古にて、用ふる樂器は之れと形式を異にし、胴は木若くは竹にて圓く作り、一方に皮を張りて竿を付け、竹の弓に似たるものにて弾き、其の糸は四本なり。之れに依て見れば烏珠穆沁は、政治上よりは内蒙古なれど、風俗習慣等は寧ろ外蒙古に似たる所多し。尙南方蒙古人は同地を目して、アルモンゴル即ち外蒙古と稱せり。余等の中食せる家の主人は自ら樂器を作り、而かも之れを弾するに妙を得、特に余等の爲に一曲を奏せり。又樂器は普通男子之れを弾き婦人は謠を歌へり。然れどとは富める家の事にして、貧しき者は樂器を弾する時間もなければ、自然之れを弾する法も知らず。余等は此の樂器の標本となるを信じたれば特に採集せり。

外蒙古風な
る烏珠穆沁

シラハタ山
トクンチャ
ロン村

此の附近は周圍に山を帯びたる平原にして、即ちシラハタ山左方にあり。中食を終りて一同此處を出發す。道は山間なれども廣く、進むこと四十清里計りたして、午後五時頃トクンチャロンアイラに達し、此處に一泊することゝなれり。本日の行程八十清里なり。尙中食せし村よ

女馬夫

三頁

り送り來たれる、人夫中年齡四十歳位の婦人の馬にて隨へるあり。之れまで婦人の馬夫は見ざりしが、彼も亦賦役を申付けられたるものなり。南方蒙古にては婦人の乗馬するは多く見ざりしが、此の邊は乗馬のみならず婦人の勞働盛にして、馬を驅る様など敢て男子と異ならず。余等の宿泊せし家の主人は、温厚なる人にして、妻君と共に出て余等を優遇せり。隨行の役人は、村より數名の女子を呼び來たりて、余等が本日買ひ求めし樂器と合して歌はしめ、樂しく一夜を更かせり。彼等の謠ふ歌のメロデーは、我が國の追分節を聞くが如き感あり。本日の溫度は朝十四度、正午二十六度。

追分節に似たる蒙古唄

五 外蒙古に向ふ

五月廿日。朝疾く起き出て、蒙古人男女の身体測定を爲し、其他種々の調査をも爲し終りしに、恰かも馬車の來たりしかば、午前八時頃此處を出發せり。

山と山との間を、西北に向ひて進むと約五清里許り、眺むれば左に連なる山と今余等の通行する道との、中間に一筋の川の如き跡あり。今は水涸れて砂は白色を呈し居れど、以前は水ありしものゝ如し。進むと十清里許りにしてカタプチ山下に達せり。之までは主として山と山

との間なりしが、此の附近よりは地勢俄に一變し、左右の山は非常に遠ざかりて大陸的高原の様を呈し來たれり。

ビチクテン
ホラー
蒙古語のホ
ラーと邦語
の原

蒙古人は此の附近をビチクテンホラーと稱せり。ホラーとは我が國の「原」「野」と全く同意義にして、打ち開きたる土地の事なり。殊に注意すべきは蒙古語のホラーと國語の原と發音の相似たる所なり。こは偶然の符合に非ず、全く人種學上に關係する言語なるべし。蒙古語にて「遠く」又は「遙か」と言ふ事をホローと稱せり。而して此のホローとホラーとは多少關係ある言葉なるが、我が國にても之を「はるか」「はるかすむ」など言へり。斯く發音の相似たるは、想ふに同一の語源より來たれるものならんか。

蒙古語日本
語の關係

由來蒙古語と日本語とは姉妹語の關係を有し、常に文法上の類似のみならず、單語に於ても其の類似せるもの尠からず。而して此のホラーの如きは面白き事實なり。尙ホラーに次でタラーと言ふ語あり。之も同じく廣き高野を稱するものにて、我が丘陵の廣き所、或は平野と同一の意義なり。こはかの常陸の「丘平」奥羽地方の「平」と相等し。

斯くてハラを進み、午後三時頃一の村落に達せり。余等は尙も進まんとしたるが、折柄雨降り出だせしかば、今日は此處にて一泊する事と爲せり。

内外蒙古の
境界

獸類多く獵
師もあり

打解けたる
蒙古人

牧畜盛なり

遊人の馬買

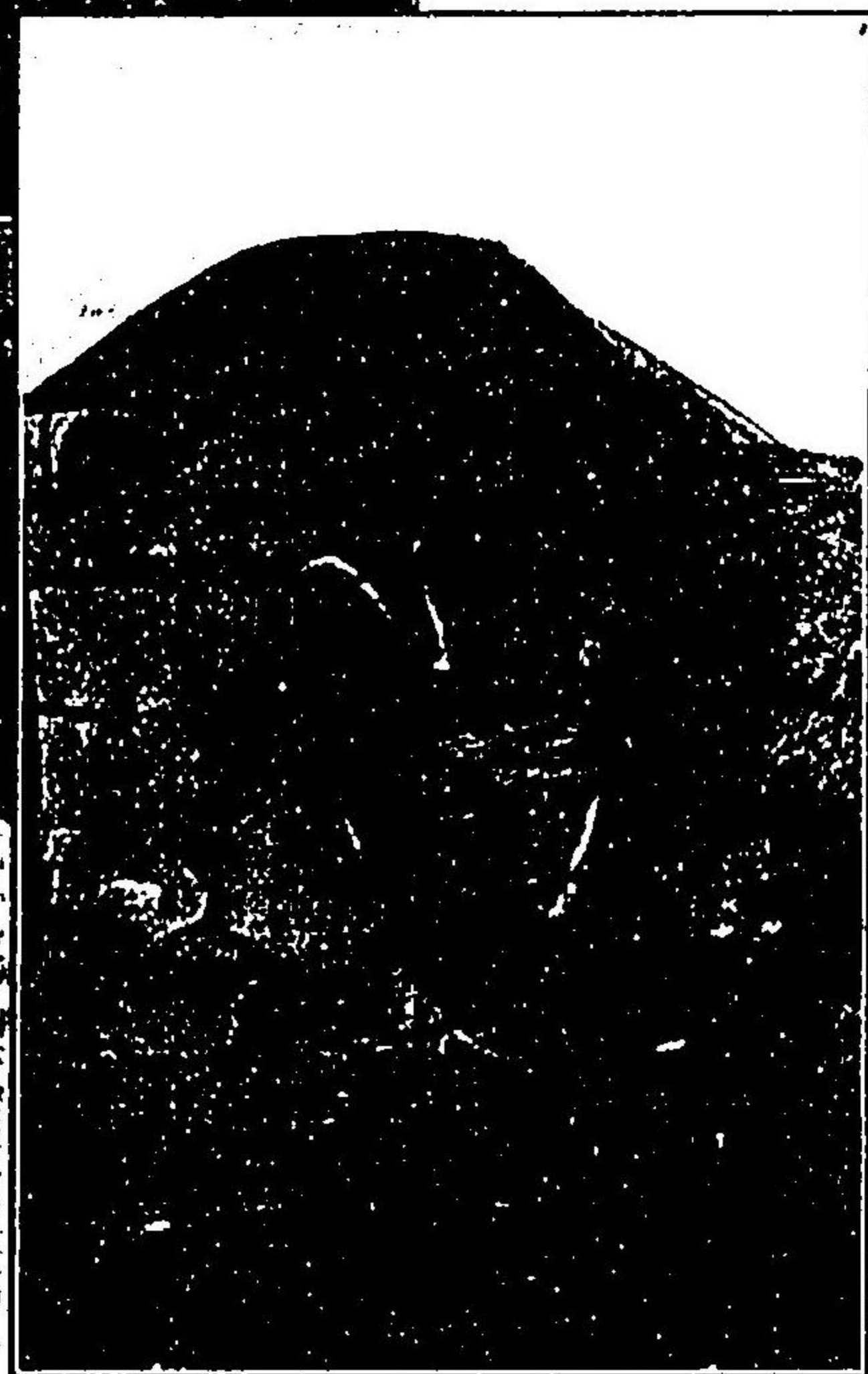
村は大なる丘陵の出鼻に在り。地勢は前面の打開きたる地にして、南方にビクタ山を望み、西北方は丘陵重疊して、遠くハルハオーラ即ち喀爾喀山を望めり。而してハルハ山は既に喀爾喀蒙古 (Khalkha Mongol) の土地にして、喀爾喀蒙古とは即ち外蒙古 (Alt-Mongol) の事なり。尙其の邊は車臣汗部なり。之に依て見れば、彼の山の内は既に外蒙古なり、されば此の附近は既に内外蒙古の境なり。

地勢斯くの如くなれば随つて山も多く、山中には多數の獸類生棲せり。而して其の多くは鹿、狐、狼、ジユール、兎等なり。由來蒙古人は殺生を好まざれど、此の邊は銃獵盛に行はれ、獵師をなし居る者も尠からず。

今宵泊れるは、村内にて最も富める家にして、主人は此村の役人なり。彼は性質伶俐にして、余等の爲に打解けて種々の話を爲せり。是迄西烏珠穆沁に入りてより、此の家の主人程能く打解けて語れるはなし。又天幕内は廣くして美麗なりき。

總て此の附近は牧畜盛に行はれ、馬を飼養する者多し。されば露國人は數年前より、毎年此處に來たりて軍馬を買取れり。此處に來る露國人は純粹の露國人に非らず、多くはコサツク兵に編入せられ居るブリヤート蒙古人なり。彼等は露領バイカル湖畔に住し居るも、人種とし

(西烏珠穆沁)茶をつくる所



(同)牛を拾ふ所



(同)蒙古婦女と羊

蒙古人露人に
視しむ

余等に露人
かと問ふ

蒙古人の銃
獵

ては、清國領蒙古人と同一にして、その言語も同一なるが、唯多少の方言あれば緩に語らざれば通じ難し。服装は散髪にして洋服を着せり。尙此の附近の蒙古人は、露國に雇はれ居るブリヤート人などの關係上より、露國人に對しては惡感情を抱かず、且此處に來たるコサック兵は、盛に銀塊を蒔き散らすを以て、寧ろ彼等を以て唯一の華客と爲せり。而して余等夫婦が洋服を着し、蒙古語にて打語らひつゝ、旅行するを見たる一蒙古人は、余等に對してブリヤートかと問へり。尙此の邊の住民は日本と言ふ事を知らず。支那語を語り得るものなく、隨つて清國の皇帝に對する感念も極めて薄し。

余等の泊れる家の主人は最も銃獵を好み、隙さへあれば銃を携へて、山中を駈廻はり居れり。余等は此の家の大なる狼の皮の張りあるを見れば、豫て所持し居たる毛布と交換せり。彼等のなす銃獵の方法は、我が國と大差なけれど、銃は最も舊式のものなり。彼等は其の銃の金屬製の部分を保存し、木製の部分は自ら作る。而して銃の中央部に二本の長き脚あり。獸を狙撃する時は、此の脚を地上に立て、發砲するなり。尙山中に入る時は成るべく輕裝し、樹間を奔馳するに便ならしめたり。

本日の溫度は朝十四度、正午十九度、夜十四度。

コチャスタ
イ村

五月廿一日。余等は出發に臨み、主人に狩の裝束を爲さしめ、鐵砲にて狙へる所を寫眞に撮り、其他此の地の風俗をも撮影せり。例の如く男女の身體測定を爲して、午前八時此の村を出發す。道は丘陵にして東北方に向つて進めり。而して此の間は平原なれば馬を走らするに便利可し。道は次第に上りとなり、進むこと十清里許りにして高き丘に達せり。之より一行は丘陵の上を歩み、東方に向ひて進むこと十五清里許りにして、コチャスタに達す。時に午前十一時なりしかば一同車より降りて蒙古茶を飲めり。

サーメン村

此の附近の地勢は一帶に高き丘陵を爲し、村には人家十戸許りあり。水清く土地牧畜に適せり。余は此處にても風俗の寫眞を撮り、身體の測定をも爲せり。此處より北方に進むこと七八清里にして一の峠に達し、之を越へて更に東北に進むこと、七八清里にしてサーメンに達し、今日は此處に一泊することゝなれり。時に午後二時頃なりき、本日の行程三十五清里許りなり。

今日の道は盤紆の大なる丘陵の間を、或は上り或は下りて進む。而して途中の村落は多く、丘陵の窪みたる所に存在せり。今日宿泊せるサーメンも亦丘陵の窪める所に在りて、東方は丘陵聳え、南西方は平なる丘陵を爲せり。尙此の平なる丘陵の上には、往昔人の住まへるも

クキルノト
カ

の、如く、薄き石を敷きたる跡諸所に在り。此の石は村の東方なる高き丘陵より取り來たれるものなり。又石の並べ方は圓形にして、天幕を張れる平地の土臺石の如し。

余等は此の遺跡に就て蒙古人に尋ねしに、此の地は以前はクイルと稱する人種の住へる所にして、我等は其の跡に來りて住まへるなり。而してクイルは今何地に行きたるか行衛を知らざれど、今も残れる礎は彼等の住まへる跡にして、我等蒙古人とは大に趣を異にせり。されば我等は此の跡を稱してクイルヌトカと言へり云々と語れり。余等は此處にて種々の調査を爲したるが、此の敷石附近にて、土器の破片の點々散在せるを見たり、是等は潢河の沿岸及び、興安嶺附近にて見たると同一なり。之に依て見るも此の住民も彼等と同一民族なるが如し。余等はこの調査を終りて再び家に歸れり、此に家は村中にて最も富めり。主婦は今日しも土をもて、竈を天幕の中央に造り居たりしが、竈は高さ一尺五寸にして其の形は圓形なり、而して上方は直徑一尺六寸厚さ一寸五分許りあり。其の正面には四角なる穴をあげ、後方にも丸く小さき穴を穿てり。

蒙古の竈

由來蒙古にては、竈は普通鐵製の爐を使用し居れるが、毎年牛乳を搾る頃となれば、之にて色々のものを製するを以て、自然大なる竈の必要を生ずるなり。而して余等の此處に來たりし

庵を作るは
女子の役

土器の製法

時は、恰も草の芽を發する頃なりしかば、斯くは土の庵を築き居れるなり。余等は此處にて初めて蒙古人の庵を製せるを見たり。庵を造るは普通婦女子の仕事にして、男子は殆んど之に與らず。尙燈皿の臺、又は煙草の喫殻入等も、女子の土にて製するなり。

以上土器の製法は、最初粘土に馬の食する細草、即ちチャガンウブス及び牛糞を混ぜず。喫殻入の如きも、最初は土を紐の如くに爲し、之を幾層となく上に積み重ねて、其形を爲し、高さ三寸、幅三寸八分位。之を造れる老婆の談に依れば、昔は婦人の仕事として、如何なる人も之を製せざるはなかりしが、今の婦人は餘り之を造らざる由、余等は之を見て非常に面白き事に感ぜり。

土器製造と
考古資料

抑も蒙古人は水草を追ふて移住する民族なれば、其の器具の如きも革又は木を用ふるものと思ひしに、今此の老婆の話及び土器の製り方を見るに、彼等は不完全ながらも以前より土器を製し居たるなり。唯其の製法が一般未開人と同一なるは、自ら免れ得ざる所ならん。之にて思ひ當るは、之まで諸所にて發見せし石器と共に存在せる土器は、何れも斯かる方法にて製せる者にして、今尙彼等が之を製せるは、古き時代の事を考ふべき唯一の材料たり。抑も土器製造中、土を紐の如くしこれを幾層も積み重ねつゝ、其形をなましむるは最も進歩せざる方法なり。而して女子がこれを作るが如きも、亦た人類未開の際に行はるゝ風習なるが、今蒙古人の土器様の物の製造を見るは、全然是と符合せり。こも又注意すべき事とす。

この夜主人夫婦及び彼の老母と種々の話を爲したる後寝に就けり。
本日の溫度朝十五度。

五月廿二日。朝起き出づれば寒氣甚しく、寒暖計は華氏の一度を示せり。されど程なく八度に昇れり。

昨夜までは氣付かざりしが、今朝よく見れば此の家の天井より北の壁に向ひて、毛の繩を吊し、之に馬の尾數本をかけあるを見たり。余は其の何の意なるかを知らざりしかば、之を主人に尋ねたるに、彼はこの事をトナントゥスと稱せり。こは毎年十二月此の繩に馬の尾をかけて、新春の祝福を祈るなりと。

馬の尾にて
新春の祝福
を祈る

余は此處を出發するに先立ち、尙一度昨日見たるクイルヌトカを、精細に調査せんと思ひ、村長及び二三の男を隨へ馬車にて之に赴けり。土地は平なる丘にして、遺跡は丘陵の上に點々散在せり。而して今は石を取り去りたる爲め、其の遺跡跡けれど昔は尙ほ多かりしものゝ如し。其の完全なるもの五個所許りを調査す。之れに就ては面白き事もあれど、其は別

再びクキル
ヌトカを
調査す

に書く考へなり。されど茲に一言したきは此の遺跡が、黄河沿岸（三月二十九日の條）及び西烏珠穆沁衙門附近（五月十五日の條）の其れよりも完全に保存せられ居る事なり。想ふにこは土地最も僻遠にして、且つマンハなる關係にして、然らざれば斯くは完全に保存せられざりしなるべし。

午前九時此處を出發し、高さ丘陵の上を東北に向つて進みしが、進むに従ひて道は山の形状を呈し來たり。前方及び左右には幾多の大なる丘陵走り、前方には昨日ピクテン原にて見たるハラハオーラ山在り。斯くて丘陵最高の所に達す。此處は峠にして蒙古人は之をボリチュユタバと稱す。之より次第に下りとなり右方に一小村落あり。余等の此處を通過せる際、一役人馬を驅つて來り合し、余等と共に峠を下れり。今朝發足してより約八清里許りにして、又た一小村にづ。尙其の附近には小なる池二三あり、一行の此處に來りし時、馬非常に疲勞せしかば、車を解き水を與へて人馬共に暫時休憩し、更に進むこと二清里許りにして丘陵を下りしに、又もや前方に一小丘陵長く横はれり。而して此の丘陵はマンハより成り所々崩壊せり。又た丘陵の間を西方より東南方に向つて流るゝ一小河あり。蒙古人は之をドンテコロと稱せり。この河は雨水の溜りたるものゝ流にして、途中にて消失すと云ふ。

クキルの遺跡々に在

丘陵の崩れたる所を見るに、諸所にクキルの残せる遺跡存在せり。余は下車して之を調査せしに、之まで見たるものと同一なり。之によりて其住民の石器を製作使用せしや明にして、且つこれと共に鐵滓の多く散布せるを見たり。之等に見るも其の鐵器を鑄造したるは明なり。余は此處にて釘、鍋の破片及び極めて小さき四角の石にて製せる帶止め、赤玉石に蒙古風の模様、即ちオゴルチを彫刻せるもの等を拾へり。而して此處にある土器も亦黄河方面のものと同一なり。

余は此の附近にて、今朝調べたと同様の、敷石多數散亂せるを見たり。之れ言ふまでもなく住民の跡なるが、唯此邊凡て砂地なれば、今朝見たるものゝ如く完全ならず。

尙ほ丘陵を進むこと二十清里許りにして、一の村落に達せり。村はホトクテと稱し、天幕僅に四五個あるのみにて極めて貧しき村なり。一行は此處にて蒙古茶を飲む事とせり。されど村貧しければ食物豊かならず。食器の如きも牛乳を容るゝに、牛の膀胱を利徳の如く作りたるものを用ひ居れり。

中食後再び丘陵の上を進む。されど地勢漸く平坦にして、凸凹なく真に大陸的高原なり。又た丘陵の上には草花既に咲き出づるを見る。斯くてホトクテより進むこと四十清里許りに

ホトクテ村

牛の膀胱を利徳に代用

シヨクシヨ
ロク村
内蒙古の最
終の村

して、午後三時頃シヨクシヨロクに達し、今日は此處にて一泊す。行程七十五清里なり。
此の村は廣き高原中に存在し、西烏珠穆沁最終の村にして、又た内蒙古最終の村なり。而
して之より西北は直ちに外蒙古となるなり。

余等の泊れる家は、頗る富みたる家にして、鄭重に饗應せり。余等は此處にても種々の調査
を爲し、珍しき土俗品を買ひ求めたり。この夜聲よき男女多く來たりて、西烏珠穆沁固有の
唄、さては外蒙古の唄などを歌ひて、楽しく夜を更かせり。

この夜附近より多數の役人來たり。蓋し明日余等の外蒙古人に入るに隨行せんが爲めな
り。

本日の温度は朝八度、正午十八度、夜十二度。

第九 外蒙古喀爾喀王府に到る

一 初めて外蒙古に入る

五月二十三日。早朝小雨降り出て雷鳴さへありしが、蒙古人等は大に喜びて曰く、斯く降
雨雷鳴等あるに考ふれば、本年は必ず豊かならんと。蒙古人の所謂豊年とは草の多きを意味

蒙古の豊年

するものにして、我が邦等に於ける豊年とは、大に意味を異にするものあり。蓋し雨多けれ
ば牧草生育し、草豊なれば家畜肥え、随つて乳を出すこと多ければ也。前年は降雨少なく、加
ふるに寒氣も酷しかりし爲め、牧草發育せず凶年なりしが、今年は非常に多量なりとて彼等
の喜悅盛なり。

余等一行は此の日愈々西烏珠穆沁領を離れて、喀爾喀領に入らんとするなり。即ち余等の前
夜來泊せる此の村落は、西烏珠穆沁最終のものにして、且つ又内蒙古全部より見るも、最終の
村落たるなり。此の村以北は直ちに外蒙古にして、余等は本日内蒙古を出て、外蒙古に入ら
んとするなり。

内蒙古と外蒙古との各王は相連絡せず、各々獨立し居るの有様なるが、殊に此の村附近の
西烏珠穆沁領の人民と喀爾喀領の人民とは、互に地を接するに拘らず、却て相敵視するの情勢
なり。されば西烏珠穆沁王府より、余等に隨行し來れるメリーンのマシアマラ等は、此の日
の行は外蒙古殊に敵視する喀爾喀領に入る事なれば、成る可く正々堂々と隊伍を整へ、以て西
烏珠穆沁の隆盛を示さんとの意氣込にて、此の附近各村の役人を盡く召集せしに、集るもの
十五六人の多數に上れり。

内外蒙古の
關係
西烏珠穆沁
人喀爾喀人
を相敵視す
隊伍整々外
蒙古に向ふ

メリオン外
蒙古旅行の
困難を説く

メリオン
の
言を排して
外蒙古に向
ふ

出發に際しメリオンは、余等に對して説いて曰く、「茲に至る迄は我が西烏珠穆沁の領内なりしを以て、余の命令總て行はれしも、之より以後旅行せんとする地方は、我が領内を離れて外蒙古に入る事なれば、殊に外蒙古の蒙古人は頗る頑固にして、余の相談に應ぜざるのみならず、或は大人の命に従はぬやも測る可らず。されば彼等は旅行中の大人を満足せしむるや否やは、余の豫め保證し難き處、萬一大人等に不快を感しむるが如き事あるも、余は其の責に任ずるを得ざれば、幸に大人に於て豫め其の意を領せられ度し。」と恭しく語りたる後ち、尙ほ昨年二人の日本人、大勢を率て此處を通過し、外蒙古に入らんとせしに、彼等頑固なる外蒙古人は、車、馬等の準備無きを辭として拒絶せしかば、その日本大人は止むを得ず、外蒙古を通らず、直ちに東烏珠穆沁に出てたる事さへあり。余の推測にては大人も亦斯の如く、無事に旅行を繼ぐる事困難ならんと附言し。此の村より東烏珠穆沁方面に向ひて旅行するの得策なるを頻りに勸告せり。彼等の親切は知ると雖、既に内蒙古を視察せる以上は、比較として必ず外蒙古を視ざるべからざるを以て、彼等の言を容れず直ち出發する事とせり。

午前十時愈々此の村を出發す。余等は馬車に乗り、メリオンを始めとして他十四五人は騎馬にて隨ひ、堂々として北進す。

蒙古に入込
む支那人

支那人の
天幕

此の附近の地勢を見るに、内外蒙古の境界なりとは言へ、地形上兩者を區別する山、岡等のあるにあらず、見渡す限り茫漠たる草原なり。余等の一行は此の凹凸なき高原を北に向つて、進む事三清里の地點に於て一の天幕を認めたり。余等は隨行の役人に其の何者なるやを問ひたるに、其はドロンノールの支那人にして、今春皮を集めんが爲めに此地に來り居るものなり。彼等支那人は斯の如く毎年春季に、蒙古人の日常必要の貨物を携へては、内外蒙古の各地に來り、天幕を張り蒙古人等の來りて貨物を買ふを待つなり。蒙古人は物を購ふに金錢を用ひず、多くは皮を以て之に代ふ。支那人等は其の品物を渡す代りに牛、羊、馬等の皮を受取り、之を集めて秋季に至る頃歸國するなり。此の天幕も即ち其の一なりと説明せり。

余等も亦、少しく品物を購はんとて其の天幕に到れり、今其の天幕の状を見るに蒙古人等の用ゐるが如き圓形のものに非ず。所謂マイハンブースと稱する、頗る簡單なるテントなりき。其の賣品物は、麵粉、砂糖、布類其他雜貨類等なり。支那人は皮と交換するが目的なるのみならず、品物も大分賣れ盡したる上、余等に賣品の如何を見らるゝを好まざるが如くなりしかば、麵粉を十斤許り購ひ求めしのみ。此の天幕内には一人の親分と四五人の召使等と共に蒙古的に生活し居りしが、孰れも蒙古語を巧みに語る。

初めて外蒙
古の喀爾喀
館に入る

勢頭外蒙古
人の頑固に
驚く

遂に村内の
一家に泊
す

右の天幕を立ち出で、より二清里計り進めば、始めて外蒙古喀爾喀領中右旗ボロガンボロルチに達せり。時に十二時頃なりき。余等一行の大勢なるに驚けるにや、又他の理由に因るかは知らざれど、此の村のタイチは不在なりとて、病中なるタイチの妻のみ其の家にありき。止むを得ず他の者を呼び來らしめたるに、馳て出て來れるは四十五六歳の男にして、此の村にてはタイチに次いで勢力ある者なりとぞ。余等は西烏珠穆沁の役人と共にこの地の王府に向つて旅行せんとするを告げたるに、彼はタイチ不在なる上、此の村は貧乏にて車、馬車も無く、夫れ等の需めに應ずる事を得ざれば、大人一行は此處より再び西烏珠穆沁に歸り、更に東烏珠穆沁方面に行かるゝ方安全ならんと云ふ。余はタイチの來るにあらねば斯る依頼に應じ難しと答へ。西烏珠穆沁の役人等も百方説けども、頑として應ぜざりしかば、役人等は再び余等に對して、茲に於て既に斯れば外蒙古の旅行は困難ならん、寧ろ我が烏珠穆沁に還らるゝ方得策なるべしと説きしが、余等は既に出發の際よりこの困難を豫期し、如何にして之を通過せば止まぬ決心なりしかば、余等は親切なる勸告を容れず、タイチの不在なるにも拘らず、此の村にて最も富裕なる家に車を牽かしめたり。此の間に處して余の妻は、此の家の主婦、主人等に懇談して余等の荷物を其の家の内に入れしめ、前の頑固なる男をも遂

西烏珠穆沁
の役人と訣
る

案外親切な
外蒙古人

打つて戀れ
るタイチの
好意

に納得せしめたり。斯の如くして漸く彼等を納得せしめ得たれば、西烏珠穆沁より隨ひ來れるメリオン及び其他の若者等にも篤く禮を贈り、且つ夫々物を贈り、此處にて訣るゝ事とせり。此の時迄もメリオン等は、今後の旅行頗る危険なるを説きて歸烏を勸めたれども、余等は單獨にても旅行せんと決心なれば、此の家に余等の荷物を運び入れ、次いで余等も入り、後に彼等役人をば歸らしめたるなり。

西烏珠穆沁の役人及び若者等の去りし後は余等三人のみとなり、主人夫婦及び前に剛情を言ひ張りし男と共に膝を交へて語りしに、前に考へしに反し、彼等の案外親切にして質朴なるを發見せり。余の子には乳を與へなどし余等とも親切に語り。一般に外蒙古人は、始めて接する際には不愛嬌にて、性質も悪き様に思はるれど、親しく談話を交ゆるに隨ひて、其の心中の親切を認む可し。余等は今夜は此の家に宿泊する事に決せしが、前に剛情を言ひ張りし男に、懇々道理を言ひ聞かして遂に之を納得せしめ、此地のタイチを呼び來らしむ、暫らくしてタイチは彼と共に入り來り、大に今迄の不都合を謝したる上、明日大人出發の際は、車馬、若者等の準備を整ふるのみならず、余も亦隨行せん、又別に大人の従者を一人、即ち彼の剛情なる男をば、大人の従者として王府迄隨行せしむ可しと約したる後、訣を告げて歸

れり。

此の村は餘り殷盛ならず、西烏珠穆沁よりは數等下るが如し。住民の天幕は一處に密集せず、點々各所に散在す。廣漠たる高原と處々に散在せる天幕とは能く調和して、大陸的パノラマを現じ、余等は之に據りて大陸的生活状態を解し得たり。而して其の天幕は西烏珠穆沁のものより小さく、且つ室内亦美ならず。

二 外蒙古の研究

外蒙古は又一名喀爾喀蒙古 (Khalkha-Mongol) と稱す。蒙古語にて外蒙古を *Ar-Mongol* と稱す、アルは外の意味にして即ち「外の蒙古」の義なり。之に對する内蒙古は、蒙古語にて *Yuhai-Mongol* と稱す。タ、ハは内にして即ち「内の蒙古」の意味なり。

外蒙古は其の土地最も廣くして、東は興安嶺に接する喀爾喀河畔附近に起り、西は阿爾泰山附近に及ぶ。北は清國領黑龍江省及び露領西比利亞に接し。南は西戈壁の砂漠に達す。而して此の地方は、蒙古の歴史上有名なものにして、かの成吉思大汗を始めとし、元朝を形式せる蒙古人は、殆んど全部此の地方より起りしものなり。

大陸的生活
状態

外蒙古の意
義

外蒙古位置

外蒙古の區
劃

現今の外蒙古は四部に分たる、即ち左の如し

- (一) 車 臣 汗 (Tsetsen-khan)
- (二) 土 謝 圖 古 (Tushetu-khan)
- (三) 札 薩 克 古 (Jassakui-khan)
- (四) 賽 音 諾 顏 (Sainoin)

以上の四部は、各々其の内部に小區劃あり。即ち東臣汗は二十三に分たれ、土謝圖汗は二十、札薩克汗は十八、賽音諾顏は二十二の小區別に分たる。而して各部の位置は、車臣汗最も東に位し、札薩克汗は尤も西にあり。土謝圖及賽音諾顏の二汗は、以上兩汗の中央部に位置す。余等今到着せるは、車臣汗中の東部に位する中右旗にして、蒙古人の所謂 *Habuulin Wang* と稱するものなり。

此地方の風俗は、内蒙古の西烏珠穆沁とは似たる處多けれども、其他の内蒙古諸地方とは大なる差異あり。而して蒙古特有の風俗は、總て外蒙古にのみ存すと言ふも不可無き程、蒙古の古風を存す。又其の言語に於ても、發音に於ても内蒙古と大に異なり。所謂喀爾喀蒙古語と稱する者なるが、其の語は最も文語に近きものにして、蒙古語としては最も美しきものなり。而

外蒙古の風
俗

言語

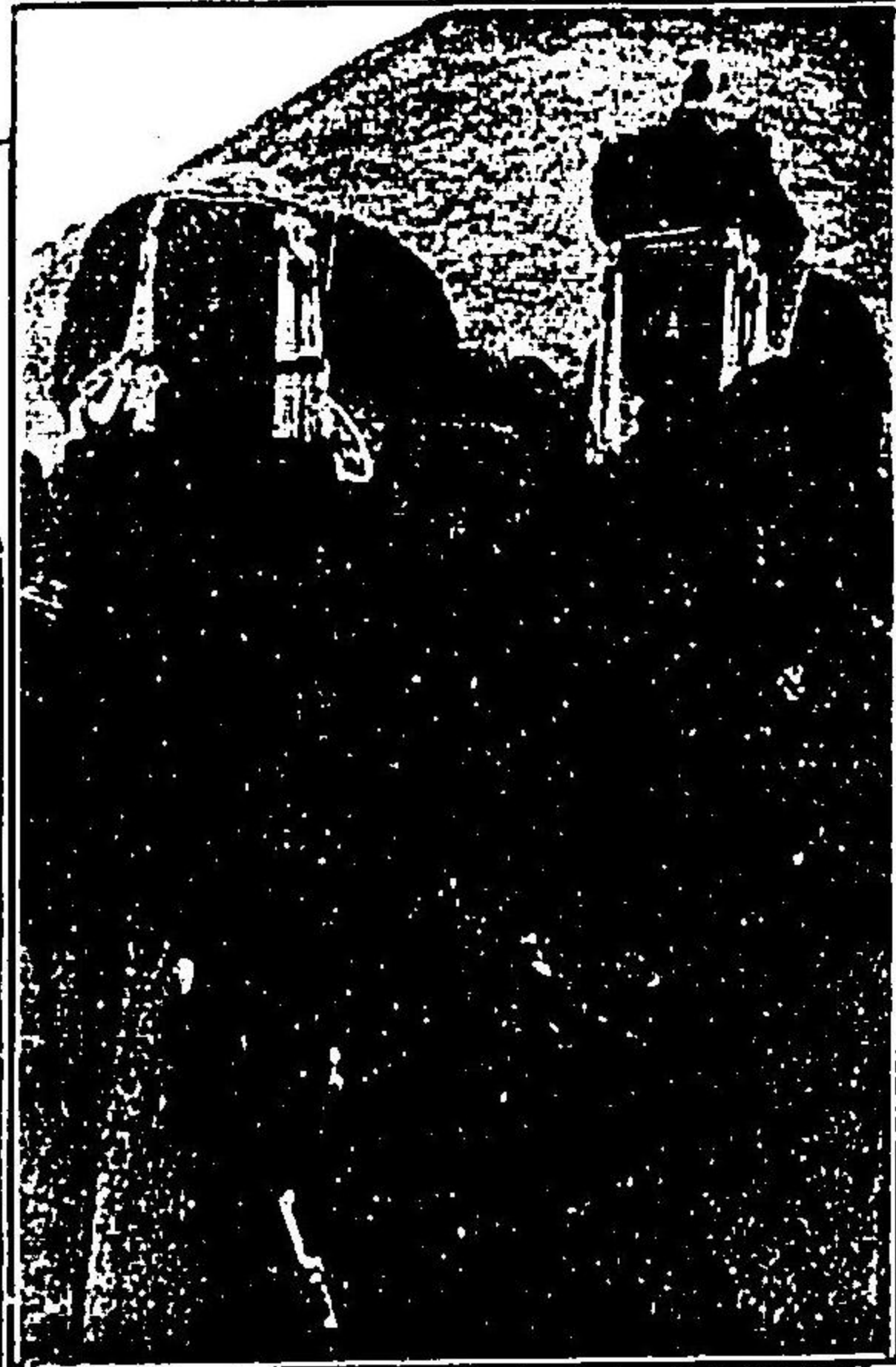
内蒙古語より習ふに便なり

外蒙古特有の風俗

して其の言ひ表はし方に於ても、内蒙古の如く簡略ならず。寧ろ長たらしとも言ふ可き言を用ゆ、彼の元朝の蒙古人の用ゐしも、此の外蒙古語たりしや疑なし。加之、現今文章語として残存するものも、此の外蒙古語を文字に移せる者に過ぎず。即ち外蒙古語は雅語に最も近き地位を占むるものなり。余等は是に至る迄、内蒙古の各地を旅行しつゝありし間は、内蒙古語のみを用ゐ來りしかば、今俄かに外蒙古に入るに及び、少しく談話の通ぜざる節あるに至れり。然れども其の言葉は文章語に近きものなれば、文語を交へて談話を試みしに能く意味の通ずるを得たり。乃ち外蒙古語は多少の練習をさへ經ば、内蒙古語よりは却て便利多き様に考へられたり。

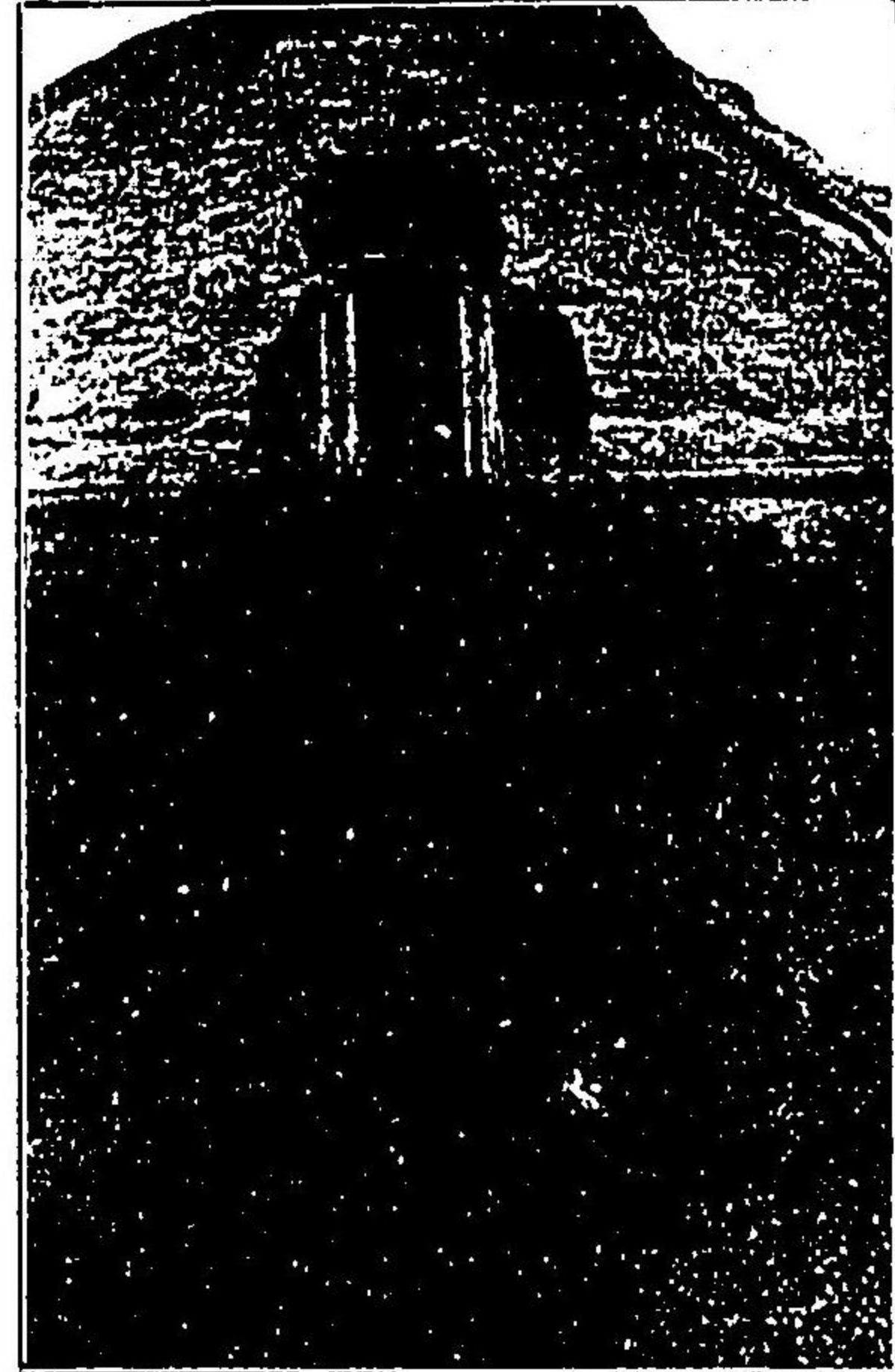
風俗は西烏珠穆沁のそれと相似たる點多きは前述の如くなるが、其の中又外蒙古特有の點もあり。今其の著しきもの一二を擧ぐれば、帽子は男女共に上の鋭く尖れるものを用ふ。其日常には烏打帽に似たるものにして、後部に細く長き紅色の布切れを垂る。中以上には金糸を繡せるもの、五色糸を以てせるもの等ありて頗る美麗なり。婦人の衣服は其の肩の處には特に綿を入れ、恰も怒らしたる形ちに隆起せしむ。之をホブンタバと稱す。ホブンは綿、タバ峠にして、肩の高まり居る様は峠の如しとの意味にて名けしものなり。衣服は長さものを用

外蒙古の古家外



外蒙古の古家外

外蒙古の古家外



外蒙古の古家外

外蒙古人は
尖れる形を
好む

外蒙古風俗
の特徴

外蒙古の水

ゆ。女子は西烏珠穆沁附近に行はる、オーチの、腰部あたり迄なる短かさものを纏ひ。足には西烏珠穆沁と同様に長き靴を穿つ。此の靴も亦其の端の尖れるものなり。外蒙古人は尖れる形のを好み、帽、肩、靴等悉く然らざるは無し。此は其の民族性を表はすものにして、興味ある研究資料なり。婦人の頭髪に就て見るに、西烏珠穆沁にては有夫者はミヅラの如き結び方なりしが、此處の婦人は大に趣を異にし、有夫者は髪を頭上にて二分し、左右に残れる髪を扁平となし、之に膠の類を付して髪を固め、更に銀の止め袂みにて挟み左右に打廣く、頭飾として銀、珊瑚等にて作れるものを用ひ、其の上に例の尖れる帽子を戴く。

要するに、外蒙古の風俗は一種固有の特徴あるを以て、素人と雖一見其の外蒙古人なりや否やを鑑別するに難からず。

余等は此の村に到着して、其の風俗等の内蒙古と大に異なるものあるを見て興を催し、寫眞撮影、身體測定、其他諸種の調査を試みたり。

尙一言附加すべきは、爰に到る迄の旅行には車を用ひ來り、又た車も多かりしが、外蒙古に入りてよりは、車数は西烏珠穆沁よりも尙ほ多く、且つ形も大にして、其の車輪の高さは余等の直立せる身長と等しき位あり。此は總て蒙古人各自の製作するものにして、馬に牽か

しむるなり。

外蒙古人の
食物

此の附近に於ては、穀類全く無ければ、食物は専ら肉と乳とを用ふ。而も肉は上流の者を除く外は食ふ事を得ざれば、多くは乳のみに據りて生活を保ち居るの状態なり。

古土器の形
式黄河方面
と同一也

此の村に入らんとするに際し、古土器の破片の散亂しあるを見、之を拾ひ取りて仔細に注視せしに、其の模様、製造方法等、曩に内蒙古にて得たるものと同一なり。之に據りて考ふれば、黄河興安嶺より西烏珠穆沁一帶の地方に住居せる民族の、外蒙古にも亦居住せし事實を知る可し。

木日の温度は朝十一度、正午二十八度。

大陸的砂丘

五月二十四日。午前八時出發す。タイチ及び前日の頑固者も余の用人として隨行し、荷物は車に載せ、余等亦車に乗り、道を東北に取りて進む。土地は凡てマンハの草原にして、殊に大陸の事なれば地上は大蛇りを現し、下りと思へば上りとなり、上りと思ふ中に復た下りとなるの有様なり。されど此の蛇りは頗る大なるものなれば、僅かに其の前方を見得る位なり。且つ此の附近に到りて、少しく爪先上りになりたるを感ぜり。左方は打ち開けたる、際涯なき平原なれども右方は丘陵にして、此の丘陵こそ。余等が曩に通過し來れる西烏珠穆沁地方な

遙かに烏珠
穆沁を望む

り。余等は爰より遙かに西烏珠穆沁を望むに及び、其の重疊せる一帶の丘陵の明かに、興安嶺の山腹に存在するものたるを認めたり。

チュングン
ボロルチ村

途に石器の破片を得たり。又鷹の居るをも見たり。高原を行くこと二十五清里にしてチュングンボロルチに達す。時に正午十二時頃なりき。朝出發せし以來此處に到る二十五清里の間一の人家を見ず。又一人の蒙古人をも見ざりき。

余等一行は此處にて下車し、天幕の中に入りて乳を飲み、諸種の調査をなし、又寫眞を撮影す。此處は地高きを以て、能く烏珠穆沁の地形を望み得たり。

外蒙古人の
質朴

余等の休息せる家は、一村中にて最も富裕なるものなりしが、彼等は余等の爲めに、其の能ふ限りの待遇を爲せり。殊に其の主婦は、珍客なればとて態々饅饅を作り、又余等の子供を働はる等大に親切を盡せり。之を以て見るも外蒙古人の質朴にして、且つ溫和なるを知るに足らんか。

此處を辭し、再び乗車して出發す。同じマンハの草原を東方に向つて進む。余等の今經過しつゝあるの地は、喀爾喀領なれども、右方一日程にして直ちに西烏珠穆沁領に達す可く、外蒙古領とは言へ。殆んど内蒙古に接する地方なり。斯して三十五清里計り進みし時、西方に常

外蒙古と烏珠穆沁の貧富の程度

馬を牧し居れる烏珠穆沁人

ハイラントイ村

りて西烏珠穆沁の村落を見たるが、距離近ければ其の馬を放牧するをさへ認めたり。外蒙古は馬少けれど西烏珠穆沁は馬多し。此を以て兩者の貧富の度を測るを得べし。馬を牧しつゝありし烏珠穆沁人は、余等の通過するを遙かに認むるや、馬を飛ばして余等に近づき、恭しく敬禮したる後ち、是より何方へ行かるゝかと問ふ。余等は西烏珠穆沁王の領地を経て此の地に入り、更に外蒙古を旅行せんとするを語りたるに、彼は大に喜び種々の談話を交へて辭し去れり。更に五清里計り進みて、ハイラントイと稱する處に出づ。ハイラントイとは蒙古語にて榆の木にしてタイを加れば、榆の木のある處と云ふに當る。今此の附近に榆樹を見ざれども、昔時に於て其の繁茂しありたるを想像するに難からず。蓋し蒙古の地名は、前にも屢々説けるが如く、自然の儘を言ひ表はしたるものにして、決して偽らず。又た文學的のものを用ひざればなり。之れ我が北海道に於ける、アイヌの地名と同様に於て、其の地名に據りて直ちに其の土地の状態を知る可し。此のハイラントイも亦其の一にして、今は榆樹盡く切り盡されたれど、榆の木が生ひ茂りし昔時の状況、坐ろに偲ばるゝものあり。

ハイラントイに到着せるは既に午後六時頃にして、前進するも人家遠ければ、遂に此の村に一泊する事に決せり。本日の行程六十清里。

此の日余等の宿とせるは、此村にて最も大なる天幕にして、居住する人数も中々に多く、余等は未だ曾て斯かる大天幕に宿泊せる事無き程なりき。

彼等は、珍客來れりとして、羊を一頭屠りて之を湯煮したるを盆に載せ、又其ソップをも添へて出し來る。余等に隨行し來れる役人、及び其の他の者共も共に此の饗應に預れり。蒙古にて羊を屠るは第一の御馳走に數へらるものにして、且つ其の量も多ければ、主賓のみならず其の隨行者等に迄及ぶを以て、羊の饗應は蒙古旅行者の隨行者等の最も喜ぶ處なり。而して其の調理方は、先づ其の皮を剥ぎ大なる鍋にて煮たる後ち、之を鍋より上げ盆に載せて客の前に出すなり。而して第一に其の尾の脂肪の所を切り取りて佛壇に供へ、次に客より順次客の隨行者等にも之を配つ。之を食ふには單に鹽を以てす、又煮たる湯の中に鹽を入れ、ソップをも珍重して飲む。蒙古人は肉を食ふに頗る巧にして、骨の髓さへも吸ふ。即ち肉を食ひ終れば其の骨を小刀の背にて一度叩きて疵を入れ、其處より折りて中の髓を食ふなり。其夜は種々の談話を打ち興じて共に天幕の中に寝ぬ。

本日の温度は朝十九度、正午二十七度、夜二十三度。

蒙古第一の御馳走羊の丸煮

肉を食ふに巧なる蒙古人

三世に知られざる長城

三〇

五月二十五日。前日出發してより宿泊せる迄の間に於て、出發せる村と宿泊せる村との外に村落は一もなかりしが、出發せる村は西ボルチにして、宿泊せるは東ボルチ、即ち東西相對する村落なるが、其の距離六十清里にて全く無人の境なり。之より進まんと欲する道も亦斯の如ければとて、朝風く起き出て蒙古茶にて朝食を濟まし。此の家の娘其他の寫眞を撮りたる後ち愈々出發せり。時に午前六時になりき。

漫々たる牛車

此附近は西烏珠穆沁等と異なり、馬の少き地方なれば、余等の乗れる車は牛に牽かしむ。

西烏珠穆沁にては、常に馬を走らして進みたれば非常に疾かりしが、此の度は牛車の事として漫々として進み行き遅き事甚しく、乗心地はよけれども頗る不氣なり。

風景總て大陸的なり

バインツルチ村

斯くして漸々東方に向つて進みしが、風景總て大陸的にして、一の大うねりを越ゆれば又大うねりあり。廣々漠々、地平線の何處にあるやを知らざるが如き高原なり。三十清里にしてバインツルチと稱する地に達す。即ち下車して蒙古茶を飲む。西烏珠穆沁を旅行する迄は、猶ほ時にモンゴルラム即ちキビ類を食せしが、外蒙古に入りてよりは全く穀類を食せず。余等三

旅行全く蒙古風となる

母に似たる蒙古婦人

遠く白山を望む鳥類路傍に巣ぶ

砂漠中の長城

人の如きも、全く外蒙古的に肉と乳と茶とをのみ用ひ來れり。今も又晝餐として茶を飲みしなり。此處にて余等は、身體の測定、寫眞撮影等諸種の調査を爲せり。

余等の休息せる家の主人不在なりしかば、四十歳計りの主婦出て來り、かひなくしく立ち働きて余等の待遇に努めたり。此の婦人の容貌及容姿は、余が妻の母に酷似するも奇なり。こは人種學上、相互に親族的關係ある人種たる事を證するものなり。

暫く休息したる後ち再び行を續く。右方丘陵の上にオボあり。左方には遠く／＼チャガンオーラ即ち白山を望む。左方は白山の突起し居る外、一望唯だ廣漠たる高原なり。此の附近にて路傍に鶯の子を見、親鳥は逸したれど其の子を捕へて進み行きしが、親鳥を慕ひて啼く音の哀れなれば又之をも放ちやりぬ。蒙古にては之等の鳥類を食用に供せず。随つて之を捕ふる事も無ければ、人の通る道の傍にても其の巢を作るなり。

行く事暫らくにして道の傍に、土を積みたる堤の如きもの、東北方に向つて長く走るを認む。或は現はれ或は隠れて延長するを以て、此の日出發せる處より在りたるを今迄氣付かざりしなり。漸く進む程に始めて之に氣付き、不思議に思ひて注意すれば、天然のものに非ずして全く人の築きしものなり。余等は出發以來此の堤を右にして、其の左方を進み來りしな

古土壁の研

成吉思汗時代の築造

るが、昔時は尙ほ高かりしが如し。今は高さ僅かに三尺、幅十歩位なり。晝に茶を飲みたるバインウルチより三十五清里計り進みたる頃、余等の進みつゝある道の右方、丘陵の上にまた土塼の趾の如きものあり。之れ亦前に見たるもの、連続なるが如し。爰に於て余は之を委しく調査せん爲め下車し、親しく塼に就て調査せしに、之も亦高さ、幅、共に前のものに同じ。此塼には又た、外に向ひて土を盛り出したる處あり。其の高さも亦三尺計りなるが一見土塼頭の如き形にして周圍六十歩計り、土塼に接近し、二三丁許を隔て、は一つ宛存するが如し。現今は此の突起の存する處あり。或は存せざる處あれども、昔時は必ず二三町毎にありしもの、如し。此の附近の土質は砂交りのものなれば、之を固めて土塼を築くは非常に困難なる事なり。されば以前高く築きしものも年所を経るに隨ひ、漸次の如く小さきものとなりしならんと思はる。而して其の方向を注視するに、少しく東に寄りて北に走るか如し。尙其の附近に何か遺物を存せずと捜査せしも、僅かに石鏃を作りし石屑を得たるのみ。余等は不思議に推えざれば、此の土塼の何人が何れの時代に築きしものなるかを蒙古人に尋ねしに、彼等は説明して曰く、此はフルムインチャム又はホゴチンフルムと稱し、成吉思汗の頃築かれたる古き外壁なり、(フルムは蒙古にて壁の事なり)而して此の土塼は延長して、黒龍江方面に迄達

(日七月六)女男の人古蒙外

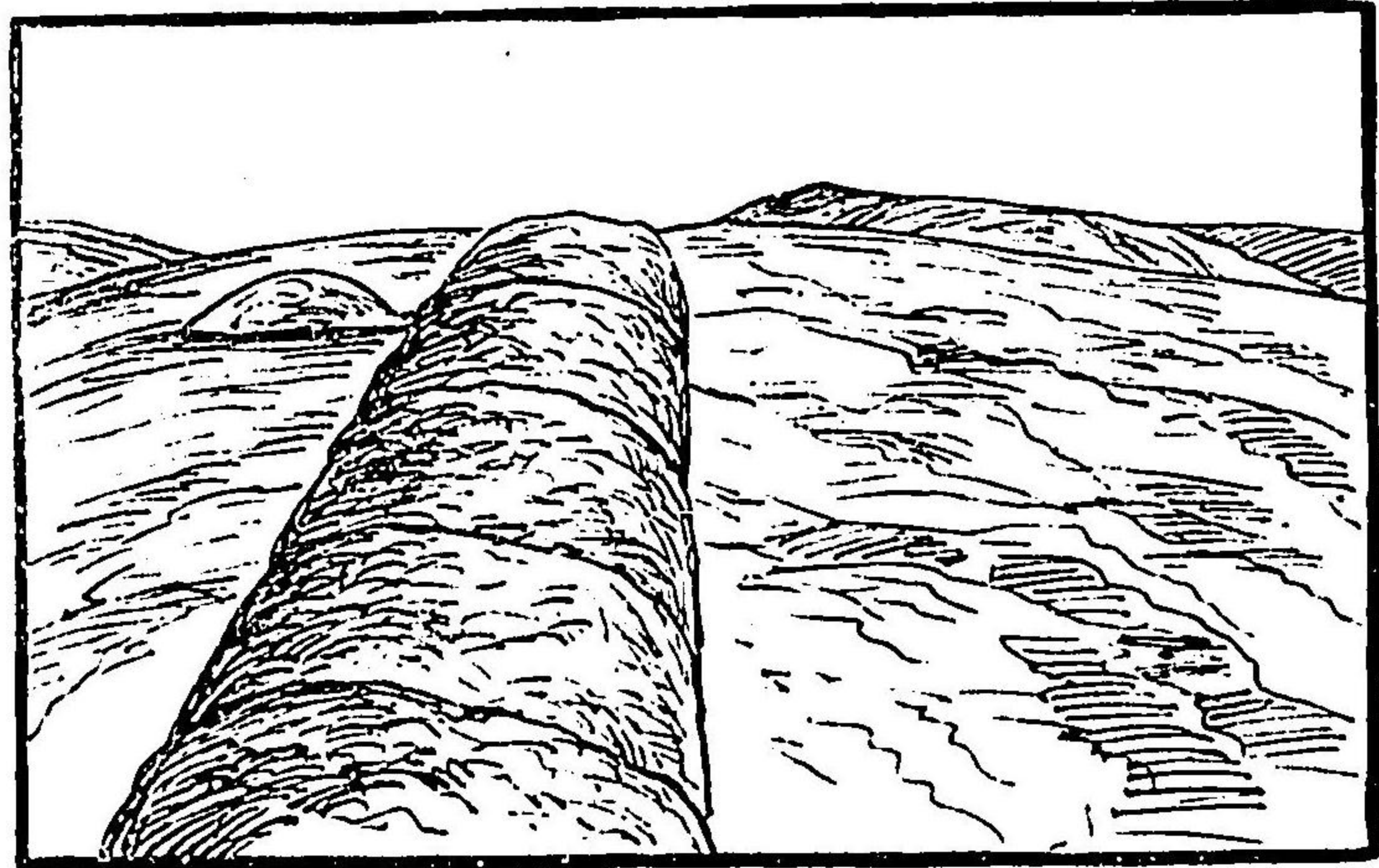


外蒙より西烏珠穆沁を望む



女男の人古蒙外

石族と長城
の關係



第九 外蒙古喀爾喀王府に到る

と、然れども其の果して成吉思汗時代のものなりや、或は其以前のものか、又た以後の築造に係るやは、今後尙ほ充分研究すべき價値あり。

未だ之に關する考古學上の資料存せざれども、其の附近に石鏃破片の存するは、最も注意すべきことに屬す。即ち此の石鏃は、此の土塼を築きし當時に、此の附近にて作りしものなるか、又た土塼を築く爲めに土を掘りし際地中より出て、土と共に此の附近に運ばれしものか、若し此の事實にして前者なりとすれば、此の土塼を築ける民族の、石器を用ひ居りしや明かなるべく、後者なりとすれば、石器時代に毫も關係なき其の以後の民族の手になりしものと言ふ可く、兎に角此の事は充分研究すべき價値

あるものなり。

三三

銅製の鏃

天つ神の箭

囊にバインウルチを出發するに際し、余等の牛車に随ひ來れる男女あり。男は十七八歳、女は十八九歳位にして、彼等は非常に仲善く、互に陸しく語り合ひつゝ、余等に随ひ來りしが、男女ともに純然たる外蒙古的風俗なれども、女の風は余等の之迄見たる事なきものあり、乃ち肩はホブンタバなれども、耳飾りは白色の硝子玉を連貫し一種の裝飾とせり。又た其の男の腰に、銅にて作れる鏃を下げたるを認め、余等は此の銅鏃を面白きものと思ひし故、赤玉を彼に與へて之と交換せり。彼れの言に據れば、此の銅鏃はバインウルチ村より得たるものにして、蒙古人は之をテングリースムと稱す。テングリースムは天、ソムは箭にして、即ち天の箭と言ふことなり。之れ天にて合戦ありたる際に、地に落ち來れるものと信ぜらる。而して此の天箭は、屢々此の附近の土中より發見せらると云ふ、然れども此の天箭は、明かに漢代前後のものにして、漢代前後の銅鏃が、此の附近に於て發見せらるゝと言ふ事は、或は此の土塼に何等かの關係あるが如き様に考へらる、此は後の宿題として研究の價值あるものと言ふべし。

長城黒龍江上流に連なる

尙ほ土塼に就て語る可きは、彼の黒龍江の上流、齊々哈爾附近にも、土塼の長く存在し居るが如く思考せらるゝの一事なり。そは露獨にて出版せし地圖にも、其の附近に土塼の趾ある

記號を附し、又た露國大藏省の編纂せる滿州通志にも、齊々哈爾附近に土塼の存在しあるを記し、其の成吉思汗の築けるものなるを言へり。之等の事實と余の今日擊せる土塼とを彼此考へ合すれば、恰かも符合するが如く思はる。蒙古人は此の土塼を以て黒龍江迄延長すと稱せしが、露國人の記する土塼なるもの同一のものに非るか。余の考を以てすれば、兩者の言ふ所は全く同一のものなりと信ず。若し果して此の兩者同一なりとすれば、一種の長城を成すものと言ふ可く、一般の學者の曾て注意せざりし處にして、興安嶺の西部より東北に向つて、一の長城存すと言ふが如き事實は、學問上大に注意すべき事ならん。

然るに余は張參議紀行を讀むに、左の文あり、曰く
自魚兒泊之北行四驛、有長城類趾、望之縣延不盡、亦前朝所築外保也。

斯く種々土塼の研究調査を爲したる後ち丘陵を下り、再び乗車して行程を續く。

土塼の存する丘陵を下れば、地漸く低し、斯の如きもの三清里許りにして、前方また丘陵の連亘するを見る。而して此の低地には土塼の趾を存せざる事等より推測すれば、蓋し此低地には、往時河水の流れ居りしものならんか、果して然りとすれば此附近は頗る要害の地なりしならんと思はる。此の低き河床の趾を三清里許り進み、再び丘陵の上を進みて、斯くして午

要害の地

ツルゲーホ
トカ村

後六時頃ツルゲーホトカに到着し一泊する事とせり。本日の行程七十五六清里。
此の村の地形は、前に低地を控へたる廣大なる丘陵にして、西方の丘陵上チャガンオラ山
を西方に望み、景色最も佳なり。

不親切なる
村役人

余等の此の村に宿泊する事は、余等と同行せるタイチより豫め通知しありたりしが、此の
村のタイチは富めるに拘らず頗る吝嗇なる男なれば、余等一行を其の村内の天幕に宿泊せし
めず、其の村より三四町許隔りたる處に新たに天幕を張りて余等を案内し、其の待遇も亦前
夜のものに比較して大に劣れり。又た翌日タイチは余に隨行すべきを、老年なればとて其の
忤をして代らしむる事を申出づ。此のタイチは剛情なる男なりしが、余は大に其の不都合を
詰責せしかば遂にタイチも屈服し、低頭平身其の不都合を謝し、俄かに待遇を一變せるのみ
ならず、翌日も自身余等に隨行する事を約せり。此の夜は各種の調査に従ふ。
本日の温度は朝二十五度、正午二十度、夜十八度。

四 喀爾喀王府に到る途上

五月二十六日。前日余に隨行せしタイチは此處より歸り、此の村のタイチを隨へて午前八

ハヤエリン
村

時出發す、西北に向ひて進みしが、著しくマンハの景色を呈し來れるを感ぜり。左方に當り
ては今日も亦チャガンオラ山を望む。三十清里にしてハヤエリン村に達し、村内の最も富
める家に休憩して茶を飲む事とせり。

殺類の時ふ
るは餘程の
富者

此の村にて最も富める家とて、天幕は廣く、且つ新しき毛氈にて作り、室内の裝飾亦美な
り。家の中央部には、土にて造りたる竈を三個計り置けるを見る。此の竈の製方は先日西烏珠
穆沁にて見たるものと稍々趣を異にして筒形を呈す。高さ二尺、直徑一尺計りにして二個所に
細長き穴を穿つ。此の中にて牛糞を燃やし、其の上部に大鐵鍋を置くなり。余等の此家に入り
し時、羊の乳も大分出てたればとて、此の筒形の竈にて乳餅、其他のものを製するを見たり。
此の時室内にて順禮の僧讀經しつゝありしが、此の僧は年三十四五位、愉快なる男にして、之
と談話を交へて大に感興と利益とを得たり。余等の爲めに作られたる御馳走の内に、スーテ
バタ即ち黍を乳にて炊けるものありき。外蒙古にて斯く殺類を所持し居るは、餘程の富者に
非れば出來ざる事なり。

尙ほ順禮の事に就て一言せんに、蒙古の喇嘛僧は笈を背負ひ、經文を讀みつゝ蒙古の各地
を順禮するの風なるが、其の際住民は之を呼び入れて經を讀ましめ、又た之を宿泊せしめ或

蒙古順禮

禮儀正しき
外蒙古人

は奉捨物等を爲すなり。余等と語れるも即ち其一人にして、此の風は中々盛んに行はる。
又た外蒙古は内蒙古に比して、蒙古古有の禮儀正しく行はる。家にて食事をなして歸る際、物品を贈る時、貴人に書面等を上る折等にて、白き細長き絹切、即ちハタタを差出すを例とす。恰かも我が國の熨斗の如きものなり。此の口來れる役人も、喇嘛も之を出すを見たり。内蒙古にては此の禮式を存すとは言へ、斯の如く正しくは行はれざるなり。

此の村落は、殆んどマンハの丘陵中に存すとも稱す可き地勢にして、周圍の光景寂寥を極む、小時休憩して此處を發せり。

ハヤエリシ村を出發してより、途上丘陵の崩れたる處に就きて、古代の遺物を搜りしに、其の二三個所に於て古器物の存在し、或は散亂せるを發見せり。其等の中には石鏃、石の鏃、骨の管玉等あり。土器は例の如く素焼に模様を入れたるものなるが、チャガンムレン附近に於て採集せる褐色の素焼土器をも得たり。此等以外に鐵器の破片、テムルヌバース（鐵糞）銅製の盃、陶器の破片等雜然として殘存す。蓋し之等の遺物は後に混合せるに非ずして、皆同一時代のものなりしや明かなり。之に依りて考ふるに、此の地に居住せる民族は、石器時代の最終期に屬するものなるを知る可し。

遺物に依りて當時の住民を知る

石器時代の最終期

此處にて諸種の採集、調査を爲したる後ち、復び旅行を繼續せしが、此の時小雨降り出て寒氣も少しく加はれり。

七清里許り進みて、チントムンソムと稱する一小寺に達せしが、之より先は道遠く人家無しとの事なりしかば、即ち此の寺に一泊する事とせり。時に午後三時、本日の行程三十五清里なり。

此の喇嘛廟は三四個の天幕より成り、中にバイシゲル即ち支那風の家屋一戸あり。其の中に佛像佛具を安置す。斯の如く小さき喇嘛廟は余等の始めて見たる處にして、僧侶も僅かに二三人に過ぎず。

余等の宿舎に當てられたる天幕は、中にて最も美しきものにして、來客を宿せしめ、或は此處の僧侶の首位を占むるもの、宿坊とするものなり。其の中央に圓爐裏を設け、其の周圍には立派なる毛氈の蒲團を布けり。牛糞にて火を燃やし、氈粉を牛酪にて揚げたる菓子、及び乳等を持ち來り以て余等を接待せり。此處に居る僧侶中の長老は、一二三の如き單なる露西亞語を少しく解し、外國人に對しても能く慣れたるものなりき、彼は又た、露西亞人もアリヤートと共に、曾て此の寺に宿泊せる事ありと語れり。彼等の露西亞人に對する感情は、左

喇嘛廟に一泊す

露西亞の勢
及外蒙古に

喇嘛僧の墮
落

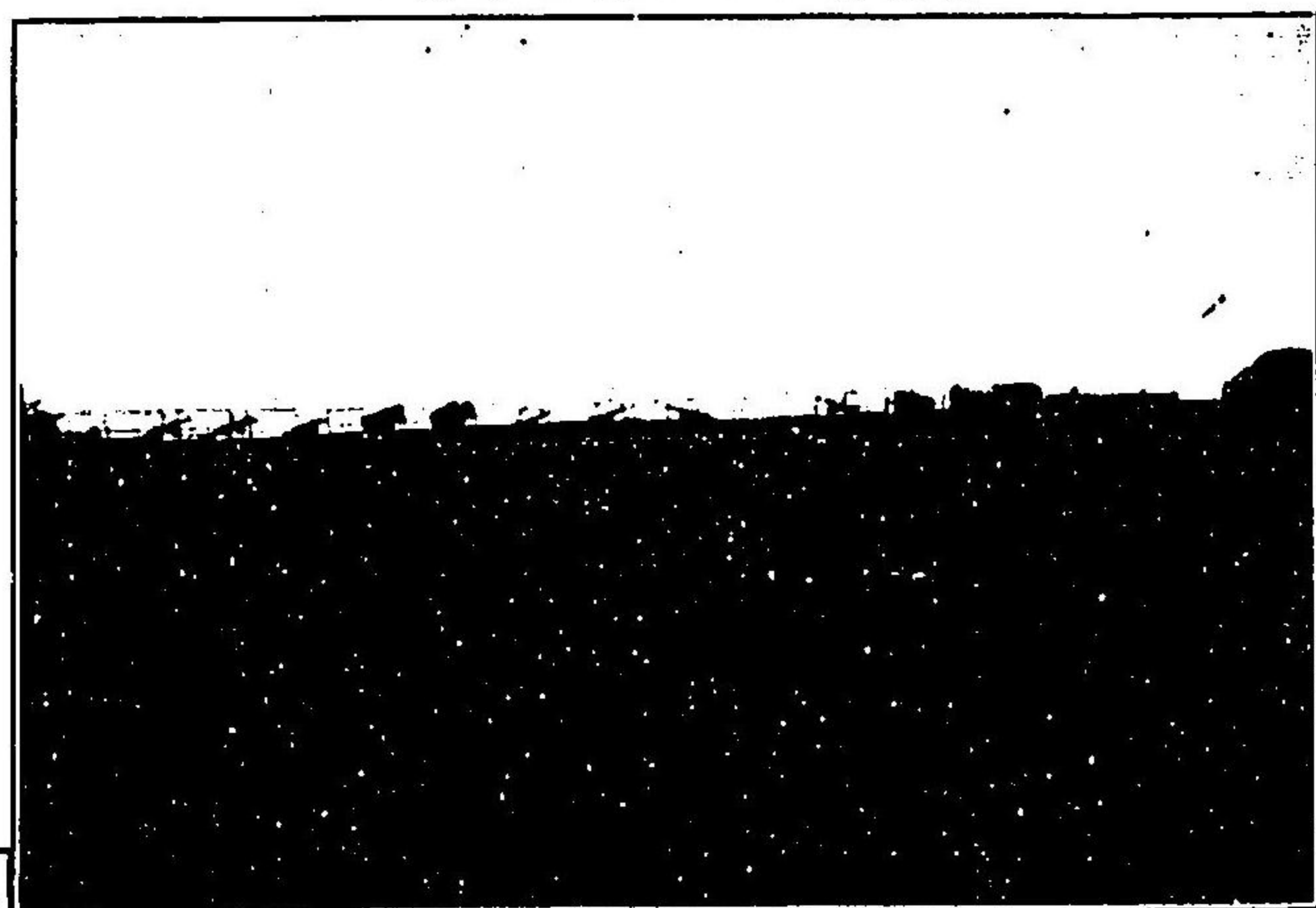
喇嘛廟は取
引の仲介を
爲す

程悪しとも覺えず、以て露西亞の勢力の、既に外蒙古に及び居るを知るに足らんか。

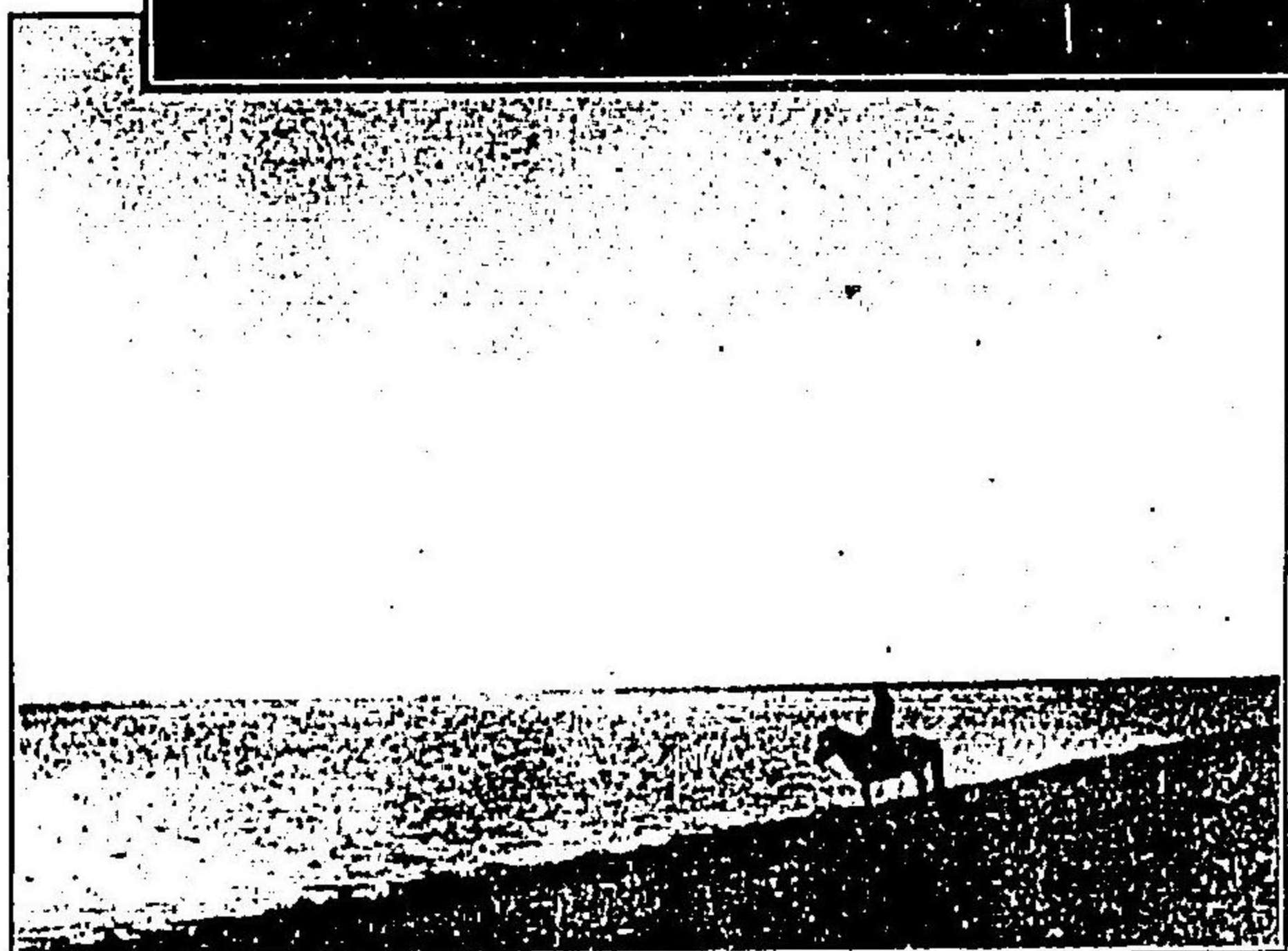
又た此の喇嘛廟中に五六人の女子居りしが、彼等の装は何れも娘風なり。即ち頭髪を二分し、後部にて辮髪をなし居るを以て知らる。此の髪は娘の風にして、有夫の婦人は必ず前に述べたる如き結び方を爲すなり、之等の女子は喇嘛僧の妾の如きものにして皆賣春婦なり。外蒙古にては喇嘛廟附近に、之等の女子の集まり居るもの多きが如し。以て喇嘛僧の既に墮落せるを知るに足らん。即ち之等の女子は有夫者たるの資格なきを以て、娘の風を爲し居るなり。余等の此處に到着するや、之等の女子出て來り、頻りに品物を請ふて止まざれば、叱して之を追ひ返せり。此の寺には男子の喇嘛僧より賣淫婦の數却て多し。又た此の寺は小さけれど、僧の數少なければ、勝手は非常に都合よきものゝ如し。

此處の庭に多くの獸皮を蓄へありしが、此は支那商人に賣渡す爲めのものなり、蒙古の喇嘛廟にては、蒙古人等の爲に日用品を交換するの風あり。即ち蒙古人等の、何か物品を欲する時は皮を持つて喇嘛廟に到り、所要の貨物と交換するなり。斯の如くして蒐まれる獸皮は、支那商人の來れる際に賣渡し、金銭或は他の貨物と交換するなり。而して蒙古人等の爲めに寺に備ふるものとは、粉其他日用品等の如きものなり。又た寺は普通蒙古人等の天幕より廣けれ

外蒙古カラマの人圍



外蒙古喀爾喀の王府(五月二十九日)



外蒙古ユルノル湖(五月十三日)

ば、雨季には蒙古人等の衣裳其他の物品を預るの風もあり。

余等は此の夜久しぶりに温かさテントに夢を結べり。

本日温度朝十三度、正午十八度、夜十七度。

五月二十七日。朝降雨ありて寒し。午前七時頃喇嘛廟を出て北方に向て進む、道はマンハにして地は廣漠たり。處々にマンハの崩れたる處ありしが、其の中に、玉類、土器石器等の破片散亂せるを見たり。余と妻とは下車して、共に之等の遺物を採集しつつ、徒歩にて進む。此處にて發見せる土器は、赤燒の厚きものにして、表面には縦線を描けるもの、點々の線を描けるもの等あり。玉類は藍色のものにしてチャガンムレンの沿岸、さては東翁牛特等にて得たるもの同一なり。又た此の玉は我が國の、古墳より出づるものと似通ひ居れり。彼の正倉院のフキ玉等、以て參考に資するを得べし、其他石器、鐵器等の破片、褐色、綠色等の陶器の破片等を存するに見れば、往時此の地に在りしは、潢河方面と同一民族にして、石器を使用しつつ、尙ほ鐵器をも使用せしものたるや明かなり。

余等は斯かる遺物を、詮索しつつ、進みしが、道はマンハにして、草は稍々長く生へたるを見き。暫らく進み行く内に、蓮華の如き紅花、細きテジアヤメ等の今を盛りと咲き競へるあり。

マンハ中の
遺物

蒙古の春

車臣汗の大官

漸く蒙古の春と云ふ感じを惹き起せり。又たマンハの丘の上に一羽の鷺を見たり。

大官の好意

行く事三浦里計りにして一村落に達す。此の村には車臣汗部の大官居るなり。此の大官は車臣汗部にて有名なる人にして、其の権力も盛んなりとぞ。即ち其の家に入りて晝食する事とせり。天幕は美麗にして且つ大なるもの三四個計り並び立てり。主人は四十歳許りの人にして、妻、妾、子供及び多数の下女下男等あり、主人夫妻は親切に待遇し、又た喜むて談話を交へたり。余等理藩院の蒙文の護照を見て曰く、此は内蒙古丈けのものにして、外蒙古の部は此の内に記入なし。然れども大人一行は、既に數日間我が外蒙古の地を旅行し來りしなれば、別に差支も無かる可く、又た大人一行は、別條なき人々と思爲するを以て、今後の旅行も差支なからん、喀爾喀の王府へも其の旨を、通知し置く可しとの事なりし。

余等の護照は内蒙古のみのもなり

最初余等の赤峯を出發する際の豫定にては、内蒙古の東部のみを旅行するの考へなりしかば、此の護照を清國政府より貰ひしが、後に至つて豫定を變更し、さてこそ數日前より外蒙古に入りしなり。尤も最初に外蒙古に入れる際、此の護照を見たる役人は少しも怪しまざりしが、其は烏珠穆沁の次に喀爾喀の名を記しありしを以てなり。然れども此の護照に記せる喀爾喀は内蒙古の其れを指せるものにして、外蒙古の喀爾喀に非るを。其の役人は外蒙古の其れ

蒙古の役人は護照を誤り

と思ひて、余等を通過せしめたるなり。若し最初の際に於て之を發見し、拒絶せられしならば、或は外蒙古に入るを得ざしりやも知るべからず。されば此の際余等の地位は、護照無くして旅行しつゝあると同様なり。

面白き蒙古人の玩具

此處に小兒の玩具にて、蒙古人作の駱駝の車を拽けるもの、旅行持の肩掛袋なる、二つ續きし馬の革袋等面白きものありしかば、品物を與へて之と交換せり。

露國商品の販路

此の貴族の家にては、饅飽を作りて余等に饗應せしが、幸子には又乾葡萄酒を與へられたり。此の乾葡萄酒は、外蒙古庫倫にて製産するものなりとぞ。而して此の葡萄酒を入れたる箱は、ブリキ製の小さく美麗なるものなりしが、こは露國製のものにして、曾て庫倫にて購へるものなりと彼は語れり。之等に見るも、露國製品の此の附近に輸入せられつゝあるを知る可く、此の地方にては、日獨等の製作品は全く見られず。單に露國品のみ其の販路を有するなり。

華麗なる大官の生活

此の家の主人夫妻は美麗なる支那緞子の衣服を着し、殊に婦人は赤色の緞子を着せり。又た其の屋外に立派なる車を置きありしが、其の車に掛けたる布の模様其他の裝飾等、宛然たる御所車を見るの感ありき。

此の家を辭して出發するに際し、其の兩親は彼の小兒をして、幸子に近づきて頬に接吻せし

接吻の風

三六
む。此の接吻は外蒙古にて、最も親愛なる懐しき感情を表はす際に用ひらるゝものにして、兄弟姉妹父母親戚等最も親密なる者の、旅行より歸れを迎ふる時、或は之と訣るゝ際等、互に此の接吻を交すなり。此は歐羅巴より輸入せるものに非ずして、蒙古固有の風習なり。

再び車に乗り、同じマンハの道を東北方に進む。此の時余等の車に隨へるは二人の女子にして、別に二人の男子の騎馬にて隨ふあり。女子の車に隨ふは珍らしき事なるか。一昨日も女子の隨行者ありたるに見れば、此も亦蒙古に於ける一の風習と見て可ならんが、尙ほ次第に進み行く程に、蒙古屋の處々に點々散布するを見たり。此等の間に又た賣買商人の天幕をも見たるが、此は蒙古に物品を賣るを目的とする支那人のものなり。十清里計りにしてラツサと稱する一村落到達す。時に午後二時頃、此の村に一泊する事に決せり。

ラツサ村

蒙古婦人の帽子

此の附近の風俗は、昨日、一昨日經過せる各地と同様なるが、殊に注意すべきは、婦人の帽子は形愈々小さきものを用ひ、且つ其の尖り方は一層甚しくなれり。帽子は冠むると言ふよりは寧ろ頭上に置くと稱する事の適切にして、恰かも我が邦の烏帽子エホシ或は冠等の如し。此の夜余等の宿泊せる家は、富裕なる家なりしかば待遇も非常に好かりき。晚餐には羊を二頭屠りて木の盆、木の皿に之を盛りて出せり。此の夜は家人より種々談話を聞きて寢に就く。

本日の温度は朝十一度、正午二十二度。

五 喀爾喀王府

五月二十八日 朝夙く起き出て寫眞を撮影し、又種々調査を爲したる後ち、午前七時ラツサを出發す。北方に向つて進む事三清里計りの處にて、マンハの中を通ずる大道に出でたり。其の幅十間計りもあらん、蒙古人の言に據れば、此の大道は黒龍江の方に通ずるものなりと。然れども今は人の往來するを見ず。此の道路を會つて清朝の造れるものにして、暫らく之に據りて往來せしが、人の通らざるに至り、道幅も漸次狭まり、雜草路上に生ずるに至れるなり。要するに此は黒龍江に通せんが爲めに、造りしものたるや明かなり。

黒龍江道

更にマンハの草地の間を北方に進む。此の附近は全く際涯もなき平原にして、東西南北一望の中に收む可く、地平線の何れに終るかを知らざる程なり。行く事二十清里計り、路傍に於て土器の底と思はるゝ小破片の存するを發見せり。此の附近は土地廣く水無き處にして、今は住む人無けれども、曾て人の住みたる跡なるを知る可し。

ラツサを出發してより二十清里計りにして、ホツレンホトカ村に到着せり。こは平原中の一

ホツレンホトカ村

喇嘛僧は旅客の休憩所

小村落にして、僅かに二軒の天幕あるのみ。余等は一天幕の内に入りしに、喇嘛僧二人と女子一人住めり。此の女は喇嘛僧の妾と下女を兼ねたる如きものにて、此の喇嘛僧の此の地に住むは、王府と他の村落との間に人家無ければ、旅人の休息所に供せんが爲め也。

牛皮の釣瓶

余等は此處にて晝食を取りしに、喇嘛僧は黍を二腕持ち來りてこれに乳にて作りしウルモを入れて、掻き廻したるものを饗せり。此は一種の臭味あるものなれども、余等は朝食來何物をも食せざりしかば之を賞味せり。此處の蒙古人等は井水を酌むに、牛皮にて造れる釣瓶を用ふ。斯る平原中に水のあるは、寧ろ不思議なる事にして、ホッレンホトカの名も之に因由するものなり。

喇嘛僧に若干の銀を與へて、余等は此處を出發す。我等に隨ひ來れるタイチは、王府に近ければとて、余等の來れるを報ずる爲め、先發して王府に向ふ。途上三清里計りの處にて、古土器の破片二個を得たり。又た此の附近の平原中に、石灰岩破片の散在しあるを見たりしが、是れ前に西烏珠穆沁にて見たると同じく住居の趾なり。

斯くして湖く進むに隨ひ、前方に當りて丘陵の連亘することを見る。此の丘陵の上こそ喀爾喀の王府の在る所なり。余等は王府に向つて進む中一小川を渡れり。此の時は湖れて水無

喀爾喀王府に入る

かりしが、雨降らば直ちに流れとなるなり。暫らくして王府に達せしが、王府は此の附近にて最も高き丘陵の上に建てらる。王の住家、事務所、喇嘛廟等皆此の丘陵の上にある。此處の喇嘛廟は一種外蒙古式とも言ふ可き、支那と西藏とを折衷したるが如き建て方にして、喇嘛僧多く住せり。

王府の待遇

愈々北進するに決す

余等は直ちに衙門に行きしが、衙門にては既に余等の來る事を知り居りしかば、別に天幕を造りて待遇する事とせり。少時ありて今此の王府に居る役人中の首位を占むるトソラクテ來りて、種々談話を試み、今後の旅行に關する打ち合せを爲せり。余等は此處よりヴェルノールの湖水附近に到り、更に東方に向つて進む豫定なるを語りしに、彼は此處より先は人家無く、食物亦乏くして危険なれば、之より東方東烏珠穆沁方面に出でたる、方利益ならんとて、再三勸められたれど、尙ほ北進せざる可からざる必要あれば、種々此の事に關して説明せしに、彼も漸く承知して歸り、愈々北進する事に決心せり。

余等は今迄の日記に省畧して述べざりしが、我が一行は親子三人の外、尙一疋の馬を伴へるなり。此の馬は前に西烏珠穆沁王より、特に賜はりしものなるが、非常に元氣よく、此の日も亦衙門の男に命じて、秣を與へたる上休息せしめたり。

王府の位置

喀爾喀王府は内蒙古の王府と異なり、王の住居を除くの外は、事務を執る處等も總て天幕なり、而して王府の位置は廣き丘陵上に位し、其の附近の丘陵に比して尤も高く且つ廣し。されば四方の景色を、展望し得て眺望最も佳なり。單に此の丘陵のみを観察すれば、餘り高くもあらねど、周囲の土地低き爲め、此の丘陵の特に高き様思はる。

王府の少年書記

此の地方の蒙古人は、内蒙古人と異なり殊に質朴なり。又此の衙門には若き書生らしき者大勢居たりしが、彼等は蒙古の文字を書く役にして、彼等の上にバクシとて先生あり。之等は皆文官にして、外蒙古の役人の風を爲せり。是等の書記は多く年少にして十四五歳を普通とす。彼等は天幕を訪れ來り種々の話を聞きて歸れり。余等は又た王府にて各種の調査を爲せり。

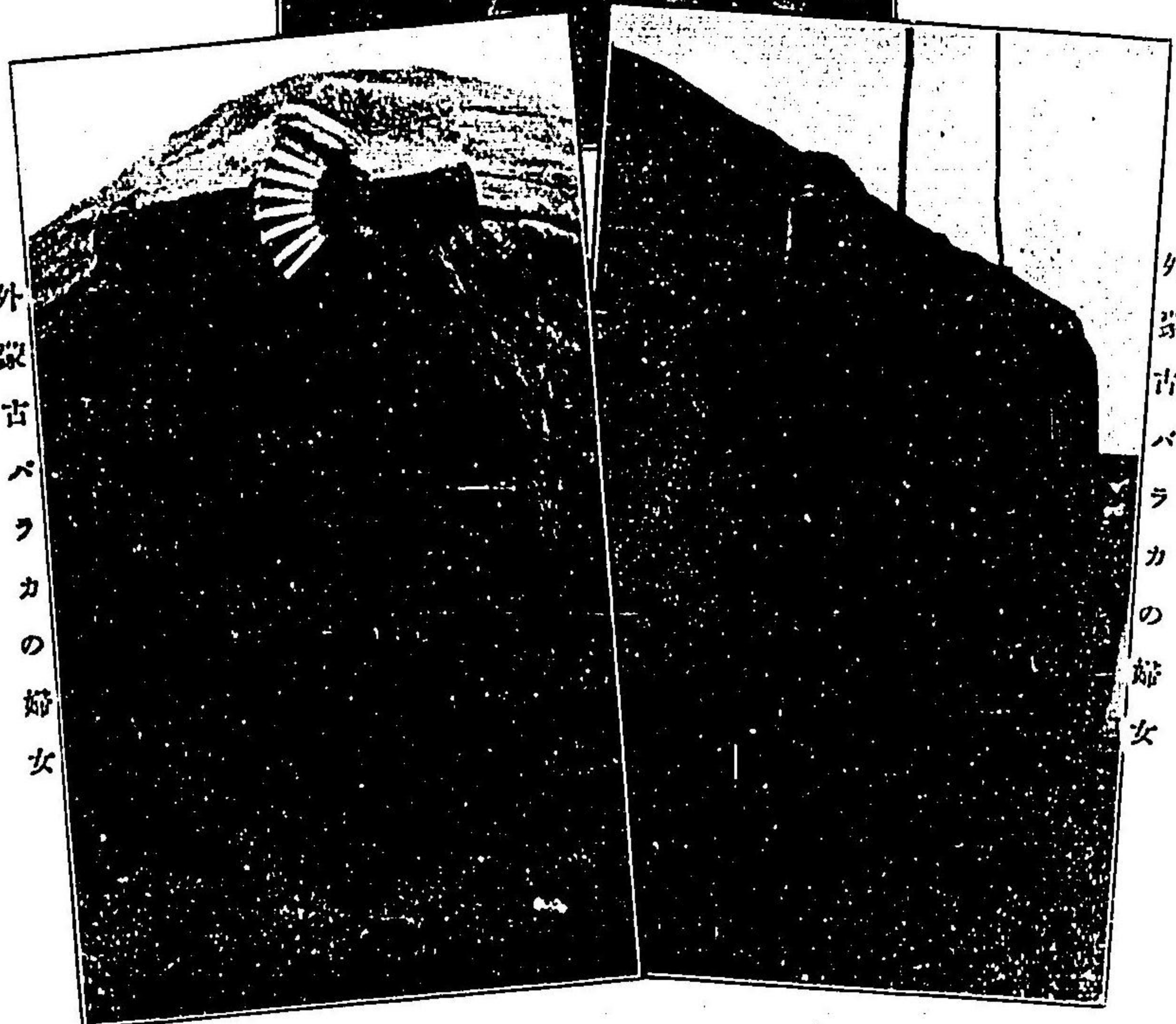
寒暖計を遺失す

余等は赤峯出發以來、日々三回宛寒暖計にて温度の測定をなし來りしが、今日大官の家を出てより、途中にて其寒暖計を紛失せり。蓋し車上より落せしものならん。王府より馬にて人を走らせ、途中を見せしめしも遂に發見する能はざりき。余等はこれが爲めに残念ながら、今日以後は温度を記す能はざることとなりぬ。余等は蒙古旅行中、今日まで所持品の紛失せしことなきより見れば、こは多分途中にて車上より落せしものなるべく、蒙古人がこれを盗み

外蒙古カラバの男女



外蒙古バラカカの婦女



外蒙古バラカカの婦女

しことは考ふる能はざるなり。

外蒙古には一種の彫刻あり。こは或は玩具に用ひらるゝも、主として駱駝、馬、牛、羊、車等を彫刻す。之等は總て専門職ありて製作するなり。其の彫刻は頗る寫生的にして殆んど真に迫るが如きものさへあり。而して總て一刀彫りなり。或は木目等を利用して動物の毛並を表はす等、外蒙古固有の藝術として見るべきものなれば、余は一揃ひの彫刻を依頼して、此の夜は王府より與へられたる天幕に寝ぬ。

五月二十九日。前日依頼せる彫刻、未だ出来せざるを以て止む無く更に一日滞在し、其の時間を利用して調査研究に従ひ、妻は又た荷物の整理を爲し、明日は愈北地の旅程に上る事とし、此の一日を王府に費せり。王府の待遇最も宜し。

第十 喀爾喀王府より内蒙古東烏珠穆沁

一 王府以北の困難なる旅程

王府以北に
向ふ
食料食器を

五月三十日。更に北方に向つて旅程を續けんとす。然るに之より以後の地方は人家稀にして、食物其他の物品を得るの便り悪ければ、喀爾喀王府より、特に羊、水桶、杓子等一切の

携へて旅程
に上る

必需品を車に積みて余等に供せり。

二六

此の日の一行は、余等の爲めに特に準備せる、毛氈を蔽ひし車一臺、飲食物其他を積める車一臺、タイチ一名、騎馬の小役人三名等にして、午前八時愈々王府を出發す。

王府を出て、よりは、丘陵の上を、少しく東に偏りたる北方に向ひて進む。此の附近人家絶無にして、一眸たゞ廣漠たる高原なり。進む事七清里計りにして、バインウルチと稱する一村落到達す。王府より里程も遠からず、且つ時間も短かりしが、此の村を出て、は途中休息すべき處もなしとの事なりしより、此處にて休息する事に決し、余等は車を下り、蒙古人の家に入る。

余等の休息せる家は、此村落中にて最も富めるものにして、多數の家畜を飼養せり。主人はタイチの役を勤むる男にして、タイチ中にて最も地位のよき方なりとか、主人の年齒二十五六、美しき妻及び妾一人あり。彼等の服装は、何れも麗し、彼は余等を其の室内に通したれども、彼れ自ら正座に座を構へ、余等をば下座に着かしめ、又た横柄なる言辭を用ゆる等頗る高慢なりしかば、余は大に其の無禮を叱せしに、彼は低頭平身して其の無禮を陳謝し、俄かに余等を正座に請じ、斯くて色々の物語りをなし、例の如き茶を飲みつゝ、休息を爲せり。

タイチの無
禮を叱す

バインウル
チ村

蒙古人の美
服

蒙古婦人の
頬紅

美しき白毛
氈

無名池

此の家の家族及び此の村の蒙古人は、何れも支那紬等の美服を纏ひ、木綿物を用ふるものなし。殊にタイチの妻、妾等此の家の家族は、服装最も立派にして、又た其家の構造裝飾も美麗なり。余等は此處にて始めて見たる事なるが、タイチの妻、妾は、共に其の兩頬に、紅を用て小指の先程に丸く彩り、殆んど我が國のオカメの如き風をなせり。余等は是迄見ざりしも、是れ外蒙古に於て、六人の名譽タイチに限り、此頬紅を彩すの特種を有せりと。

又た此のタイチの家にて使用する品物は、毛氈にて作れるもの其の大部分を占む。而して之等の毛氈は白色の立派なるものにして、汚れたるもの等は一も用ひず。室内に敷き詰めたる毛氈の端の部分、及び毛氈にて作れる鹽入等は、赤色の布を以て縁取れり。之等は餘り今迄見ざりし處なるが、白に配するに赤色を以てせる事なれば、色彩格段に引き立ちて頗る美しきものなりき。

諸種の調査を爲したる後、此の村を出發し、北に向つて進む。此の附近も亦廣漠たる平原にして、眼界一の遮るものなし。行く事少時にして道の左方一小池あり、此の池には特別の名無く、蒙古人等は單にノル即ち池と稱す。此の池の邊にて余等は車より下り、馬に水飲ましむ、此處よりは少しく道を東方に偏せる北に向ひ、馬車を驅りて進む。

煉瓦及び石
斧を發見す

バインウルチの村落を出て、より十五清里計り進める時、道の右方に當り、煉瓦等の散在しあるを認めたり。現今此の附近の蒙古人は煉瓦を用ふる事なきに、煉瓦の散在するに考ふれば、此處は昔時人家或は寺院のありし跡ならんか。又た此の附近にて石斧の造りかけたるを發見せしが、此兩者は互に時代を異にするものにして、即ち石斧は石器時代、煉瓦は遼、金、元時代の遺物なるべし。

路傍のオボ

車を驅る事十清里許りにして、路傍オボのある處に達す、一般にオボは塚の形に石を積みたるを普通とすれども、此の附近には石無ければか、此のオボは枯木を積みて塚の形に作れり。此處を通過する旅行者は、此の前を通る時に、之を禮拜しては旅行の無事安全を祈り、其の上に木の枝を挿し加ふるが故に次第に大きさを増せるなり。路傍にあるを以て蒙古人はチャム、イン、オボと稱す。

更に進み行く程に、道は次第に下りに成れるが如し、即ち此の道を進み行けば漸次、彼の有名なるツェルノール湖に到るものにして、今迄進みつゝある道は丘陵の上なりしを、湖水に近づくに隨ひて、漸次下りと成れるものなる事明かなり。

蒙古の移住者

余等の車を驅り、馬を早めて進み行く途上、蒙古人移住者の一隊と會せり。彼等は家畜を

オイルハン

率の老幼を車に乗せ、ツェルノール湖附近に移住せんと、此の道を取り居るなり。余等は彼等と語を交へつゝ進み行く。

オボのありし處より七八清里計り進みし時、道に古土器の落ち散れるを見たり。是等も亦石器時代の遺物なるが如し。余は其の一二を採集して行を續け、十清里計りにてオイルハンと稱する地に達せり。此附近の地勢も次第に下りになりつゝあり。東方二十清里許り隔りて小高き山の如き丘を望む。此の附近にて突起し居るは此の丘のみにして、他は凡て廣漠たる原野なり。蒙古人の此の丘を稱して、マングラオボと呼ぶに見れば、其の丘上にオボあるものと思はる。

ツェルノール湖
水附近に達す

オイルハンより一目散に車を走らせしが、道は次第に下りとなり、遂に十五清里計りにして始めて湖水の附近に出づ。此の附近は湖水に最も接近せる處なれば、地低くして砂土なり按ずるに、往時は此の湖水は今見るよりも一層廣く、今余等の到達せる附近も其の一部なりしならん。一村あり、ポイルブルンベールと稱す。時に午後四時なりしかば、此の村に一泊する事とせり。

然るに此の附近は、廣漠たる原野の處々に、點々人家の存するのみ、それとても戸數少け

ポイルブル
ンベール村

家人を野宿せしき余等家に入る

れば宿舎を求むるに困難せり。且つ此の附近の蒙古人等は貧なれば、其の天幕も美しからず又た飲食の器具等も少なく、殊に余等多人数の一行を宿泊せしめんには、室内に敷く可き毛氈等も、一軒の家にては到底全部を供給し能はざるの有様なり。タイチは即ち散在せる各戸に馬を飛ばし、余等の爲めに諸種の物品を集め来れり。余等の宿舎に宛てたる家の家人には余等に隨行せる役人命令して、其の所有の物品を出さしめ、又た彼等の居る可き餘地もなければ、彼等は家を外に、野宿する事として、余等は其の家に入れり。王府より余等に隨ひ來れる役人其他は、其携へ來れる羊を煮て食事を爲し、今夜此の家に宿泊せり。

此の日の行程七十餘里。

二 ヅユルノール湖

五月三十一日。此の村を出發する事とせるが、王府より隨行し來れる大勢の者を伴ひて旅行するは、却て困難なればとて、其の一部は此處より歸し、余等三人とタイチ及びタイチに隨ひ來れる從者の老人との五人にて、旅行を繼續する事とし、車及び人足は、行く先々の村落にて徵發する事とせり。然るに此のタイチ及び從者なる老人の、是迄騎り來れる馬は、非

多くの隨行者を歸す

ウユルノール湖

常に疲れ居るのみならず、此處より王府に歸る事に決せる蒙古人等は、其の馬をも牽き歸らんと言ひ出てければ、一時は當惑せるも余は此の向の村々にて徵發するも可ならずやとて、遂に其れに決し、車、人足を此の村より徵發して、愈々出發せるは午前八時頃なりき。余等は之より、ウユルノール湖に沿へる道に進むこととなれり。前日の道は北東に向へるものなりしが、本日の道は、湖水の沿岸を行くことなれば、其の關係上、湖水の形に従ひ、南東に向つて進めり。此の日の旅行を語るに先だち、此の湖水に就いて其の一般を述べんとす。

蒙古人は此の湖水を稱してウユルノールと言ふ。此の湖水の名は古くより知られ、元時代には捕魚兒海子と稱し、降つて明時代にも亦依然其の名を用ひたりき。この湖は『元期秘史』によれば

捕魚兒海子、閔連海子、兩箇海子中間の河名兀兒失温又云合勒合河流入捕魚兒海子處有帖爾格等翁吉刺

『蒙古遊放記』の記者は右の文に對し『然則合勒河、即今之喀爾喀河、兀兒失温、即今之鄂爾順河、舊名烏里順河者矣』と注せり。更に『明史』韃靼傳によれば

藍玉率大軍、由大寧至慶州、聞脫古思帖本見在捕魚兒海、從間道馳進至百眼井、哨不見敵、乃穴地而襲、一夜馳至捕魚兒海、敵營八十里直前薄之、大破其軍。

此の湖水の周囲は、『水道提綱』の記する處に據れば、其の形軀の如し。東北より西南に至る徑百四五十里、東西徑七十里とあり。之に據りて其の概略を知る可きか、即ち湖水の形状は細長く、北東より西南に向つて走り。余等の前日宿泊せる村落は、其の南西方の尖端に位置するなり。

湖の水深からず、底は砂土にして淡水なり。鯉に似て一層大なる魚棲息し、又た貝類を産す。魚は名をボロチカと稱す。貝は鳥貝を大きくしたる如きものにして、殻の外部は黒色にして内面は眞珠の如く處々に突起あり。此の内部の突起は細工用に供し得べき者なれども、蒙古人は之を用ひず。支那人も亦貝を喜ばざるが如し。蒙古人は此の貝の肉も餘り食用とせず、只其の殻を、牛乳及び鍋にて煮たる飲食物を掬ふ杓子として用ふ。余等の是迄通過し來れる地方の蒙古人は、魚類を食用とするもの尠かりしが、此の地方の蒙古人等は、此の湖水に産するボロチカの魚を調理して食膳に供す。而して彼等の獵漁の方法は、頗る簡單なるものにして、漁師等は單身兩端の尖れる獨木舟に乗りて湖水に泛び、杓子の先の尖れる 如き形の

湖水の魚介

湖畔漁夫の
漁獲法

湖畔鳥亦多
し

蒙古人死魚
を厭ふ

氣候俄かに
夏となる

蒙古の花
苗

櫂を用ひて、舟を自由に前後に動かして湖上を漕ぎ廻り、而して湖水は水淺ければ、魚の遊ぶを認め得可べし。ボロチカ魚の水中に遊ぶを認むるや、豫て用意の弓に矢を番へ、之を射て取るなり。而して此の附近にては各分業制度にして、漁師を專用とするものあり。其の漁獲したる魚を以つて他の物品と交換し、以て其の生活を營むなり。

又た此の湖水には、斯くの如く魚の關係上、鶴其他の鳥類多く集まり、其の淺瀬に立ちて魚類の來るを待つと云ふ。されば湖水の渚に於て、之等の鳥類に喰み殺されたる魚の波に打寄せられ居るを見る事往々あり。而も蒙古人は此の流れ付きたる死魚を厭ひ、若し是を食ふものありとするも極めて少數なり。此の湖水と其の附近に居住する蒙古人との關係は頗る興味あるものにして、余等從來の旅行に於て未だ曾て見ざる處なり。

雖て此の村を出發せしが、二道は砂土にして、普通の海岸を行くが如く、車は砂に埋もれて進行頗る困難なるのみならず、今迄は春の如かりし氣候の、俄かに夏の如くなり來り、太陽の光線は、砂を射て焼くが如く、殆んど堪へ難き暑さとなれり。然れども途中、草及び草花多く、殊にチヂアヤメの紫の花處々に咲くを見たり。此の花は蒙古の各地に見る處なるが、其生ずるは概ね湖沼等の跡なり。此處も亦湖水の跡なれば地味尤も此の花に適する爲めか、其

の花殊に美事にして、今を盛りと咲き亂れたり。

途に於て例のフブンタバの立派なる絹服を着し、金模様を附せる美しき帽子を戴ける蒙古婦人と會せり。彼女はヴェルノール湖より漁れるボロチカ魚十數を携へ、余等に對し頻りに物品との交換を乞ふ。ボロチカは大なる魚なれば斯く多くを持ち行く事も出来ず。殊に其の必要も無ければ、余等は僅かに其の一部分を買ひ求めたり。金模様の帽子を冠り、絹服を纏へる女子の、漁師の妻なる等は頗る面白き事ならずや。

漸次進み行く程に、湖水に最も接近せる道に出てぬ。余等は車を一層湖水に近く牽かしめ、其の渚に立ちて眺めたるに、湖水は際涯なく闊く、湖上鶴其他の鳥の多く集まれるを見たり。水は半透明にして深からざるが如し、而して其水は淡水なる事勿論なれども、多少の腥味を有す、是れ魚類多き爲めならんか、湖水の形は挿入の寫真に示すが如し就て看る可し。其渚に立てる馬上の人物は隨行のタイチなり。

三 各國製地圖の誤謬

余等は湖水の景色を眺望する事少時の後、再び車に乗り、湖水に沿へる砂土の道を南南に

金模様の
漁師の妻

湖畔の風景

向つて進む、斯くして前夜宿泊せる村落より、十四五清里計りも進みしと思ふ頃、一丘陵に達せり。此の日は泊せんとするは、此の丘陵上の村落なり。

此の村落は、前日遙かに望み見たる、マンガラオホの附近にあるを以つて、其の名を以つて村名とす。マンガラオホは此の村より南方十餘清里位の處なり。而して村の位置は、湖水を下に望み得べき丘陵の上にして、此の丘陵は前日通過し來れる丘陵と連続するものなり。又た此の丘陵の下、即ち今日余等の歩み來れる砂地は、昔時湖水の一部なりしものなるべし。

此の日は緩やかに、十四五清里の道を、彼方此方に徇彷徨ひ歩き、漫々として進みし事なれば、是れより前方更に進み得べきなれども、時間及び宿舍の都合上、遂に此の村に一宿する事に決せるなり。時に午後三時頃なりき。

茲に一言すべきは、余等の此の日進み來れる土地は、外蒙古喀爾喀領中右旗にして、外蒙古の土地たる勿論なるに拘らず、露西亞、獨逸、其他諸國にて作られたる地圖に據れば、此の地方を黑龍江省の一部と見做し、此と同じ色もて彩れり。外交上、人文地理上等より見て、いと興味ある事と思はる、各國の地圖上にては斯く區劃し居るに拘らず、此の附近に居

マンガラオ
ホ村

露獨地圖の
誤謬

蒙古人喀爾喀河を以て境界とするを主張する面白き研究問題

住する蒙古人等の語る處に據れば、喀爾喀河に接する迄の地は喀爾喀王の領地なりと、然るに前述各地圖に於ては、喀爾喀河南部を以て既に黒龍江省の一部なりと明示し居るなり。是等の誤謬は如何なる理由に基くものなるかは、大に注意研究するの必要ありと思考す。
一般に信ぜらるゝ處に據れば、喀爾喀河の北、ツェルノール湖以北は全く外蒙古領に非ざるなり。

四 巴爾喀族の部落を旅行す

巴爾喀民族

バラカ人は黒龍江省將軍に屬す

マンガラオボ村にはバラカ(巴爾喀)と稱する一民族居住し、其の部落は總て八部落に分たる。彼等の體質、言語、風俗等の上より考ふるに其の蒙古人たるや明なり。然るに彼等は外蒙古人としての取扱を受けず。全く其れより獨立し、其の管轄は却て黒龍江省將軍に屬し、特にハイラルの滿洲アンバンの管下にして、其關係恰かも、彼のドロンノール附近の喀爾喀蒙古の、内蒙古より脱し、獨立して滿洲八旗の支配を受くると同様なり。此の現象は彼等の早くより滿洲政府に服従したる關係上滿人の直轄となり、遂に内蒙古人と分離せるものなるべし。
バラカ民族は喀爾喀蒙古人に比し、其の性質慍悍にして一致團結の心強く、又生計豊かに

富裕なるバラカ人

喀爾喀人を輕蔑す

バラカ人は性質殘惡なり

バラカ人喀爾喀兩者の境界線

露清人の壓迫

バラカ人極南の部落

余等の旅行に大困難を生ず

して、多くの牛、馬、羊等の家畜を飼養し、其の盛なるものに至りては千頭以上を有するものさへあり。斯の如くバラカ人は最も富裕なれば、喀爾喀蒙古人を大に輕蔑するの傾向あり。其の甚しきものに至りては、喀爾喀蒙古人は貧にして家畜を持たざれば、此々バラカ地方に來りて、家畜を盗み去るなりきと言へるを聞く。然れども余等の見る處を以てすれば、喀爾喀蒙古人は、貧なれども純朴愛すべく、バラカ人は富めりと雖一般に殘惡なるが如し。
此の日余等の宿泊せるは、即ちバラカ人の家なり。彼等は數年前喀爾喀河の北部より移住し來れるものなりと云ふ、往時は喀爾喀河を以てバラカと喀爾喀との境界となし、即ち以南は喀爾喀、以北はバラカと明かに區劃せられ居りしが、近年に到りては、支那人の移住さては露西亞人の東清鐵道敷設の結果、其の勢力漸次此地方に及びしを以て、彼の慍悍なるバラカ人も生存競争上其れに壓迫せられ、漸次喀爾喀河以南の地方に移住するの傾向を生ぜり。此の日余等の宿泊せるも其の一にして、バラカ人の部落として極南のものなるが如し。
余に於て此の旅行の前途に、更に一大困難事を發生せり。即ち是より余等の旅行せんとする地方は、殆んどバラカ人の部落にして、喀爾喀人の部落極めて少きを以て是れ迄牛、馬、車、若者等を徵發するに當り、喀爾喀役人の威嚴よく行はれつゝありしも、バラカ人に對し

バラカ人略
略略王の命
を奉せし

ては、役人の命令行はるべくもあらず。即ち非常に困難なる地位に立ち到れり。又た兩者の勢力の上より見るも、バラカ人は性慄慄なれば、余等に隨行し來れる喀爾喀の役人も非常に恐怖を感じるに至れり。殊にバラカ人等は揚言して曰く、余等はハイラルの滿洲アルパンの命は開けども、喀爾喀王の命令は之に従ふ能はずと、斯かる状態なれば後の旅行は一層困難に陥れり。

余の計略
バラカ人を屈
服す

而も斯くてある可きにあらねば、余は一策を喀爾喀の役人に授け、以てバラカ人に交渉せしめぬ。即ち、彼等の言ふ如く此の村落はバラカ人のものにして、バラカ人の管轄はハイラルの滿洲アンパンの支配する處なるも、彼等の居住する土地は喀爾喀王の領土なり。現在幾何かの租税を喀爾喀王に納めて土地を借り居るものなれば、バラカ人本來の管轄は別として、喀爾喀王の領土に居住する以上は其の命令を聞かざる可からず、若し強て命令を拒むに於ては、立退を命じ得可きものなりと言ふにあり。バラカ人は最初は言を左右に托して拒みしも、遂に此の道理に服し、車其他余等所要のものを差出せり。

此の村の新移住者の一部落なるは前に述べたる處なるが、其の組織は一人の親方ありて、他は盡く其の家來とも言ふべき關係にして、家族も多く皆富裕なり。余等は即ち此の親方の

家に一泊せるなり。

バラカ人の
質問

其の家に入るや、四十歳とも思はるゝ親方一禮して前に來り、問ふて曰く大人は如何なる官を帯び、如何なる用ありて此地に來りしやと。余等は之迄の旅行中、未だ會て斯る質問を受けたる事なかりしが、之に見るもバラカ人の性質、他の蒙古人と頗る趣を異にするを知る可し。されば余も亦、斯々の者にして、其の疑なきは王府より役人の同行し居るを見ても知らんと答へたるに、彼も納得せるものゝ如く、大に待遇に努め、餛飩粉を打ち食ひ切れぬ程多量に持ち出でぬ。

邦人に似た
るバラカ人

バラカ人の
風俗

一般にバラカ人は慄慄にして、度量の大なる處あり。今日の内外蒙古人は頗る温順なれども、昔は此バラカ人の如かりしならんと思はる。バラカ人の慄慄にして大ザツ、なる點は我が邦人に似たる所あり。歐米の我が邦人を見るも斯くはあらぬかなど考へて、大に興を催せり。此の村の天幕は皆白く美しきものにして、其の入口の左右には、駱駝の毛を繩に作りたるものを以て、唐草の如き模様を附せり、是迄の各地方にては、是をオゴルチと稱せしが、此處にてはゼカと云ふ。

又た其の風俗に就て見るに、男の用ふる帽子も一種異なりたる形状のものにして、其の長

性質其他大
に外蒙吉人
と異なり

靴満人のウールの如きものを穿てり。婦人の頭髪は外蒙古的なるも、其の耳の邊に、銀にて作れる飾りを并べて扇の如くなし、一見恰かも銀扇二個を左右耳邊に附せるが如し。其の衣服に於てホブンタバは絶無となり、又た帯を占めたる上に更に一種の布を縫ひ付け、脊部にはまた、尾を垂れたる如き長き布を縫ひ付け、此布面には白色の糸を用て線紋様を現せるが、其の模様は恰かも、余等が途中採集し來れる古土器のそれと類似せる處多ければ、或は兩者の間に何等かの關係あるが如し。兎に角研究の價値あるものにして、余にまた多少の意見無きに非るも、其は別に記する處あらん。又婦人の性質も男子と同じく、多少慄悍の性あり。即ち外國人を見ても喜ばず、恐るゝ近づき來るが如し、外蒙吉人と同一民族にてありながら、其の性癖等斯くも反對なるは不可思議なり。

湖畔の道を
進む

余はバラカ人の風俗、習慣等に就て各種の調査を爲して寢に就きぬ。此の口崇寧通貨一個を得たり。此の附近より發見せるものなり。
六月一日。此の村を出發し北西に向つて進む。余等は湖水の沿岸を進み行く事なれば、湖水存在の地位に依り、斯くの如く方向を變ずるなり。十清里計りの間は丘陵の上を傳ひ行きしが、颯て湖水に接近せる砂地の道に出づ。

喀爾喀人の
失跡
バラカ人の
毒計

余等此の口の旅行には、バラカの車、バラカの馬を用ひたれば、從來のものに比して大に勢よし。斯くして進み行く中に、王府より伴ひ來れる老人の見えざるに氣付きたるが、バラカ人は解して曰く、喀爾喀人は元來盜人をするを以て、彼も亦村を出發せる時貸し與へたる馬に乗り、逃げたるものならんと大に心配せる様なりき。

バラカ人の
南道

暫らくにして一二軒の人家を認む。此は喀爾喀蒙古人の住家にして、近頃移住し來れるものなり。此附近には往時は喀爾喀人の住居するもの多かりしも、近來バラカ人の漸次北方より侵入し來るに隨ひ、其れに追はれて喀爾喀人は又更に南方に移住するの傾を生ぜり。此處に住せる喀爾喀人は、其の飼養せる家畜の數も少く、生計亦裕かならざるが如し。余等は此の家にて少時休憩を爲し、乳茶を飲みて更に旅程を續く。

曹達の一種
ホアルを産
す

途上、水溜り及び付て水溜りなりしと思はるゝ凹地を處々に見たり。此等の凹地にはホアルと稱する白色の物質を多量に産す。是れ曹達の一種なるが、余等亦其の少量を採集せり。是等凹地、水溜りある處を進む中に、通は遂に濕潤せるものとなり來れり。

チャガンオ
ボ村

朝出發してより七十清里、日漸く暮れんとする頃、チャガンオボと稱する一村落到達す。村はゲユルノール湖の殆んど北端喀爾喀河の南岸に位す。而して此の村の住氏はバラカ人に

非ず、喀爾喀人なり。此の附近は廣漠たる原野にして、此の村より北行する事少時にして喀爾喀河地に達すべし。

喀爾喀河

喀爾喀河は興安嶺に源を發して、ウキノール湖に注ぐものなり。而して喀爾喀河のウキノール湖に注ぐ處に、ハルハインソムと稱する一寺院あり、僧多く之に住めり。

ウキノール湖の北方より別に一河の北流するあり。其の河はウランノール湖に注ぎ、更にウランノール湖を出て、グライノール湖に入る。グライノール湖は又たクルンノール湖とも稱する大湖にして、此の湖水には西方より流れ来る、有名なるケルレン河の注ぐあり。而してグライノール湖よりは、更にアルグン河となりて遂に黒龍江に注ぐ。

余等の宿泊せるは即ち喀爾喀河口の寺院を距る事遠からざる地なり。此の村は喀爾喀人の村にて貧しければ、余等の入る家には、食器、毛氈等の所持物、到底余等の一行の用を辨するに足られば、タイチ馬を四方に驅り、各戸に就きて之等の物品を蒐め來れり。

寺院附近に賣春婦多し

余等の其家に入るや、蒙古人等の余等を見んが爲めに來るもの多く、中には喇嘛僧の妾も多く出て來れり。是に依りて考ふるも、外蒙古にして寺院の附近に賣春婦の多きを知るに足る可し。

又た、即日出發する除に、タイチ等の乗用に供すべき馬其他の準備を村人に命ぜしに、彼等は之を拒みしかば、余は大に叱せしに彼等も遂に命に従ひ、之等のものを差出す事とせり。

廣原中に一面の白花

此の村は、其地ウキノール湖と喀爾喀河との中間に位する關係上、チヂアヤメは盛んに發生し、殊に其の季節なれば色の花美しく咲き競へり。就中白色の花は希にして此處に殆めて一二を見たり。廣原の中見渡す限り一面にチヂアヤメの花の咲き亂れ、之に配するに處々の天幕を以てす。實に一種大陸的好書圖なり。

喀爾喀河岸に達す

六月二日。午前七時出發し、主として喀爾喀河の南岸に沿ひたる低地を進む。此の道は以前に湖に續きし跡の如く、濕氣を帯び、チヂアヤメ一面に咲けり。余等此のアヤメの花の間を、東南に向て進む事五清里計りにして、全く喀爾喀河の沿岸に達せり。其の河幅十間計り、水清く、河中には充滿して柳樹密生す。余は喀爾喀河を以て非常の大川ならんと思ひ居りしに、今此地に來り、其の僅かに河幅十間許に過ぎざるを見て大に意外に感ぜり。河に接して直ちに一丘陵の起るあり、其の丘陵の上を東に向つて進む事となる。即ち河は丘陵の直下を流るゝなり。

此の丘陵の縁に添ひて進む中に、面白き事實を發見せり。其は丘陵の潰れたる跡に於て、

喀爾喀河畔
の遺物

古土器の破片非常に多く散在し居る事なり。即ち車を下りて其の調査に従ふ。此の古土器は他のものに比して、多少新らしき時代のものなるが如けれども、蒙古人の所謂クキル人の遺物と同一形式にして、白色、黒褐色等の陶器をも交へ、又た鐵鏝の存するをも見たり。之等に據りて考ふるに、時代は少しく新らしけれども、此の遺跡を遣せしは、潢河流域一帯の地方に居住せしものと、同一民族なるや明かなり。

遺跡

當時の住民
貝類を食す

又た此の遺跡にて最興味ありしは、竈の跡を發見せる事なり。其の構造は、土を練りて作れるものにして、厚さ一寸高さ五寸、長さ一尺五六寸位なりしと思はるれど、久しき歲月を経過する中に破壊せしもの、如し。其の形状は、今日の蒙古人のそれと似たる點あり。殊に珍らしきは、此の遺跡中より貝殻を見出せる事なり。是れ當時此處に住める民族の、ツェルノール湖より貝類を採り來りて、其の食用に供せしを證明するものなり。

余は以上の遺跡に就て、其の如何なる民族の殘せしものなるかを蒙古人に質せるに、たゞ古き時代に此處に人の住ひたりと云ふ答へのみにて、内蒙古に於ける如く、一人もクキルの手になりしと云ふ者なし。こは大に注意すべきものとす。

遺跡の調査を爲せる後、丘陵の上を更に東力に向つて進めり。斯くしてチャガンオボ村よ

シオンホタ
ブントロガイ
村

り三十清里計りにして、シオンホタブントロガイいと稱する一村落に達せり。日未だ高かりしも、今夜は此處に一泊する事とし、村内にて最も富める家に入れり。

バラカ人の
無禮

シオンホタブントロガイは、五六戸の家よりなる小部落にして、地は喀爾喀嶺なれども、住民はバラカ人なり。此の附近のバラカ人は人氣愈悪しく、余等の入れる家の者は、余に對して種々の質問をなし、又た余等の面前に於て煙草を煙らせり。元來蒙古の禮として、客には喫煙草入を出すを普通とする處なるに、彼等は敢て斯の如き無禮を爲すに見ても、其性質の一層慥然たるを知るべし。

バラカ人の
體質

バラカ人の體質上注意すべきは、彼等の中、皮膚の赤色を呈し、眉毛、頭髮等多く茶褐色を帯ぶるものを見る。又たその顔面は扁平に、頭は廣く、體質大にして横に扁平なるが如き事なり。是は前々日宿泊せるバラカ部落にても然かりしが、此の村のバラカ人の體質も亦然り、此は餘程注意すべき研究資料ならん。

家人の好遇

余等の入れる家にては、出来るだけ余等の待遇に努めたるもの、如く、又た此の家の子息は愉快なる男にして、此の附近の事に關し種々の談話をなし、余等は大に利益を得たり。彼は年齒二十三位、其の弟に一人の喇嘛僧あり。是は兄に比して性質悪きもの、如し。

ソロン民族
ダウール民
族

ソロンに向
はんとす

喀爾喀人
せず

徹夜荷物を
整理す

此の村の位置は、喀爾喀河南岸の丘陵上にあり。河を隔て、直ちに黒龍江省と相對す。住民はバラカ人にして、此の村より一日行程計りにしてソロン民族(Solons)の部落に達するを得可しと。ソロン族は蒙古人と、ツングース族(Tunguses)との中間に位する民族にして、人種學上興味ある民族なり。ソロンの東にはダウール(Daurians)と稱する民族の住むあり。而して、ソロン、ダウールより更に東方に進めば、彼の有名人なる黒龍江の流れに出づ可く、此の附近より沿海州迄、即ちアムール河流域地方は、大部分ツングース民族の住處なり。余は彼れの談話に據りて、ソロン人の部落迄、僅かに一日行程にて達すべきを知り。其の研究の爲め是非行かんと思ひ立ち、彼に多くの品物と與へ翌日河を渡りて、ソロン迄同行する事の相談を整へしが、喀爾喀人等は危険なりとて應ぜず。大人若し河を渡らば、此荷物を如何せんと思ひしかば、余は余の妻を残し置けば汝等は心配するの要なし、若し余と同行する事を厭ふならば、此の村人と共に行き、其處に一泊して研究調査の上、再び此の村に歸り來らんと云ひ聞かせ、相談漸く決す。余と妻とは殆んど夜を徹して荷物の整理に従へり。

五 ソロン探險の失敗

ソロン探險
の準備

六月三日、余は此の家の若主人を隨へてソロン探險の途に上り、同地に一泊して再び此地に歸り來る事とし、其の間は余の妻及び幸子を此の家に留め、荷物を盪せしめん考へにて、前夜は妻と共に供物の整理其の也の事に従ひ、まどろみしは漸く天明の頃なりしかば、殆んど眠る間も無く起き出てたり。

此家の若者
の違約

余は前夜、此の家の若主人に案内者として余に隨行するは勿論、車、人夫等の周旋を約し置けるを以て、朝起き出て凡ての準備を整へ其の來るを待ちしに、一時間を経るも二時間待てども彼は姿も見せず。余は不思議に感じ、余の隨行のタイチに命じ、若主人を此處に呼び來らしめんとせしに、如何なる理由か彼は來らず。再三、再四に及びて漸く出て來り、平然として余に語りて曰く、昨夜は同行の約をなせしも、今日は行くを得ずと、余即ち、彼れが違約の不都合を責め、余等も斯く迄旅裝を整へたるに、今に至りて同行するを得ずとは何たる事ぞや、若し本日同行するを得るものならば、前夜に於て余にかゝる約束せざるこそよかりしにと責めたるも、彼は如何しても本日は同行し難しと言ふ。前夜堅き約束をなしながら、今に至りて急に否むとは兎に角不思議なり。

此の家の若主人、斯く同行を拒む以上は、余は單身ソロンに向はんとせしに、喀爾喀より

三
隨行し來れるタイチは、頻りに其の中止を嘆願して止まず。是には何等かの事情ある可しと考へしかば、余は今の理由を若主人及びタイチ等に訊したるに、其の言ふ處亦一理あるが如し。

即ち、余は前日の條に於ても既に述べたる如く、此の村落は喀爾喀河の南岸に位し、河を渡りて北岸は純然たる黑龍江省にして、即ち既に外蒙古の土地に非ず。ハイラルのアンバンに屬し住民はバラカ人にして、ソロン族は更に其の北方に居住し居るなり。然るにバラカ人は喀爾喀河を渡りて其の南岸及びツェルノール湖畔迄廣く居住し居るを以て、喀爾喀領とバラカ領とに於て、兩民族の争論は常に絶えず、殊に此の附近に於て最も甚しければ、バラカの方よりは殊にメリーンの住人を此の村に住はせ置く程なり。前にも屢々言ひし如く、バラカ人は慄悍にして、且つ排外の念男女を通じて盛なり。殊に其の官吏に至りては傲慢最も甚しく、其人民に下す命令の如き頗る嚴なり。而して余は此の村にバラカの役人の駐在し居るは洵々知らざりしにあらぬも、若し役人に面會して、何を渡りてソロンに行かん事を談らば、事却て面倒なる可きを思ひ、さてこそ竊かに此の家の若主人と相談り、役人に知らさず彼の地へ渡らんとせじなり。然るに余に隨行せる喀爾喀の役人は、常々バラカの役人と相軋轢し居るの

喀爾喀人と
バラカ人と
の軋轢

喀爾喀人若
主人を此し
てソロン行
を中止せし
む

喀爾喀人バ
ラカ人を懼
る

バラカ役人
護照を示さ
ん事を求む

みならず、此の地に駐在し居るバラカの役人に通知案内する事なくして、ソロンの地に渡るに就ては、日頃の鬱憤を霽らし、且つは自ら高ぶるの念より、余のソロン旅行に反對したるものなるが、余の若主人と約束したるを知り、余に説くも其の効無きを以て、即ち此の家の若主人を呼び付け、甚しく是を叱責して其の行を斷念せしめたるにて、本日余等のみ徒らに待ちて車、人夫等の來らざりしは其の爲めなりしなり。之に就て思ひ當る事は、余に隨行せる喀爾喀のタイチ等は、前日來り頻りに、此の地を去らん事を希望しつゝ、ありし事なり。是れは彼等はバラカ人及び其の役人等に、懼れを抱きしが爲なるや明かならざる。然るに、此の時また、バラカの役人は、前日余等を訪問せる傲慢なる喇嘛僧を遣はし、余等に談判せしめて曰く、黑龍江省の方に渡らんとするならば、必ず其の事を記したる護照ある可し。願はくば其の護照を一見するを得んと、然れども余等旅行の最初の豫定は、前は屢々言ひし如く、主として内蒙古地方を旅行せん考なりしを以て、理藩院及び外務部より受けたる護照は専ら内蒙古に就てのみ明記され、外蒙古に就ては一も記載する處なかりしなり。斯く護照に記載無きに拘らず、余等は現に外蒙古を旅行し居るものにして、余等は更に黑龍江省に入らんと企てたればとて、護照に其の記載なきは言ふ迄もなき事なり。されば余等は條文の上よ

役人の要求
を拒絶す

り、黒龍江地方を旅行するの権利資格のなきものなれば、今此の護照を彼等に示す事は、余等にとりて非常に不利益を醸すの恐あり。而して余等の所持する護照は小なるものに非ず、尤も大なるものにして、彼等メリーンの如き輕輩に見する必要なものなれば、余は斷然彼等の要求を拒絶せり。

遂にソロン
探險を中止
す

余も亦護照の條文を犯して迄、強てソロンに行くの必要も認めず、其は何れ行くの機會もあらんと思ひて、今回は中止する事とせり。

余等は最初に於て一度メリーン等と會見し、而して彼等にも相當の贈物を爲したらば、或は無事にソロン旅行の目的を遂げたりしやも知らざるも、策此處に出でず。竊かに其の地に入らんと企てしは、或は却て失敗の原因たりしやも測られず。然れども余はソロンの事情其他に就ては多少の智識を得たれば、今後再び其の地に旅行せんとするに就ても多大の便益を得たり。余は此處に此の附近及びソロンの事に關する大略を述べんとす。

各種屬分布
の狀態

今余等のある村落よりハイラル迄は約二三日の行程にして、此のハイラルより齊々哈爾迄東清鐵道は敷設し居らるゝなり。東清鐵道敷設以前は、喀爾喀河より一日行程を隔てたるハイラルを中心として、其の南北方にはソロン民族分布し、ソロンの南方即ちツェルノール

ソロン清朝
に征服せら
る

湖より喀爾喀河に接したる北岸地方はバラカの部落にして、又たソロンの北にはシブシンと稱する民族居住し、東方にはダオル族分布しありたり。而して蒙古人はバラカ部落の南方に、ツングース民族はソロンの北東より、アムール河畔に盛に居住しありたるなり。即ち當時此の附近は、蒙古民族とツングース民族との接觸しありたる場所にして、是等兩民族の中間の種族とも見るべきソロン、ダウール兩族は其の中間地位に居住しありたるなり。即ち人種學上最も興味ある地方なり。

當時に至る迄ソロン民族は武陵桃源の夢を貪り居たりしが、ツングース民族の一派たる滿洲族の、一度崛起して明朝を征服し、清朝を創立して以來、漸次其の威力は、ソロンの土地及び黒龍江流域一帯に及び、是等地方土着の民族を征服して清國の民となし、毎年之に朝貢せしむるに至れり。而して第一に征服せられたるはソロン民族なりしより、彼等は早くより清朝に服従し、其の滿洲八旗の中に編入せられ、ソロンの八旗を編制せし程なり。

狡猾なるソ
ロン人

是等の關係上、ソロン民族は早く既に滿洲化して滿洲語を話し、又た近時は支那語をも口に

ソロンの代
名代

にし、此の附近の土着民族中最も狡猾なるものにして、昔時純朴の俤は全く認むるを得ず。されば烏珠穆沁以北の蒙古人等は、此のソロンの名を以て盜賊、悪人の意味に用ゐる位な

ソロンダウ
イルの人類
學的調査

斯の如く興味あるソロン民族及びダウル民族に就て、人類學上未だ完全なる調査行はれ居らず。單に之等のみを研究するも充分價值ある事にして、又た彼等兩民族の人類學上に於ける位地も未だ確然たらざるなり。余は他日ソロン及びダウルの地に到り、是等の調査研究に従はん考なり。

ソロンは遼
の遺民なり
との説

滿洲人が最初彼等を征服したる際、ソロン民族を遼の遺民なりと言へり。是れが爲めに乾隆帝の時、遼史、金史、元史の中にある人名、地名、官名、物名等を、滿洲語、蒙古語、ソロン語、西藏語にて解釋せる本を作りしが、是れ即ち三史語解と稱するものにして、其の中の遼史語解の最初に於ても亦、ソロンは遼の遺民なるを言へり。之等によりて考ふるも、ソロンは兎に角注意すべき民族なり。

ソロン族の
生活
シャーマン
教

ソロン民族の住居は、蒙古人の如く天幕を用ひず、草小屋の如きものの中に生活す。彼等は尙盛んに其の固有の宗教たるシャーマン教を信じつゝあり。此のシャーマンはバラカの蒙古人も尙之を信じ、興安嶺の山の中に居住する蒙古人中にも此の遺風を存せり。彼等はまた、東清鐵道の敷設と共に、其の地方に支那人、露西亞人の移住するもの頻々た

ソロンとバ
ラカと略爾
略人との關
係

る爲め、自然に其の居住の土地を退くの状態にあり。而して生存競争の激烈になり來ると共に、其の性質一層悪くなりつゝあるが如し。余等に隨行せる外蒙古人の如き、河を渡れば直ちにソロンの地に達するに拘らず、一人として行かんとするものなく、彼等はソロン人は殺人をなし、又た財物を掠奪すとて非常に恐れ、自分等と全く異なる人種なりとの意を固にしつゝあるが、バラカの蒙古人はソロン人とは殆んど同胞の如き考を持ち居り、略爾略人等の如くソロン人を悪評せず。之等の事實を綜合して考ふるに、バラカ人は外蒙古の蒙古人とツツ異なる民族との中間に位するもの、如く思爲せらる。

余はソロン行を中止したれば、最早此の地に留まるの必要なく、且つ後日再び此の地に來らんと思ひ、即ち車を命じて出發する事とせり。

余の出發と
共に鹽花を
撒く

余等の宿泊せる家の主人及び妻、主人の母等は、役人よりは嚴しく叱られ、余等にも亦散々責められたれば、彼等は心中非常に激昂したるもの、如く、余等の車に乗りて將に其の家を出でんとするに際し、彼等は急ぎ様に、余等の前夜宿泊せる天幕を燃み、又た外に向つては食鹽を振り撒けり。此は蒙古人等の其の家の穢れを清むる爲めの風習なり。余は此の所を見て、此の家の主人に對ひ、散々叱言を言ひたるが、又た退いて考ふるに、是によりて蒙古人

面白き暗令

の面白き風習を見得たるなり。物を清める爲めに鹽水を撒く風習は、他に於て餘り見ざる處、古くより我が國に於て行はるゝ風習なり。此の風習の日本及蒙古に存するは、蓋し偶然の符合に非ずして、此の間何等か面白き意味の存する無きやを感ぜしむ。

余等は車數臺及び人夫を此の村より微發して出發せしが、人夫等喀爾喀河の沿岸を盛んに馬を走らして進めり。此の附近の地形は全く丘陵にして、其の蜿蜒は非常に大きく、一の蜿蜒を越ゆれば又た次の蜿蜒に差しかゝる、斯かる道を東方に向つて馬を驅る事二十清里計りにして一村落到達す。天幕張りの住家數軒あり。

バラカ役人を
鑑みす
大佛寺

バラカのメリオンは此の村に出張し居りたるが、余に隨行せる喀爾喀のタイチの紹介にて余に面會を請ひ、而して余に車を降りて所持の護照を示さん事を求む。余は之に對し、此の河を渡れば黒龍江省なるを以て、護照を示さざる可からざるも、此の地は尙喀爾喀の領地なれば貴下に見する必要無しと言ひ捨て、車よりも降らず直ちに馬を驅りて出發せしかば、彼は暫らく茫然たりき。彼は常に此村に駐在し居るものゝ如し。此の村を出て、より若者等は、一目散に馬を驅りて進みしが、道は漸次上りとなれるものゝ如し。斯くして進む事更に二十五清里、喀爾喀に河岸に達す。此處をインゴロハンソムと稱す。

珍らしき石
佛

蒙古語にてインとは大、ゴロハンとは佛、ソムは廟即ち大佛寺の意味なり。此處を何故大佛寺と稱するやと言ふに、其の名の示す如く大なる石佛あるが爲なり。此の石佛は喀爾喀河の南岸に、自然に露出せる岩石に彫り付けたるものにして、此の岩石は凡そ四十度程の角度をなして傾斜し居るを以て、石佛はバラカの方を見つゝあるものゝ如き位置にあり。かく露出せる岩石は此處のみにして、この岸及び前岸には見えず。而して此の佛像は觀音菩薩にして、岩面傾斜し居る爲め近より見れば恰かも佛像の寝ね居る形なり。佛像は長さ四丈幅三丈許あり。岩石に白色を塗りたる上を尙ほ、赤、黒、金等各種の色を以て彩れり。之に近づく時は、餘りに大なる爲め其の全體を見難けれども、少しく離れば分明に觀るを得べし。思ふに喀爾喀河の北岸即ちバラカの方よ望まば、美事なるものならん。佛像の周圍は煉瓦石等を以て圍めり、又た其處に一喇嘛廟あり。是は喀爾喀王の會て石佛を修繕したる際に建てたるものにして、今は殆んど荒れ果て、僅かに二三人の僧侶の、いと憐れげに住むあるのみ、然れども石佛の下にある廢屋及び此の喇嘛廟等に見るも、當時の盛んなりし佛は之を偲び得べし。喀爾喀人等は此の石佛は、今の喀爾喀王の父君の時に作りたるものなりと言ひ居れり。

余等は此處にて種々の調査をなし、又た寫眞の撮影をも試みたるが、寺院より茶を出せし

かば暫らく休息して更に行を續けたり。

此の附近より喀爾喀河の流、手にとる如く眺めらる、殊に石佛の頭部の邊に登れば眼下に見下すべし、又た此の附近の地形は喀爾喀河を中に挟みて、兩岸は際涯もなき丘陵をなせり。

喀爾喀河

喀爾喀河は河幅五清里許りもあらんかと思はるれど、此の日は帶の如く處々に水の流るゝあるのみ、且つ水亦淺し、然れども一朝雨期に際せんか、水量俄かに増加して容易に渡るべからずと云ふ。而して河の北方は低き丘陵一帯に連亘し、ハイラルの方に至る迄、殆んど高き山を見ず。頗る變化なき丘陵なり。余は此處にて地形に關する調査をなしたり。

インボロハンソム附近は、前にも述べたる如く、荒れはてたる寺院に、喀爾喀王府より來り居る二三の僧侶の外は、住民悉くバラカ人にして、彼等の天幕少許を見るのみなり。

余等の此處迄乗り來りし車は是より歸らしめ、此の村より他の車を徵發して行程を續くる事とせり。暫くして車及び此の村のタイチ來りしが、皆バラカ人なり。午後及び此處を出發し、威勢よく馬を走らし、喀爾喀河南岸の丘陵を更に南東に向つて進む。

百花棚漫たり

此の地は恰かも草花満開の候とて、蒲公英、蓮花草、董等の今を盛りと咲き競ふを見る。余等即ち車を下りて之等の草花を採集して更に行を續く。且つ喀爾喀河岸の丘陵上を進み行

前岸ハイラルの地を進むホデルチルク村

く事なれば、前岸にハイラル附近一帯の地を望み、風景頗る佳なり。

依然喀爾喀河に沿ふて進む事二十五清里計りにして、一村落實ホデルチルクと稱する地に到着せり。時に午後三時頃なりき。此處も亦バラカの村落にして、天幕三四軒許りあり。

最も富裕な家

余等は村内最も富裕なる家に入りたるが、元來バラカ人は富裕なるに此の家は特に最も富み居るらしく、多数の馬を所有せり。又た此の家の主人は温厚なる男にして家族は其の妻及び娘等なり。彼等はいくしく立ち働き、余等の爲めに饅頭を打つ等、一行に對し非常の饗應をなせり。余は食事も諸種の調査に従ふ。

インボロハンソムより余等に隨行し來れるタイチは、年齒四十を少しく過ぎたる位、其の體格強壯なると共に、亦頗る快活なる男にして、余は彼よりソロンの事、バラカの言語其他の事情及び、ハイラル附近の地形等に關し、種々の話を聞き大に利益を得たり。

タイチ、若者、車等は此處より歸し、更に此の村より若者、車等を徵發して出發す。バラカ地方の車は外蒙古の如く大にして、又た彼等は多数の馬を飼養するを以つて、喀爾喀地方に比して旅行大に抄取れり。此處にても車は多くの馬に曳かされ、馬を走らし喀爾喀河に沿へる道を南に向ひ、丘陵の蛇りを或は上り或は下りつゝ進みしが、此の附近にては其の波動

珍らしく山
を望む

チヨクスン
ブル村

牛馬三千餘
頭を所有す
る大富豪
大富豪余等
を歓迎す

大なる爲め、甚しく凸凹を感ぜず。漸く進み行く程に、東方四十清里計り隔りて、山の如く高き丘陵を望む。此の山は二つの峰より成り、其の北方なる峰をヌスクンオーラ山と稱し、南なるをダラハンオーラ山と呼ぶ。此の附近にて山を見るは珍しき事なり。漸く道は心計りの上りとなりしが、同じくマンハの丘陵なり。日は西に没せんとしつゝあれども、途中宿るべき人家なし。斯くして二十清里計り進みし頃、何百頭とも数を知らざる多数の馬の群れ居る處に達せり。是れチヨクスンブルと稱するバラカ人の部落なり。

此の村には大富豪のバラカ人居住し、牛馬三千餘頭を所有すと云ふ、今しも其の家僕の、牧場より之等多数の牛馬を追ひ來れるに會したるが、最も勇ましき光景なり。余等は蒙古旅行中斯く迄多数の家畜を有せるものは、此處に始めて見たる位なり。此の部落の組織は、一人の主人ありて、他は總て其の家來たる關係にして、即ち全村が家族をなし恰かも我が國に於ける家子郎黨の如きものなり。

余等の此の村に達せる時は、既に暮色蒼然たる頃なりしかば、隨行のタイチ、余等に先きだち馬を其の部落に驅りて、此の家に一泊を申し込みしに、彼は喜んで之に應じ、其の散在せる天幕の中間に、別に美しき天幕を張り、圍爐裏を作り、饗應をなす等款待最も努めたり。

余等に隨行せるタイチ其他の者共も、非常に待遇せられたるが如かりき。余は諸種の調査をなせり。

本日の行程は九十清里餘なりしが、非常の良馬に非らざれば斯く長距離を進み得ざるなり。元來此の附近の車の駆け方頗る亂暴なれば、車輪の脱する事往々あり。彼等は車輪を脱するも平氣にて行を續け、車の甚しく破損して如何とすべからざるに到り、始めて前の道を通りて引返し、脱したる輪を拾ひて歸り、更に車を進む等の滑稽を演じ居れり。此の附近は人の行く事少ければ、棄てたる車輪の如き拾ふもの更に無きなり。

六月四日。午前七時此の村を出發す。出發に臨み余は此の家の主人に贈物をなせしに、彼は容易に之を取らざりしが、強て之を收めしめたるに、彼は黽て肩に載せたる銀塊を持ち出て、之を余に贈らんとて曰く、昨夜幸に一泊を願ひしも御馳走するの機会もなく禮を失せり、此は些少なれども、前夜の無禮を謝せんが爲め贈呈したしと、余は我が國の風習として、人に金錢を受くるは、卑しむ可き事なりとて彼に返したるが、是等に見るも富裕なるを知らん。余はまた出發前に寫眞を撮影せり。(此處に挿入せる即ちその一にして、男は其の主人小女は其の娘にして、踞ける女は其の召使ふ下女なり)バラカ人の體質、風俗等は之に據り

蒙古人の無
類着

蒙古人余に
銀塊を贈ら
んとす

て観察するを得べし。

寫眞を撮影したる後、愈々此處を出發す。少しく東に片よりたる南方に向ひ、例の如く車を一目散に驅りて進む。途上の光景は、右も左も高原にして、前方丘陵的の山を望む。進む事十五清里計りにして、道は河床に下るに到る。此の附近に於て余は前の各地に於て得たると同様なる、クキル民族の遺したりと言ふ、土器の破片、褐色の陶器、石鏃の破片等を拾ひ得たり。之に依りて考ふれば、昔時此の附近にも、同民族の居住しありたるを知らん。而して其の遺物の有様を見るに、潢河方面に於けるものと少しも異ならざるなり。

是迄進み來りし道は専ら丘陵の上なりしが、此處にて丘陵の崖を下りて低き平原に出づ。此の平原は昔時湖水なりし跡とも思はるゝものにして、曹達質を帯びたる白色の粉を吹き出し居るを見る。之れあるが爲めに蒙古人等は此處をホテルオランと稱せり。余等は道を東南の間にとり、平原を通して進みしが、平原には一面に若草崩れ出て、且つ黄、紅、白、紫等各種の色美しき草花の咲き亂るゝを見る、余等は此處にても、例のクキル民族の遺物たる土器を得たり。其の他青銅、鐵の破片及び光の日發見せるが如き、ツェルノール湖産の貝と等しき貝殻の破片の存在するを見たり。此の貝殻は當時の住民、ツェルノール湖より持ち來りしものなるか、或は又た此の地往古湖水にして、湖中此の貝を産せしものなるか、全く疑問に屬すれども、兎に角注意に値する事實ならん。

クキルの土器及び石器

湖水の跡

黄紅紫白の花咲き初る

土器石器等の遺物

ウルテントホ村

此の附近より平原の道漸く上りとなりしが、前夜一泊せるチヨクスンブルより來る事三十五清里計りしてウルテントホと稱する一村落に達す。時に正午十二時頃なりしかば、余等一行は此處に下車して、晝飯する事とせり。此處も亦マンハ中の一村にして、バラカ人の部落なり、余等は此處にて諸種の調査をなせしが、余等の休息せる家の主人は、最も丁寧なる男にして大に余等を饗應せり。晝飯了りたる後、朝來余等に隨ひ來れる車、若者等は歸らしめ、新に此の村より徵發せるものによりて旅行を繼續す。

此の附近はマンハの砂地にして、車を馬に牽かしむる事困難なれば、駱駝を用ふる事行はる。されば余等の車をも駱駝に牽かして出發す。之より道の傾斜漸く甚しく、漸次上りとなり來れり。途上一の人家も認めず、唯だ丘陵を上り行くのみ。道マンハなれば馬ならんには、頗る困難なるべけれども、駱駝なれば困難の度も少なきが如し。此の附近一面に綠草生じ、點するに黄紫紅色の草花を以てし、其の華麗言語に絶す。此處に生ずる草には諸種のものあり。黄色の粟粟の如き其珍なるものなり。こは蓋しチシマヒナゲシに似たる Paper

マンハの道を駱駝車にて進む

種々の草花

alpinum von croemmiなるべし。此の花に就て余等は、駱駝を牽きて随ひ來れる喇嘛僧に尋ねたるに、其の古き名をオンマニバトメフンと稱すと、而して此の花は向日葵の如く、太陽に随ひて花の方向を轉すと云ふ。尙此の花に關して一の物語りあるらしと思はれたり。其の他チヂアヤマ、フスレナ草の屬 *Trientalis* (勿忘草) の如きものもあり。余等は各種の草花を出來得る丈採集して行を續く。

又た此の喇嘛僧の語る處によれば、喇嘛の僧侶中には、醫事に従ふものあり。彼等の使用する醫藥は、悉く此の附近の山野にある藥草を用ふるものにして、其の種類三百餘種に上ると云ふ。

喇嘛僧の醫藥

塔湖

余等は之等の談話を交へつゝ、又た草花を採集しつゝ、車を下り徒歩にて進みしが、一は道困難にして氣の毒の感ありしが爲めなり。主として南方に向ひ、上り／＼て進む事四十清里計り、上は平地にして地は濕氣を帯びたる處に出たり。其處にまた水の湛へたる池あり。蒙古人は之をサバラガンヌノールと稱す。意譯すれば塔湖の意味なり。此の湖水昔時は今見るよりも大なるものなりと思はる。而して又た、此附近より樹木始めて見え來り、殊に柳は其の主たるものなり。余等は是迄樹木を見ざりしが、此の日始めて之を見て一種珍らしき

始めて樹木を見る

感を惹起せり。湖畔また諸種の草を生ず。

此の湖畔にも亦往時住むものありしと見え、例のクキル民族の遺したる土器破片の、諸處に散在するを見せり。此の附近の地形は、マンハの砂土にして風激しき爲め、常に地上波動線を書き居るものゝ如し。されば此處に存する土器の破片は其の面磨滅し、其の模様等も明ならざるもの多し。以て風力の逞しきを知るべし。又丘陵の上より東南の方を望めば、高き山の前面に當りて横はり、西南方に向つて走るを見る。此の山脈は即ち興安嶺にして、蒙古人等は之を呼ぶにハンオーラの名を以てす。巴林、阿喇科爾沁、東烏珠穆沁等の蒙古人の稱呼と同一なり。余等は今興安嶺の方に向ひて進みつゝあるなり。

此の時、夕陽西に斜ならんとし、何方を見るも人家なく、たゞ樹林の間を當て度もなく進みしが、行けども／＼村落に達せず。既にして日全く没し、天空弦月を懸け、星二つ三つ輝き出づる等、一種言ふべからざる詩情をひき起さしむ。

余等の一行は駱駝車に騎して、湖畔の道を漫々として進み行きしが、日既に没するも人家に達せざれば。隨行のタイチは人家を捜さんとて、馬を驅りて先に進みしに、彼れ亦容易に歸り來らず、余等は依然樹林の間を進み行く事少時、遙か彼方の樹間より、急にタイチの呼

クキルの土器

遙かに興安嶺を望む

沙漠中の弦月

聲を聞けり。同時に二人の蒙古人の余等の車に向つて進み來るあり。是れ余等を案内せんが爲めに、此處迄出迎へたる者なりし。彼等と連れ立ちて進む事更に五清里計りにして一村落に達す。時に午後八時を過ぐる頃なりき。余等は村役人の家に一泊する事とし。直ちに其の家に入る。此の日の行程八十五清里。

ウツムレン村
フブチン王領を離れて
フブチン王の地に入る
アラカ人を
見ず

此處は其の名をウツムレンと稱する一小村落にして、戸數は五六の天幕あるのみなり。余等の是迄進み來りは、主としてツェルノール湖及び喀爾喀の南岸に沿へる地方にして、其の管轄は喀爾喀王領中の、フブチン王の管轄に屬するものなしが、此の村落附近よりはデツタバイシン王の管轄に屬し。フブチン王の治下に非ず。而して兩者の境界は、此の日余等の通過せる塔湖の附近なるが如し、村の住民は純然たる喀爾喀の外蒙古人にして、またバラカ人を見ず。是より以後余等はデツタバイシンの地を、旅行する事となれるなり。

六 デツタバイシン領

寶丹の蒙古名

六月五日、愈々デツタバイシン王府の方に向はんとす。出發に先だち余は此村附近の、マシンの潰れたる處を探りて諸種の研究をなし、石鏃の屑等を得たり。前日來余等に隨行し來

デツタバイシンの風俗

此の附近の風俗に就て觀るに、前のフブチン王治下の蒙古人と相似たり。然れども兩者の異なる點の著しきは、此の附近の男子はバラカ風の帽子を用ふるに、フブチンにては全く之を用ひず。何れも端の尖れる毛の帽子なるが、此處にては鳥打帽子の如き形せるものに、錦の如き布切にて細き縁をつけ、之に赤き總を中央より垂らしたるが如きものを用ふ。是等の外は兩者の間に著しき差異を認めず。

珍らしき尖

余等は車を命じて此の村を出發せしが、此の車の中に五本の矢を吊しありき。余は其を調べたるに、其の矢筈の處に當り、小さく短く切りたる木を四本計り縛りつけ、羽を其の木幹にすげたり。余は斯る種類の矢を他に見たる事なく、實用には適せぬらしく考ふるが、如何なる事に用ふるものと訝しく思ひ、是れを此の家の主人に尋ねたるに、其はフブチンに用ふるものなりとの答を得たり。此のフブチンと云ふは、死者の魂魄を再び其の家に呼び迎ふ

フブチンの儀式

第十 喀爾喀王府より内蒙吉東馬珠穆沁